明治三十一年二月二十四日發行

女鑑

第百五十三號

東京國光社

女鑑第百五拾一號

目録

女鑑

華族社會に望む……一

論説

結婚と離婚と……斗南……六
安心立命……三輪田眞佐子……一〇

史談

寶皇女……五十園德文……一四
節婦順女……鹽井ふく子……一六

家政

折形……有住齋……二一
茶の湯……關葉雄……二二
女禮……有住常子……二五
たちぬひ……西山たい子……二七
造花(卅七)……伏見藤三郎……二九
たいごころ……三〇

學園

秀歌集(十六)……鹽井正男……三二
ふくろ入添……下田義天類……三六

漫録

主從心得草(續)……諏訪忠元……三九
詠歌要意(續)……吉田久劔……四一
北の海路(第三信)……石榑千亦……四一
養痾漫筆(其三)……親々書屋主人……四六
情の一夜……紫光……四九
奇習……四海坊……七五

オくらべ……蓬生屋女史……六〇
笑話……かゝみ……六一
まつの庵(三)……白魚女史……六二

文林

歌……近衛忠煕……六六
仝……久我建通……六六
仝……鍋島直大……六六
仝……高崎正風……六六
仝……長谷信篤……六六
仝……水野忠敬……六六
仝……西三條實義……六七
仝……諏訪忠元……六七
仝……宮地嚴夫……六七
仝……小出粲……六七
仝……大口鯛二……六七
仝……大畑弘國……六七
仝……下田義天類……六七
仝……三浦千春……六七
仝……三輪義方……六七
仝……佐々豊水……六七
仝……藤井行麿……六八
仝……草野隆道……六八
仝……足立正枝……六八
仝……菊地眞澄……六八
仝……宇井正夫……六八
仝……龜谷行……六八
仝……安齋篤敬……六八
仝……伊藤純三……六八
仝……木庭芳香……六八
仝……伊東祐賢……六九
仝……近衛貞子……六九
仝……前田朗子……六九
仝……西四辻茂子……六九
仝……松平健子……六九
仝……下田歌子……六九
仝……諏訪晴子……六九
仝……小池道子……六九
仝……北島以登子……六九
仝……南郷柳子……六九
仝……原田蒼牛子……七〇
仝……鵜久子……七〇
仝……内田遊歌子……七〇
仝……海上嘉子……七〇
仝……高橋美代子……七〇
長歌……下田義天類……七〇

雜報

紀元節……七〇
[illegible]宮……七〇
小松宮御婚儀……七〇
歌御會……七四
毛利元總公の歌集献上……七六
豊公祭の唱歌……七六
神を敬ひ……七七
日本一の櫻の大樹……七七
菊地文部次官のはなし……七九
女學生……七九
看護婦養成の内議……七九
明らけく……八〇
錦を衣て故郷にかへる……八〇
孝子の紀念碑……八〇
孝婦……八一
貞婦……八一
仝じく……八一
子孫百二十七人……八一
屋根の上に筍……八二
琉球新報……八二
新刊批評……八二

教の庭

兼題歌數百
文數十章

―答―

口繪……高橋松亭
挿畫……木村下嵓

節婦順女



華族社會に望む

國家の美ならむことを思はゞ、先づ、國民の美ならむことを願はさるべからず。國民の美ならむことを思はゞ、先づ、敎育の美ならむことを考へざるべからず。これ、國家の美は、必ず、國民の美に依り、國民の美は、必ず、敎育の美に依るものなればなり。

されば、敎育なるものは、國民の最も大切に、最も貴重なる事業にて、日に是れを考へ、月にこれを計り、いよ〳〵美はしく、いよ〳〵めでたく、高く進ましめざるべからず。

現今の我が敎育事業を見るに、着々と歩を進め來りて、殊に男子の敎育の如きは、大に見るべきもののあるに至れる如し。されど、女子の敎育に至りては、なほ全く未だしき境に在りて、いと低く、いと狹く、未ださせる見るかげもあらずとれば

ゆ。はやくこれを計り、これを進ましめ、男子の教育の進歩と共に相伴れ立ちて進ましめざるべからず。これ、男子女子は、必ず相伴れ立ちて、美なる一家を作り、美なる一國民を爲すべき者なればなり。いかばかり高く美はしき男子あらばとて、女子の卑く惡しからむには、到底美なる一家をなす能はず、ましてや、美なる國民をや。されば、女子の徳、女子の智は、必ず、男子の徳、男子の智と相伴れて進まざるべからず。女子も、必ず男子と相伴れて教育せざるべからず。もとより、仝じ教育を爲すべしといふにあらず、男子は男子として美はしからむやうに、男子の教育の進むると共に、女子は女子として美はしからむやうに、女子の教育を進めざるべからずといふなり。男子女子はなほ天地の如く、幹根の如く、柱梁の如く、手足の如く、必ず相待ちて相共に存ずべきものなればなり。

さるに、現今の女子教育場裡を見るに、高等女教育を授くる學校なるものは、極めて少し。而かも、其の少數の所謂高等女教育の學校と稱するものを見るに、其の志す所、其の施す所、大かた完美ならず。稀れに、一二のやゝ美はしげなるも

のありといへども、其の經費の乏しきと、其の規模の小きとによりて、思ふやうに多數の子弟を教育する能はず、されば、こゝに入らむとするも、容易に入る能はず、折角志ある父兄子弟をして、空しく其の道に進む能はずしてやましむる恨みはもとより、或は、やむなくて、いやしき營業的の女校に入り、或はあやしき異教的の學校に入らしめて、終に、我が純良無垢なる女子をして、いやしき汚き醜女たらしめ、或は、心も行も國風に反したるあやしき怪物たらしむるに至る。誠に悲しく口をしき次弟ならずや。

斯く、現今の女學校の頼むべからざる事は、我が女子をして、いよ／＼美ならしめんとする高等女教育上の一大欠點なり。而して、また、他に一般の女子をして高等の教への道を蹈ましめんとするに、一大障碍と成るものあり。これ、やがて我が國民の資産の貧き事なり。我が國民には、衣食住には事欠かぬも、されど、女子をして思ふやうに高等の教へを學ばしむるまでの資産に事欠ぐ者多し。これ、實に我が國民中の大部分をしめ、我が國民の勢力の大部分を成す所の者にて、國家

の敎育の如きは、此の部分を中心として、これに留意して計畫せざるべからず。然れども、この階級は、男子をして學ばしむる學資はあるも、女子をさへに高等の敎育を受けしむるには、志はあるも、やゝ資産の乏しき者なり。故に、吾人は、充分の資産ある者が、幾分かこれを助けて、其の志を遂げしめむ事を望む者なり。現今の女子敎育塲裡には、完美なる良校極めて稀れなり。故に、吾人は、資産ある者が、其の資力の幾分を投じて、完美なる良校を起さむ事を望む。また稀れに良校の現存するも、經費乏しく規模小く、充分に其の功を奏する能はず、故に、吾人は、資産ある者が、これを補助せんことを望む。また、我が國民の大部分は、前陳の如き境遇なり。故に、吾人は、資産家の補助を望む者なり。斯くして、資産家が、我が國の敎育塲裡に、其の資産の幾分を投じて、我が社會の公益の爲めに盡力せんことをこそ望むなれ。

而して、吾人は、此の公益の事業に於て、我が華族社會をこそ、最も適當なる資産家と思ふなれ。華族は、我が國民中にて最も名譽の位置に立つ者にて、また、最

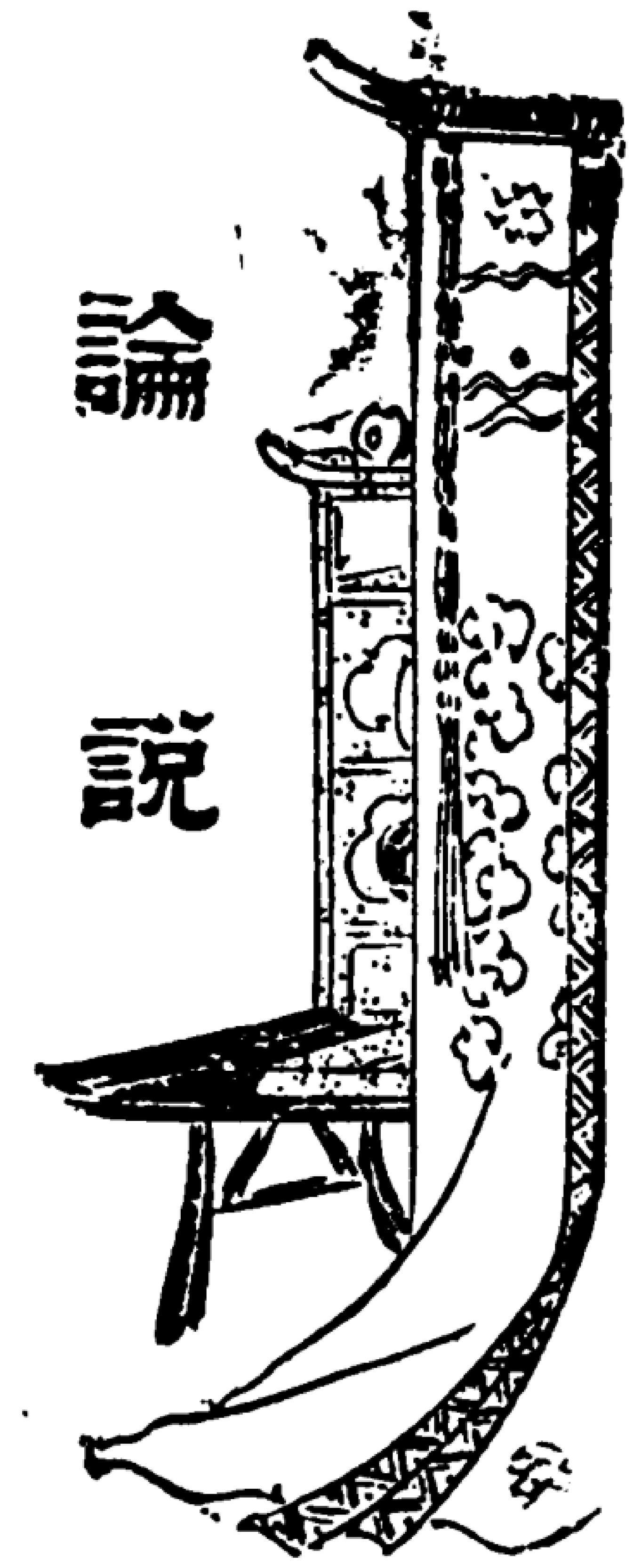
も國家の恩惠を擔へる者なり。而して、資產も充分なる者なればなり。敎育の事業は、最も大切に、最も尊ぶべく、最も名譽なる事業なり。限りなきの名地に立ち、限りなきの恩惠をうけ、充分の資產ある華族社會が、最も適當なる事業ならずや。吾人は、實に華族社會の爲めに熱望して止まざるものなり。

烈鴛鴦

源峰雄

成化六年神無月天縦といへる湖にて。漁する翁舟こきめくるに鴛鴦あまた岩根岸かけなとにむれゐたるを見て何となく棹もて打拂ふに。おのづからあまたが中には度々はらふにつけて雄鳥ひとつ打あてけり。はね打折ければふためきさはぐを舟さしよせてとりつ。けふは風吹波あれておもふばかりのいさりもあらし。さらはこれをさかなにあてゝ酒のみてんとて。釜に湯をたきらしなとするに。彼めとりかなしめるにや。舟をしたひきたりうらめしけに鳴つゝ飛かけりけるが。翁何ともおもはす今は湯たきりぬとて雄鳥の翼をつかねたるに向いきのこりてめをしはたゝくを。其まゝ釜の蓋とり湯玉のふつふつとわきあがりける中に打入てゆひくに。雌鳥これを見悲に堪すおのれも釜の中に飛入てともに煮られてけり。夫婦ば偕老同穴といへる人の世の類にもかよひて哀つきせすなん。

論説



結婚と離婚と

斗南

人生五十年、或は喜び或は悲む、吾人の一生涯を通して之を觀るときは、喜怒哀樂の來ること恰かも波瀾の如く、其散するやまた實に雲煙の如きものあり。故に若し苦樂悲歡の微小なるものを擧けんには、無數無限にしてその止まる所を知らすと雖も、人間一代の最も注目すべき時期に際し、人生第一の義務とも云ふべき婚姻の儀式は、是實に人生禍福の關門にして、此際得たる所の幸福は生涯之を保存すべく、此際失ひる所の禍害は終生之を回復する能はざるべし。婚姻その者は人生免る可らざる必至の務なりと雖も、誤りて時期を得ず、若くは人物の不適當なる事あらむ、婚姻は却て不幸の源となり、人生哀苦中の最大哀苦たるに至らん、婚姻の愼しまざるべからざるは則ち之れが爲めなり。故に文明の國民は、一般に婚嫁の重すべく、離婚の戒むべきを知り、敢て之を濫りに行はすと雖も、未開蒙昧の人民に到ては、哀別離苦の何者たる

を解せず、重婚あり、濫婚あり、或は全く婚嫁なく、夫妻の區別なきに到る。之を以て結婚と離婚との多寡を比較するときは、其國民の文化の程度を測ることを得べし。或

一國の文野開否は種々の點に現はれ、或は人口の上に於て、或は敎育の上に於て、或は商工業の上に於て、其他內外に於ける公私百般の事物に依て之を徵知すべしと雖も、其國民の結婚及離婚の多寡增減は、當時の實情を卜するに於て最も必要の一材料たり。素より婚姻に關する儀式習慣の如きも、其國の文野を現はさゝるに非ずと雖も、吾輩の茲に說かんと欲するは此に在らずして彼に在り。則ち結婚と離婚の比較及び增減是れなり。一國の人口增加すれば婚姻も增加すべく、婚姻增加すれば離婚の增加するも亦自然の勢なりと雖も、離婚は決して自然に放任し置くべきものに非ず、道德上より、社交上より、風俗上より、時に法律上より、之れに制裁を加へ、以て其減少せんことを計らざるべからず。結婚は姑く自然に放任し、早婚濫嫁の弊を防がば足らん、然れども離婚は慘事なり、殊に女子の禍福進退に關して最も然り。女子の一生涯に於て怖るべきものは、實に死と離婚の二者に若くものなし。

死と離婚、是れ人間の不幸なり。是れ女子の不幸なり。然れども、死は、古今東西如何なる人類と雖も之を免るゝを得ず、故に死は平等なるものなり、一度生るゝ者は早

晩必ず墓中の人たらざるべからず、唯其時期に長短あるのみ。故に死は怖るべしと雖も、是れ一人の不幸に非ずして世界人類一般の共に享くる常數なれど、是れ天命にして人事に非ず。人力を以て得て防ぐべからざる範圍に屬す。惴々として之を怖れ、戰戰として之を避くるも、將た何の効あらんや。故に死は恐るべくして又怖るべからざるものとす。然れども、獨り離婚に至りては、天命に非ずして全く人事なり。人力を以て動かし得る事件にして、其禍福と云ひ、正邪と云ひ、苦樂と云ひ、離合と云ふものは、凡て人力もて支配し得べきものなり。故を以て離婚の惡弊を矯むる責任は、天に在らずして人に歸す。苟も結婚せんとする者、若くは既に結婚せる者、各自ら警愼せずんぞ、將た何者か之を保護せん。

明治二十七年末の統計によれぞ、我か邦の人口は四千一百八十一萬三千二百十五人にして、内男子二千一百十二萬二千八百九十九人、女子二千六十九萬三百十六人にして、同年に於ける結婚數は三十六萬一千三百十九、又離婚數は十一萬四千四百三十六あり。故に結婚三に對する離婚は一餘にして、結婚を望むもの三人あれぞ、離婚を求むるもの一人あり。換言すれぞ、六人の夫妻中、四人の夫妻は幸福なる家庭を造るも、二人の夫妻は憤々囂々の慘境に居る者なり。之を國力の上より見るも、社交の上より見る

も、道徳の上より見るも、是れ豈默過すべきの事態ならんや。三個の婚姻中、其目的を遂するものは二個あるのみ。一個は幸福却て禍害となり、離婚後の汚辱不幸は、結婚前の好望清福と全く相反するを見る。不完全なる結婚、則ち離婚の虞ある結婚は、啻に其夫妻二人の不幸汚辱たるのみに止まらず、餘弊延て第二の婚姻に及び、時に或は社會に影響す。離婚の慘、離婚の弊、豈多言を要せんや。

三婚一離は、是れ決して文明國の現象と言ふべからず。我が國民中に於て年々二十萬以上の離婚男女を出すは、道徳上、社交上、國力上、誠に憂ふべきの惡象にあらざるか。誠に最近數年間に於ける結婚と離婚との比例を看よ。

年次	結婚	離婚	年次	結婚	離婚
廿二年	三四〇、四四五	一〇七、四七八	廿五年	三四九、四八九	一一三、四九八
廿三年	三二五、一四一	一〇九、〇八八	廿六年	三五八、三八九	一一六、七七五
廿四年	三二五、六五一	一一二、四一一	廿七年	三六一、三一九	一一四、四三六

抑、離婚の不幸と汚辱を防がんと欲せば、警戒すべきは離婚後に在らずして離婚前に在り。否婚姻同棲中に在り。否結婚前に在り。不完全なる結婚は實に離婚の因て起る所、故に苟も離婚の弊害を憂ふる者は、先つ結婚の貴重愼むべき事を審察せざるべか

らず。是れ素より男子の警省すべき所、而かも女子に於て殊に其緊切なるものあるを見る。毎歳二十餘萬の離婚男女を生ずるは、是れ斷じて帝國の文明を宇内に宣揚する所以の條件と相容れざる惡象也。

安心立命

三輪田眞佐子

をさ〳〵（花ちらす風のやどりは誰かしる我に敎へよゆきてうらみむ）との感慨なきものは少なからざるべし。されど、榮枯盛衰は世の常とし知らで、さる恨はおのづから發れんかし。思ふに、人は、因果の理の當然なるを口にすれども、その理に安ぜざるもの丶如し、乃ち落花のあはれ、及び人世の衰枯のみをみれど、空蟬の世ばかりはかなきはなからんも、爛熳の美花、及び榮華の人事を想はゞ、吳竹の代ばかり樂しきはなかるべし。斯く物の兩極、及び表裏をともに見て、因果の理を悟らんには、世を厭ふのみも愚なり、樂むのみもよしなきことになん。

されど、吾等は、既に苦樂の中に生る丶ものなるを以て、樂むべきことは能く樂み、哀むべきことは能くしのびて生涯を送る外ぞなき。然るに、人稍もすれば、樂に荒ぶを知りて苦に堪へざる傾きあり。故に、樂を如何に樂むか、苦を如何に苦むかをみて、其

の人の君子なるか、將た小人なるかを卜するに足るべし。

抑、樂に荒ぶものは君子にあらざるが如く、苦に堪へざるものは小人たるを免れざるべし。されど、苦を忍ぶは術なきにあらず。そは、天命を知り、人分を辨ふるにあり。古より、聖人にして短命なるものあり、賢人にして非運なるものもありけり。蓋、積善の家に餘慶あり。積惡の家に餘殃ある理にて、いつしか因果の伴ふものなれど、善惡のむくいは必然なるものなれど、天命と人分の如きは、いかんともする能はざるを以て、これに安せざるものは、終始天を怨み、人をのゝしりて、安心の幸福を得る能はざるべし。

これを以て、世の先覺者は、安心立命の工夫を、同胞に知らしめむやとおもひけん、種種の教を垂れけり。乃ち、宗教の如きは、おの〳〵未來の天國、あるは極樂などを說きて、人類をして現世の苦を忍むしめ、以て社會の安寧平和を務むるものゝ如し。況して、我が國法は、國家に害なき限は、信仰の自由を許すを見ても、亦宗教の目的は、寧ろ惡むべきにあらざるとやなしけん。

蓋、我が國には、未だ民心を一統して、安心立命せしむるに足るべき實力ある宗教なきのみならず、國民の氣質、及び國體の生質上より、譬ひ外國に於て勢力ある宗教な

ればとて、其の教義、及び儀式のまゝにては、我が國に流布すること難かるべし。故に、我が國の宗教は、各自の信仰に委ぬるのみにして、一般人民は、耶蘇教徒にまれ、佛教信者にまれ、將た如何なる宗教家にまれ、悉く日本國民てふ觀念によりて支配せらるべきものぞかし。

さて、あながち宗教によらずとも、安心立命の道なきにあらず。そは、天地の間には眞理なるものありて、これを信仰すれば、天命を知り、人分を悟ること容易なり、加之、宗教は、往々科學と相戾る所あらんも、眞理は全く科學の根源にして、又教育の基く所なれば、現今は兎まれ角まれ、人智の進歩とゝもに、將來は必ず、宗教を信仰して安心立命の方便とせんよりも、眞理を研究して人類の品格を高め、遂に天命を知り、人分を悟るものばかりか、安心立命の實を得るに至るべし。

おのれは常に、道を信じ義を愛すること固く、この道義の二字を以て、安心立命を工夫せり。顧て、おのれが五十あまりの生涯を追想するに、種々の變遷さま〲の境遇に逢ひしかど、幸にして良心に愧るところなかりしものは、全く道義を信ずるによれりと、今更心竊によろこぶなり。就中、大なる困難に逢ひしときは、必す、星巖先生の、甞盡辛酸心如鐵といふ一句の胸に浮ばざるはなし。是れ、おのれがためには、

萬巻の經文よりも功德ありしなり。

元來女子は、胸襟せまければにや、大節に臨みて態度を失はざるもの少なし。見よ、良人に捨られて狂し、子女に別れて亂するは更なり、日常の瑣々たる事變にすら狼狽して禍災の種となること多し。蓋、これ等は、教育なき女子の常にして、苟も、文字あるものは少きが如し。されど、教育は、たしかに女子を安心立命の域に導くを得べし。果して教育をして、かゝる効驗あらしむるには、精神の修養を肝要となすべし。精神を修養するは、徒ら枝葉の學術を授けんも甲斐なきことぞかし。唯良師の薫陶感化によりて、道義を厚く信じて疑はざるに如くなし。

斯る問題に就きてものすれど、空論めきたる嫌あらむも、實際女子は、男子の想像し及ばざる迷信と、煩惱とによりて、安心立命の立脚地を失ふもの多しとおもへばこそ。

（本居宣長）

家も身も
國もけがすな
けがれはし
神のいみます
ゆゝしきつみぞ



寶皇女

五十園德文

寶皇女、御名は、天豐重日足姬命。敏達天皇の曾孫にて、押坂彥人大兄皇子の孫、茅渟王の女なり。御母は、吉備姬王と申す。欽明天皇の御孫なり。舒明天皇の二年、皇后に立たせ給ふ。御子三柱おはす。第一の皇子を、葛城皇子(天智天皇)と申す。次を間人皇女(孝德天皇の皇后)と申し。次を大海皇子(天武天皇)と申す。舒明天皇十三年十月、崩御の時に、御位を皇后に讓らせ給ひき。こゝに皇后天位しろしめしき。(皇極天皇と申す。)(元年正月)、天皇、古の道を考へて、政をせさせ給ふ。大臣蘇我の蝦夷宿禰の子入鹿、(又の名を鞍作といふ。)政をはしきまゝにして、勢父の大臣に勝れり。これによりて、盜賊らおぢかしこみて道におちたる物をもひろはざりき。その六月、大に旱す。蘇我の大臣、このごろ、百姓のさま〴〵雨を祈れども、驗なきを見て、佛をまつり、大乘經を讀ましめ、みづからも香をたきて願へども、なほ雨ふら

さりき。かくて（八月）天皇、天神地祇に祈り給ふとて、經を讀むことをとゞめたまひ、御みづから南淵河の上にいでまして、四方の神祇を拜みて祈りたまひしかど、忽雷なりわたりて、五日の間、大雨ふり、天の下あまねくうるほひて、五穀よくみのりき。こゝに天の下の百姓、よろこびの聲をあげて、至德おはします天皇と申し奉りき。十二月舒明天皇の御喪の事を行ひ給ふ。蘇我の大臣はいよ〳〵ほしきまゝなり。二年九月、舒明天皇を押坂の陵に改めて葬り奉る。この月皇祖母、吉備島命薨れ給ふ。皇祖母御病つかしてより、天皇御かたへをはなれず。いとまめやかにつかへまして、終のときまで、おこたらせ給はざりき。この後、蘇我の入鹿いよ〳〵ほしいまゝなりしかど、中大兄の皇子と、中臣の鎌子連とはかりて、入鹿をうちころし、父蝦夷をもせめころしき。四年六月、天皇御位を輕皇子（皇極天皇同母弟）に讓り給ひ、中大兄皇子を皇太子に立て給ふ。輕皇子、天位しろしめして、孝德天皇と申し、先の天皇（皇極天皇）を尊びて、皇祖母尊と申しき。白雉五年、孝德天皇崩りまして、足姫命、再御位につかせ給ふ。齊明天皇と申す。四年五月、皇孫建王薨れましぬ。御年十八歲、天皇かなしみて、歌ひたまはく。

今城なるをむれの上に雲だにもしるくし立たむ何かなげかむ

又その十月、紀の國の温泉にいでますとて、思しいでゝ、うたひ給はく。

　山こえて海わたるともおもしろき今城の上をわすらゆまじに

また

　みなとのうしほのくだりうなくだりうしろもくれにおきてゆかなむ

とうたはして、秦大藏造萬呂に勅して、この歌をわすれず傳へよと宣ひき。かくて七年七月、天皇、朝倉の宮に崩りましぬ。八月、皇太子、素服して、御喪を長津の岩瀬の宮にうつし給ふ。十月、又大倭に送り奉るとて、海道にいでまさせ給ふときに、皇太子いたく慕ひ奉りて、歌ひたまはく、

　君が目のこひしきからに泊て居てかくやこひんも君がめをほり

と歌ひたまひ、十一月、大和の飛鳥原に殯したまふ。御陵は小市岡の上にあり。實に至德おはします。天皇にてましませり。

節婦順女　　鹽井ふく子

長門赤間が關に節婦あり。その名を順と呼びて、大節にのぞみ、よく其身をなげうち、順々として道にしたがひしものなり。そが父を中野久兵衛と呼びて、赤間が關の市長

なり。母もまた同里の市長廣江吉右衛門の女なりけるが、中野氏へとつぎて一男二女をまうけぬ。れ順はその季の女なりけり。はじめ、文化中吉右衛門の子、吉郎、玉の男の子をまうけて兆名を力太郎と呼びたり。やがてまたれ順生ひ出でぬ。吉右衛門は何れも孫、いづれもかなしう、玉とよろこび、花といつくしみめでたきあまりに、はては、二孫をして成長の後めあはさむ、両家の根ざしもいよ／＼固くなり、交通もますます深う、ときはかきはに榮ゑもせんとて、久兵衛夫妻と相語らひ、遂に二人をして末の松山、浪こすなとむかり二人が行末をちぎりかため、そがみどりの髮を撫でつゝ、ひたすらたけのびるを待ちけるに、またぬは老の齡なりけり、文政壬午の年、吉右衛門はかなくも朝の露と消ゑ失せぬ。

あはれ果敢かりけり人生、此年、此地、疫癘いたく流行して、仆るゝもの多く、久兵衛の一家もみな病に染み、久兵衛は久しからずして果敢なくなり、つゞきて一男もまた世をさりぬ。殘るは母と二人の女のみなるに、市吏之を疾みて、久兵衛の家、長男死して、殘るはみな女子のみ、誰が市長をつぐものぞとて、遂に其家を籍沒しぬ。親を失ひ、夫を失ひ、子を失ひ、今また家をも失ひ、重ね／＼の不幸に、母は泣くなく二女を携へて吉郎の家により、これも秋のはゝそのあはれにもゝみぢしにけり。れ

順、時に年三五、姉のお久と僅に疫癘はまぬがるゝを得しかど、にはかにかぞいろをも失ひて悲しう、はやく住みわづらふ世とはなりけり。

此處にまた久兵衞に一人の姪喜一と呼ぶものあり、之は宗家の子にて、家も豐なりけるに、かねてお久を配せん事を約しありしが、喜一性質いと無賴なりしかど、阿久長じて、之にとつぐ事を肯ぜず、やがて長藩の士、能勢氏なるものにとつがんとせしに、喜一も、また、その仇なるを恨まず、反つて梳粧の具を購ひ與へ、よろこび嫁せしめたり。時にお順は吉郎の家を去りて、父の執事たりし伊藤松之丞の家に居りけるが、阿順、天質柔順、春をつむまゝ、いよ〳〵心もかんばせもうるはしう、殊にたちぬひ、糸くる等の業に工みにて、世にめづらしきばかりなりけるに、喜一、一つに之をよろこび、得て妻になさまほしう思ひ、人を遣はして、吉郎に之を請ひたりしに、吉郎は、かねて、其子力太郎とふるきゆかりあるを以て之を拒みぬ。

使歸りて、此事を喜一につげ、君さりとも、彼孃を得まく思ぼさば、姉のお久に意をつげてすゝめしめなど、彼こそもと舊約あるをたがへて人に適したるなれど、拒みあへまじと、用なき事をときけるに、喜一もなほ偏に得まく思ひ、其說を用ゐて、やがて其意をお久に語りけり。

阿久はもとより喜一の人となりを賤しみいとへど、先きの事もありて拒み難く、殊に血脈の妹ながら、己れによりは薄き人情より、妹にすゝめて曰く、誠に此のねにし、もとより妾も其不可なるを知れど、妾、さきに喜一の恩澤を蒙むりて、此處にとつぐを得たり。されど、今日の媒介拒む能はず、かうはすゝむるのみ、妹よ、こをたゞ察せよかしとあるに、阿順はたゞうつむき、くるしき色を顔にあらはせど、強ひてなほすすめられ、やさしき心に拒む能はず、たゞ姉上のため利あらん事には從ひまゐらすべしと、涙と共に答へしに、姉もなきてよろこび、速に承諾の意を喜一に告げしに、喜一大によろこび、婚を約しぬ。此處に松之丞、喜一に云ふやう、阿順は容易く婚をゆるしたれど、吉郎もし心に怒りて、云々を云はゞ世のそしりをまぬがれず、されど吾れ行きて、説きて、吉郎に媒介をなさしめんとて、自ら徃きて事を説きしに、吉郎は嘆息と共に答へけらく、貧賤は誰れも憎くむ所、富貴は誰れも愛する所、貧約をすてて、富榮に就くは人心、人情の反覆もまたうべなるかなとて、深うも恨まず、心よく媒介を許諾したりしに、喜一はよろこび、良日を撰びて、結納の事をもすまし、姻人相會して徹宵筵を張り、觀樂をつくしぬ。

れ、順は約を結びかへしより、心またとけず、涙に日をくらしぬるほどに、早く其日も

近より、明日はいよ〳〵喜一方に適するの日となりぬ。阿順は、其日むかしの友を招きて、酒肴をとゝのへ、宴酣なるとき、偶然座中に問ひけらく、我がいつくしき友だち、もし大節にのぞみ、死せんとするとき、喉を貫き給ふか、はた、また、縊れて死に給ふかと云ふに、一座みな顔を合せて、さやうなる不吉の事を、此めでたき祝筵に問ふべからずといふ。されど人、不幸にして、もし事あり、大節にのぞみ、いたづらに生をぬすみ、身をけがし、世にながらへんは、誠に後の世までの耻辱なり。されど、今、妾、さる時の心がけまでに、問ひこゝろみ侍るのみと、れ順重ねて云ひにし、喉を貫くと、自ら縊るゝとひとしく、死なり、死一ならば、妾等喉を貫き斃れんのみとの答へに、妾もしか思ひ侍るなど云ひてなほ人々をもてなしけるが、後にぞ思ひあたる事あり。

やがて婚すぎて七日、賀客やう〳〵うせてまれに至りぬ。もと此里のならはしとて、婚ありて七日を經れば、舅姑娘を携へ、媒家に往き、其勞を謝するを常とす、されば、吉郎もはやく酒肴をとゝのへて、其至をまちけるに、人は中〳〵來らず、如何はしつると案ずる折りふし、喜一の伴來り、主婦粧室にて自刄し斃れたりとの報ありしに、吉郎うちおどろき、徒跣して行きて見れば、阿順短刀もて、喉を貫き、臥して、已に玉

の緒も絶ねてありたり。時實に天保元年十二月十日、よはひやう〳〵十九歳、花も實もてもりたる妙齢を一期として、とく散りたるぞあはれなる。吉郎かなしみながら遺書ありや、なしやを問ふに、書一なしと云ふ。蓋し遺書ありとも、其載する所、人に示すべからざるを以てなり。されど、其赤き色香は、關も閉す能はず、節婦の名ねち近にかくれなく聞ねけるとぞ。げに奪ふべからざるは、節婦の心なりけり。

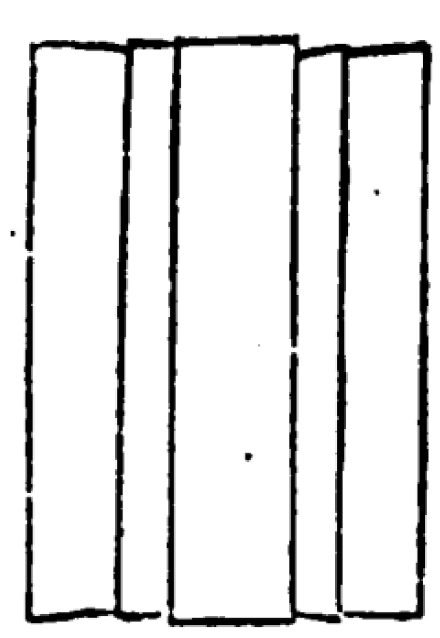


家政

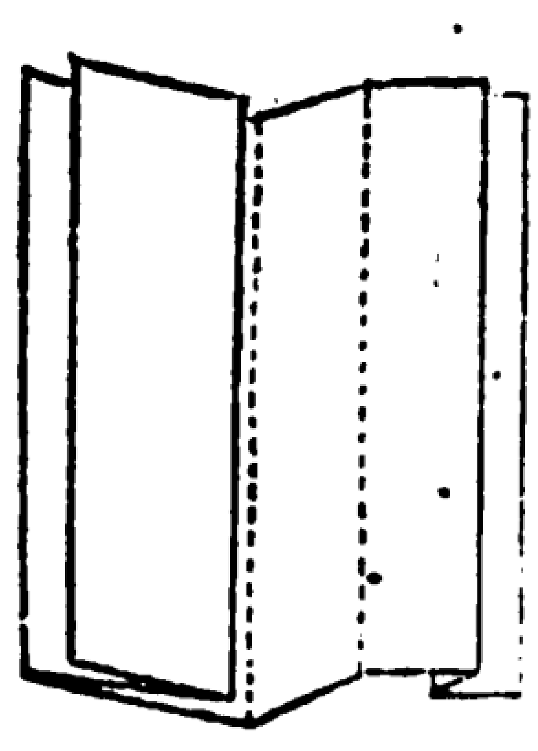
折形

有住齊

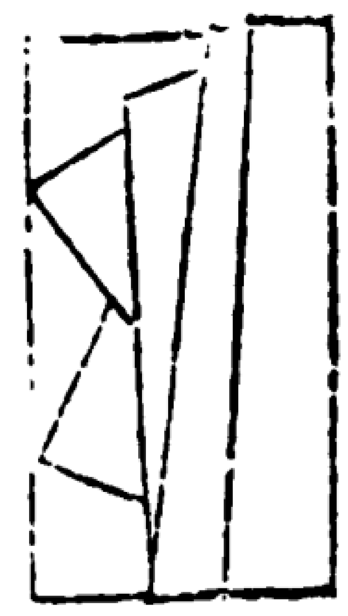
手綱包 腹帶に同し、上書は手綱筋何の內と書くべし。



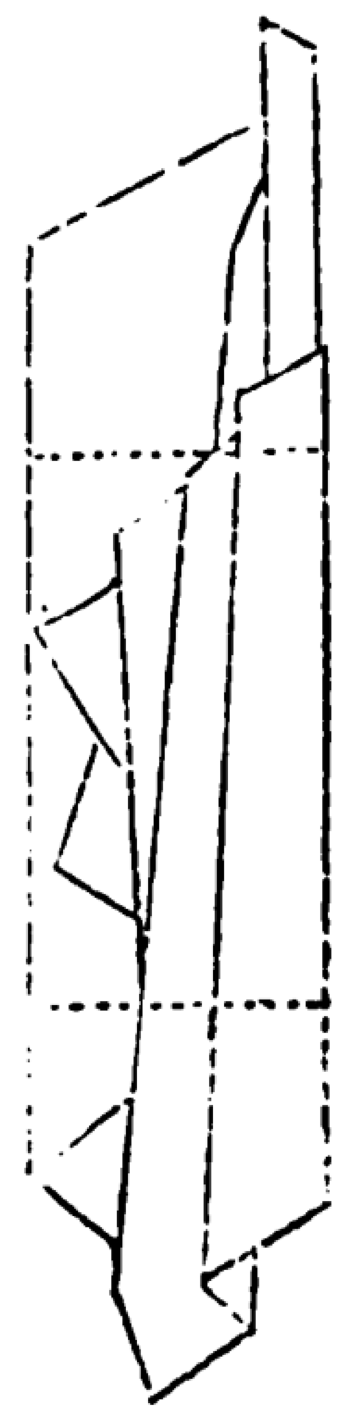
れなじく開きたる處



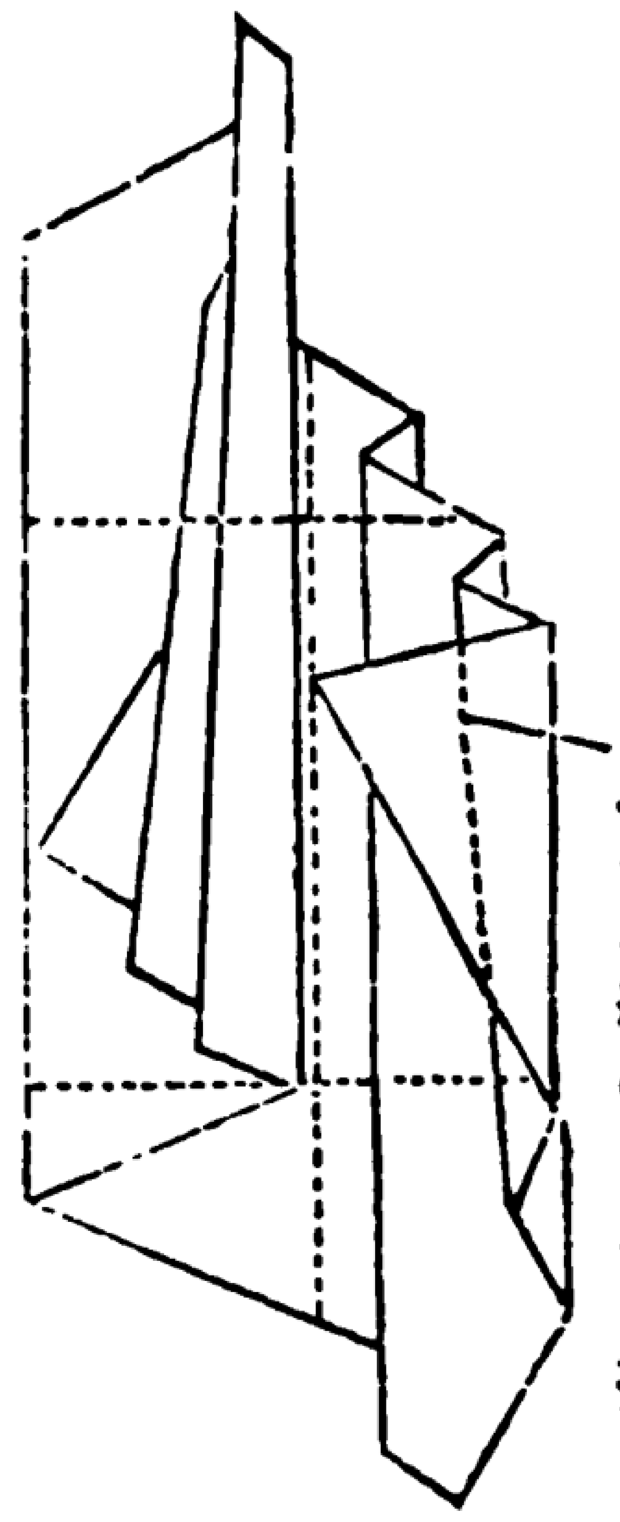
鏡包 下包あり、上書あり、丸かゝみ、八花形にても同しことなり。



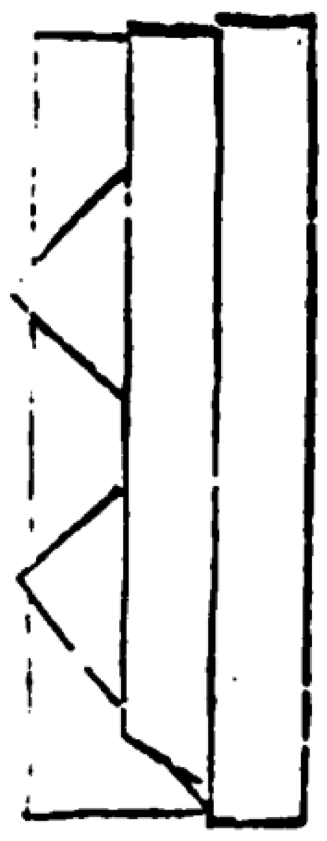
おなじく解の一

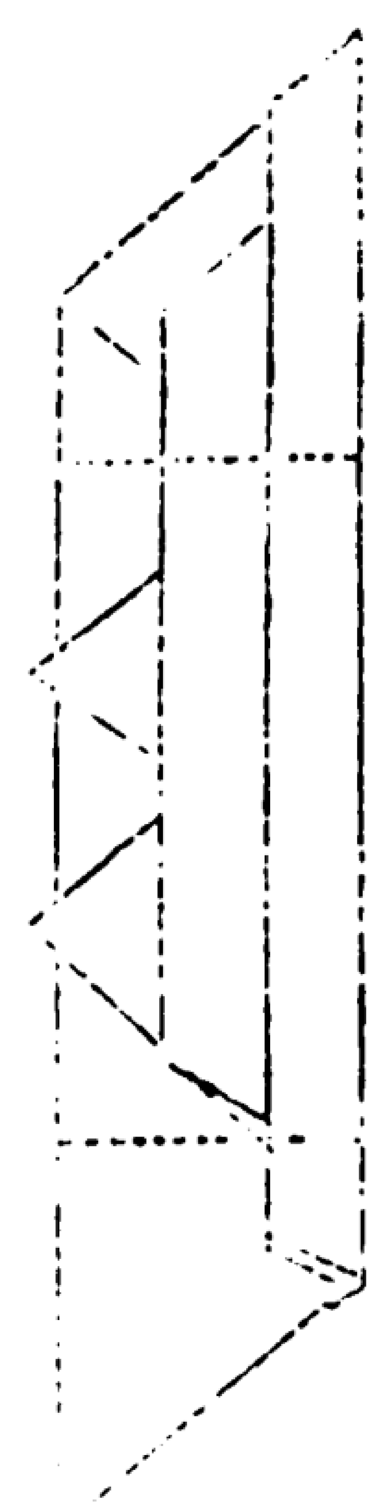


おなじく解の二

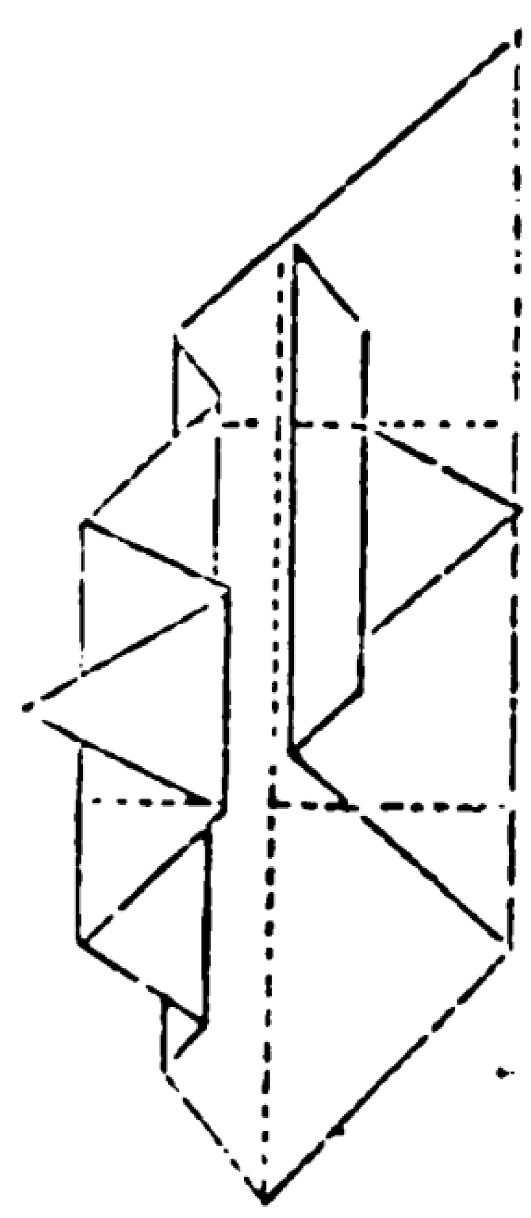


紅粉皿包　下包なし、上書あり。





おなじく解の一



おなじく解の二

茶の湯

孤客庵不羨　關　章雄

濃茶手前（續）

是を受て、水柄杓に取、水を汲、茶碗へ入べし、其

柄杓は釜へ掛、右手にて茶筌を持、茶碗へ穂先を入、左手にて茶碗を持、茶筌を濯ぐへし、（但し始めさは〱と振りて、一旦止り、一つ打引揚げ見て、又茶碗へ入一つ打、今一遍如レ斯して後二三遍さは〱と振りそゝぎ止り、左手を引、茶筌を引揚）元の處に置付、右手にて茶碗を持左手へ移し、飜へわけ、右手にて茶碗を下に置、茶巾を入（但し手形に）次に茶筌を入（但茶碗の眞中、軸の所前の縁に掛く）右手にて茶杓を持、膝上に控へ、左手にて帛紗を取り、左膝頭の所に持徃、右手の茶杓を繰込み、薄茶手前の時の如く、拭ふ事替事なし、則拭て茶碗へ掛け、帛紗を握り、飜を少し跡へ下げ、右手を出し、帛紗の折目を一つ開き、茶の付たるを右手にて拂ひ落し、帛紗を打返し、上を取引立内の方へ折、左手にて腰間に付べし、次に濃茶入を右の手にて取、水指の前へ、右の方へ置付、次に右手にて茶碗を持上、左手に持替、茶入と相對して置合すへし。次に右手にて柄杓を取、前へ持來り、持替て水を指べし、先二杓を通例とす（但柄杓を持替る手付は、薄茶の手續の所に詳細示したれだ、爰に略す）柄杓を構へ、右手にて釜の蓋を締、右手にて柄杓を蓋置へ引なり。次に左手にて水指の蓋を持、前へ持來り、平等にして右手にて撮みを持、水指へさせべし。此時客方、上客より、茶入、茶杓、修覆の拜見を申述べし。亭主右を輕く受て、柄杓を右にて取、左手へ移し構へ、右手にて蓋置を持、水指の方正面に向ひ（但し二膝にて廻り切、蓋置を飜の跡の方に置、右手にて柄杓の柄の元をにぎり、左手にて柄杓を飜へ掛る（但し合をうつむけ、柄を掛べし）次に左手にて茶碗の左の方正中を持、前へ持來り、右手にて持、左手を

僅少跡へ持直し、翻の向に置べし。次に右手にて茶入を持、左手の掌中へ受、右の方炉へ向ひ廻り、正面眞直に座し、茶入を前へ置、(但し膝の前眞中)左手にて帛紗を持、左の膝頭の邊に持徃、右手を出し、上を取、例の通塵打して三つに疊み、引出し、二つに折、右手にて四つに折、左手にて右手の方へ又二つに折(但し此疊折形は、最初薄茶手前の棗を拭ふ時の疊形と同様なり)左手にて濃茶入を取上げ、右手の帛紗にて、蓋の摘みの向前と二つ拭ひ、帛紗胴へ掛、折目を向へして、右手の掌中に入、茶入を左手にて向へ廻し、右手の帛紗にて前の方へ拭ひなから一廻し、留りたらむ、帛紗を横にして茶入の胴を下部へ拭ひ、留りて後に離れ、帛紗握り込、拇指と名差指中指の三指にて茶入の蓋を取、改めて若口に茶付あらむ、蓋を膝の前に置、口を帛紗にて拭ひ、又蓋を持、蓋の裏に茶の付たるや否やを改め、後蓋をして、右手の帛紗の折目を一つ拔き、下に置、右手にて茶入を左へ廻し、前の方を向にして、鍵疊炉釜の鐶付を押へ、炉縁の方茶入一つだけ明て出すべし、(但此時茶入の蓋洲あらは釜を受て出すべし)次に、右手にて帛紗を持、打返し、一つ持引立、左手にてしふき、内へ二つに折、腰間に挾むべし。次に身體を點前に戻り、左手にて茶杓を取、貝先を前の方へ起し、右手にて中節の際を持、手取を客方へ向、茶入の右の方へ出すべし。次に右手にて袋を取、左手の掌中に載、左右の手の指先にてつがりを延し、右手にて緒つがりの下の處を持打返し、左手の掌中に置、右手の拇指を向へむけて茶杓の右の方へ出すべし、(但し是にて、茶入、茶杓、袋の三つを茶言葉に略して三器と云、方正に陣列に注意すべし)次に、主

は水指の方に向ひ、柄杓を左手にて取、柄を右の方へ振向けながら合を起し、横たへ、右手にて上より持（但し中節の處上より持を云）左手にて蓋置を持、右手の柄杓の下に持添、左手にて翻を持、立て左足より右左と三足引て左の方へ廻り、勝手へ入（但し客方にては、茶入、茶杓、袋と順に前に取並べ置べし）次に、亭主は又出て水指の正面に座し、左手にて茶碗を取、右手に持、左手を添て勝手へ入、又出て水指を引入べし（但し客方にては次禮して、茶入より順に拜見すべし、此拜見に大に習有りと雖も、客方の事は今、爰に言はず。三器末座迄廻りたらば、上客へ挨拶して亭主へ返すべし、順序は亭主の出したるを打返したるものなり）茶入、茶杓、修覆、戻たらば、主方出て三器の正中に座し、一禮修覆を右の手にて持（但し袋の底を持、左の掌中に置、右手にて茶杓を取、左手袋の上に載（但し茶杓にて袋の底を押へ、左手の拇指にて上より持べし）右手にて茶入を持、立て勝手へ入、水屋に此具を置て後出て一禮すべし（但し御退屈抔と云も可也、而後水屋に入茶碗其他夫々の器物を片付べし、其法薄茶の時に差違なしと心得べし。

（了畢）

女の禮（續）

禮節教授　有住常子

烟草盆出す樣

まづ、人の御左の方へ火入、御右の方へ灰吹とれきなめて、兩手にて、縁をなかぞうくる樣に指をかけて持つべし。

さて、つまだちて、右の膝頭のみを、すこしうかし

て、右の方へ、膝を捻り（此時左の膝は右の方へずらすなり）かくして、立つには眞直に向ひて立て、進みゆくなり、左足より進み出べし。

人前、三尺程手前にて踏そろへて、右足を、左足より半足あとの方へ引て、右膝より跪き、次に左も跪きて、右膝をすこし引て、爪立たる踵を平になし、左膝をすこし引て、爪立たる踵をおろし、居りて、烟草盆を、下におき、兩手の掌を上にむけて、第二の指のよこにて、おしすゝむべし。

かく進めて、兩手を、膝の前に引て付て、右膝頭に、右手をそへて、すこし引て爪立、左も同様にして引て、爪立て、又右の方をすこし引て、あはせて三足ひきたる時、右の膝頭をすこしうかめて、右に膝を捻りて、眞直にたちて、右の足を、一足ひき、左の足を、一足ひき、次に、右の足を、左の足のあとの方に横につけ、次に、左の足を、右の足のさきの方に、竪につけながら、めぐりて、踏そろへて、左足よりあゆみて退くべし。

右の退きかたは、おほかたの時の様なり。右座の時は、右座の様あり。左座の時は、左座の様あり、すべて片側の時は、下座にめぐりて、引退く事としるべし。

又、右にあげたる仕様は、右を上座（人の方よりは左也）としての時なれど、左を上座（人の方よりは右なり）の時は、退く時、左膝より引て、左にめぐりて退く事としるべし。座する時も、左膝よりつきて座するなどの心得あるべし。

同引様

兩手を、指先を、うちの方へすこしくくばかりにして、帶の兩邊につけ、すゝみ出て人前三尺手前にて、立止り、跪きて、兩手をそろへて、進めて、右、左と

膝をすゝませながら、平にすわり、まづ烟草盆の、手前の端を、兩手の指先にて引出し、また持ちなほし、中ほどをもちて引よせて、前にひきて、左、右にて持ちて、膝を引て、つまだちて、三足引て、めぐりて、引退くべし。

たちぬひ

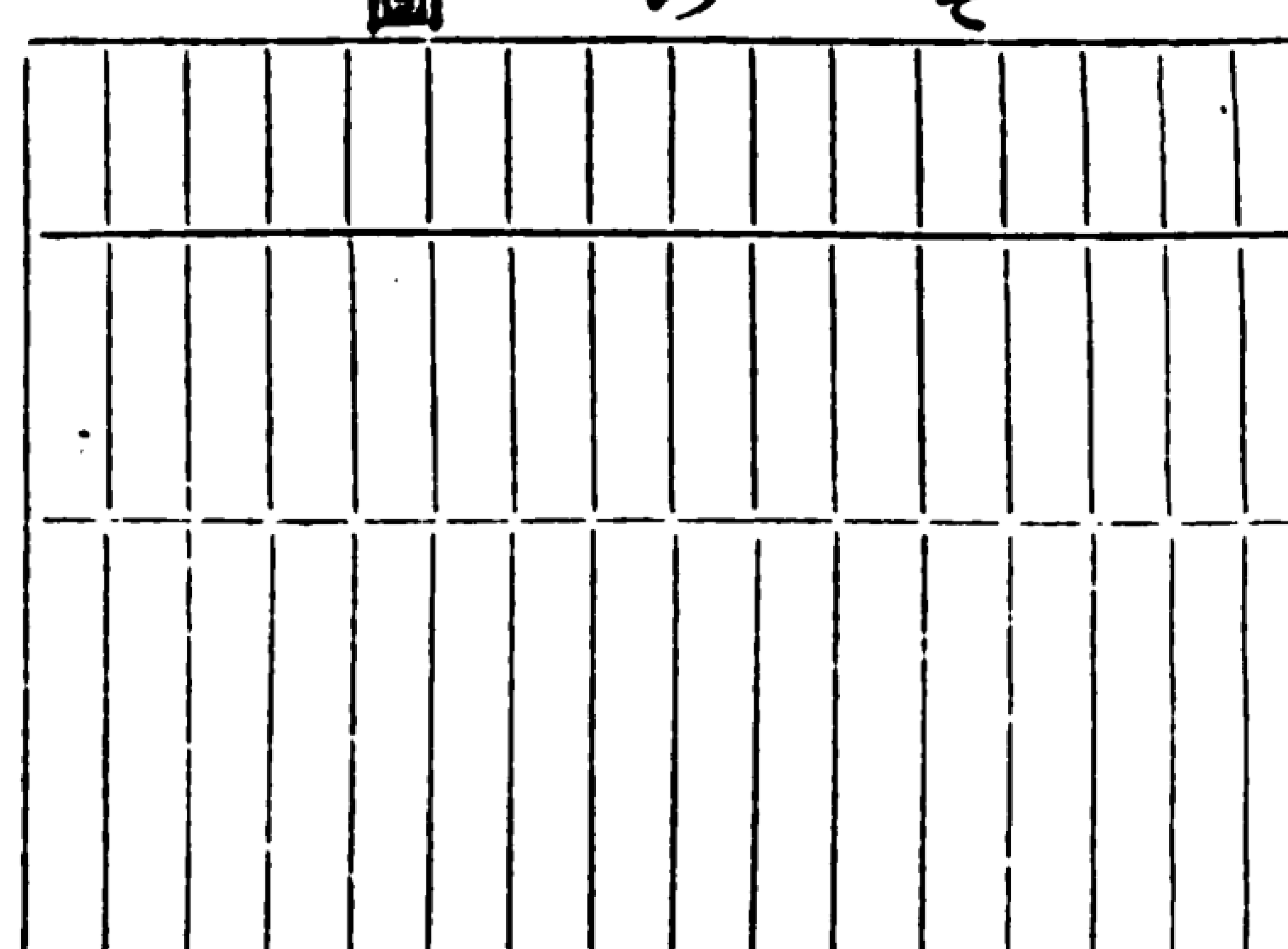
西山たい子

(八十三) 菊袋の裁ち縫ひ

きく袋は、大方、半紙を横十六にきり、縦を桔梗の一つだけをかりあましてあとを二つにきるべし。

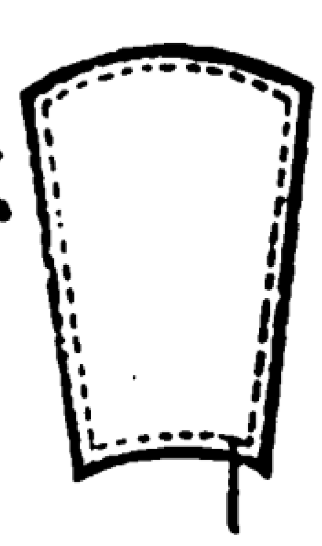
但し十六はかしこきわたりの御もん故、ゆゝしけれど、十五片にへらして、四合せ袋のやうにはぎつけ、なかの丸くたる所へ、丸きぱつを切をあて、うらをさし入れ、口切をつけて絎るなり。

その圖



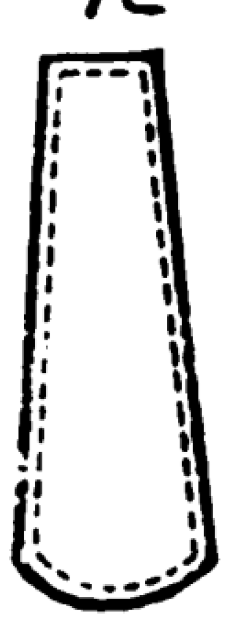
己れ、先きつ年、かしこくも、皇太后の宮の好まれて、つくらせ給ひしとき、奉りし菊袋を拜見しはべりしに、左の形の如く、いとめでたくもしたてあり。されど、左にかゝぐるなり。

之も同じく紙にて、上の形の如きを十片切りて底とし、



此のかたはぬひこみ。

また

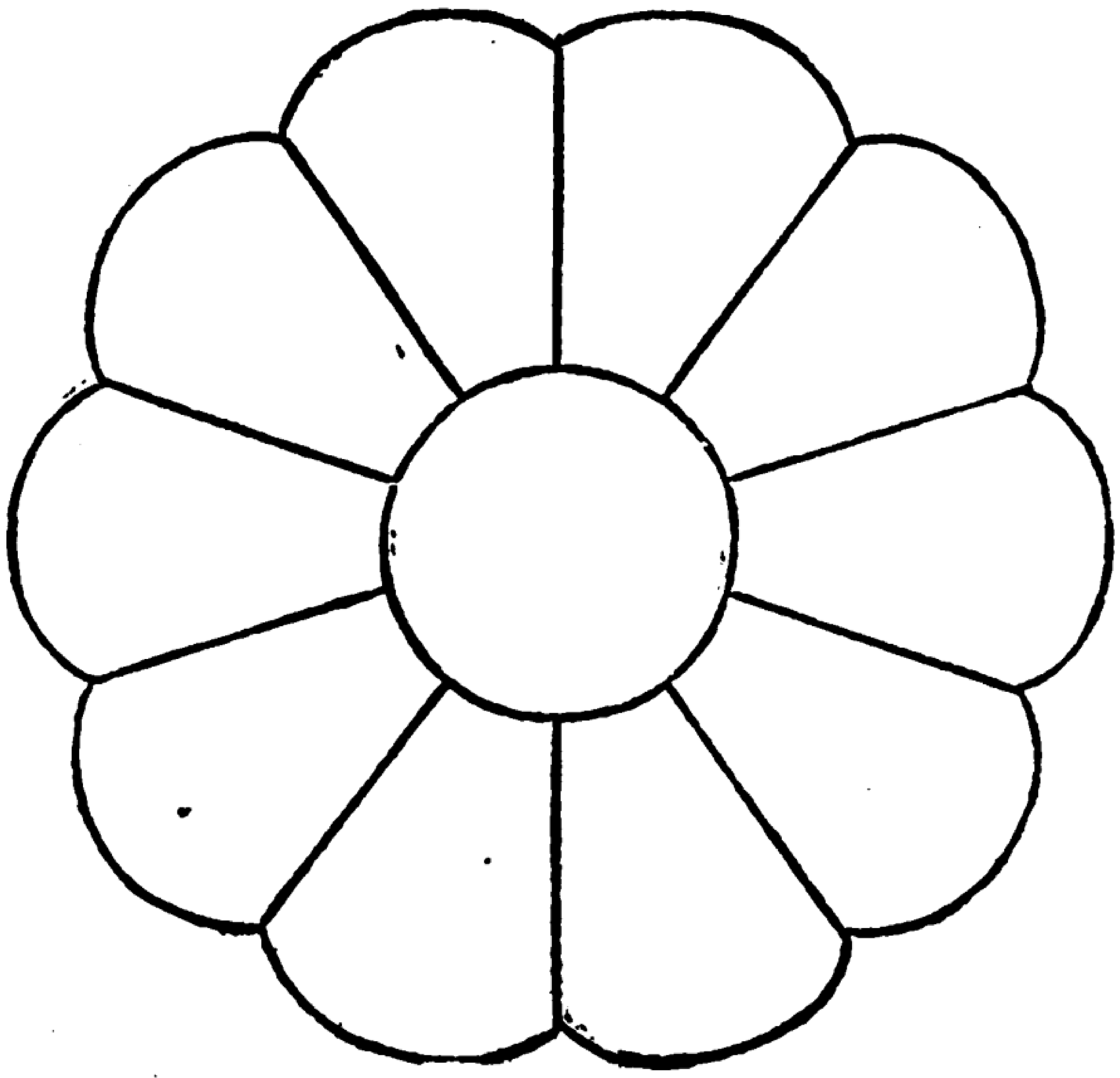


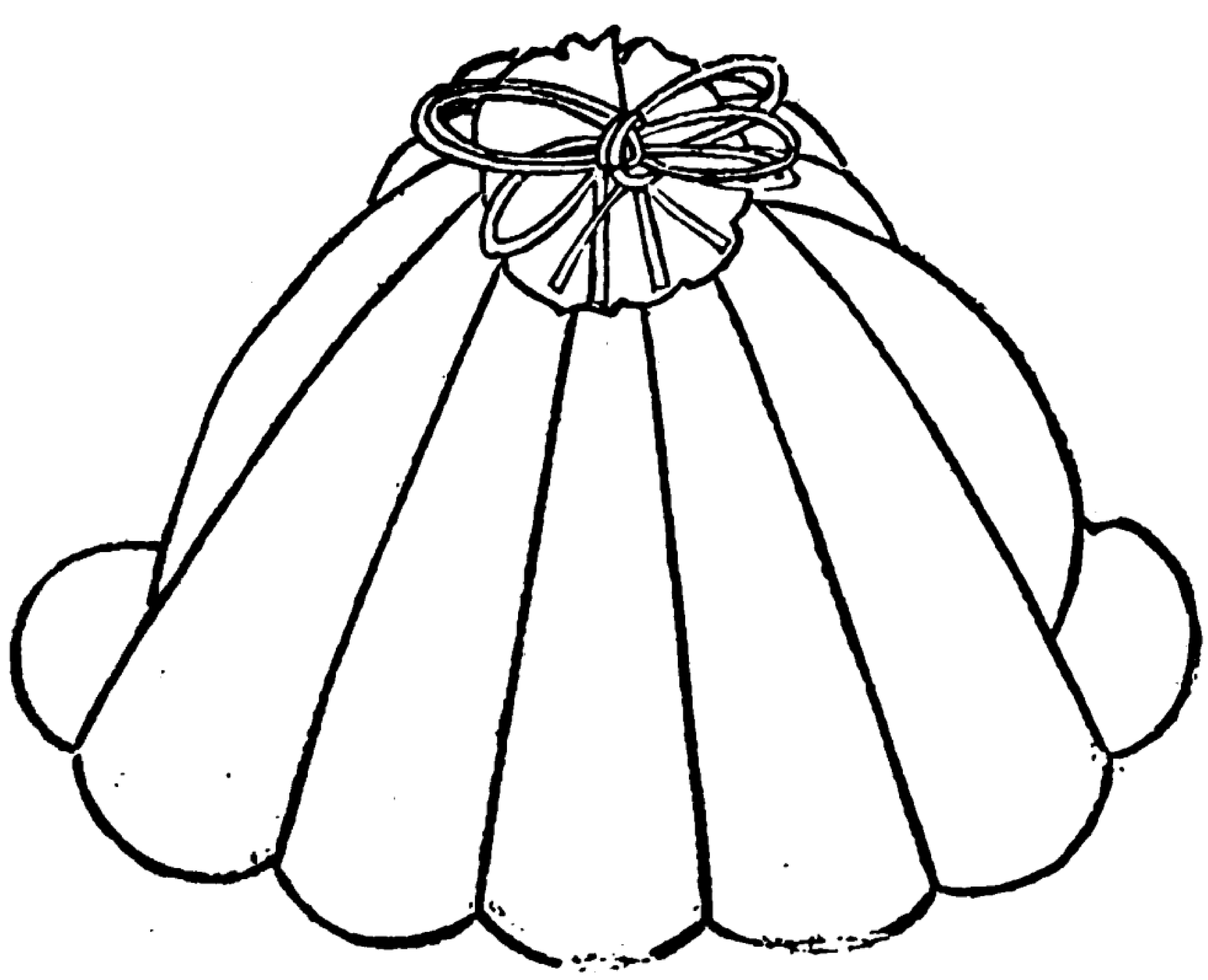
上圖の如き形を十片きりて上とし、各切をつけてぬひ、こまかにぬひこみ、正しく

底の切を十片ながらぬひ合せ、眞中の明きたる所に、丸き切をぬひつけ、上をも十片ながら丁寧にはぎつけ、さて、底と、上とをよく合せてぬひ、それより裏底を表底に合せて、○丸く切り上をも丈けを見、底になる方の丸みを見て、左と右とをぬひ合せ底に合せ、上の方にてひだをとり、口切をつけて絎るべし。此の見たては、

左　右

白と紅との紋ちりめんを、かはる／＼にはぎしにて、誠にめでたう見奉りぬ。





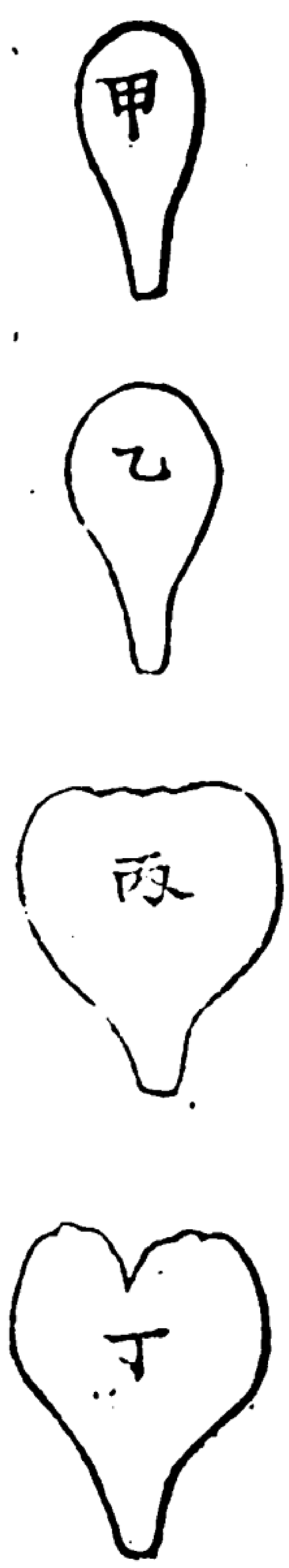
造花

薔薇　櫻化

伏兒藤三郎

滿開花の造り方　花瓣は、絖、羽二重、又は寒冷紗を用ゆ、絹なれど薄糊を引き、寒冷紗なれど其儘にて、第百二十圖の如く四種の形に斷ち、（滿開花一つに、甲、乙、丙各十五枚、丁四枚を要す）

第百二



之を色染めするには、先づ各花瓣を微温湯に浸してしぼり上げ、絹なれど「フロックシン」、寒冷紗なれど「ローザミン」にて、櫻色の少し薄き位に、花瓣の中眞より上下に薄く摸糊し、元を（絹、寒冷紗共に）「オウラミ」にて薄黄色に染め、甲、乙の花瓣は、何れも三枚宛重ねて、中央を筋鏝にて強く引きて二つに折り合せ、其の折り合せたる上を筋鏝の先にて壓して縮らかし、后二つに折りたるを開きて、甲三枚重ねたるを、乙三枚重ねたる內部に重ね合せ、斯の如きもの五つを造る、丙、丁の花瓣は、前號天紅薔薇の花瓣丁戊と仝じ造り方にて、凹みをつけ、丁の花瓣は其の先を裏より筋鏝にて橫に引きて少しく裏にまくれ反る樣にすべし。蘂は、本誌百二十號に揭げたる菊の蘂と仝じ樣に、先づ、カタン糸四五十本を束ねて薄黄色に染め、針金にて絞りて總子の如き形を造り、先を短かく斷ち、別にカタン糸をとり、其先に、米の粉を「マセンダ」（黄色）にてかたく溶きたるものを少し計り付けて凡三四十本計を前に造り

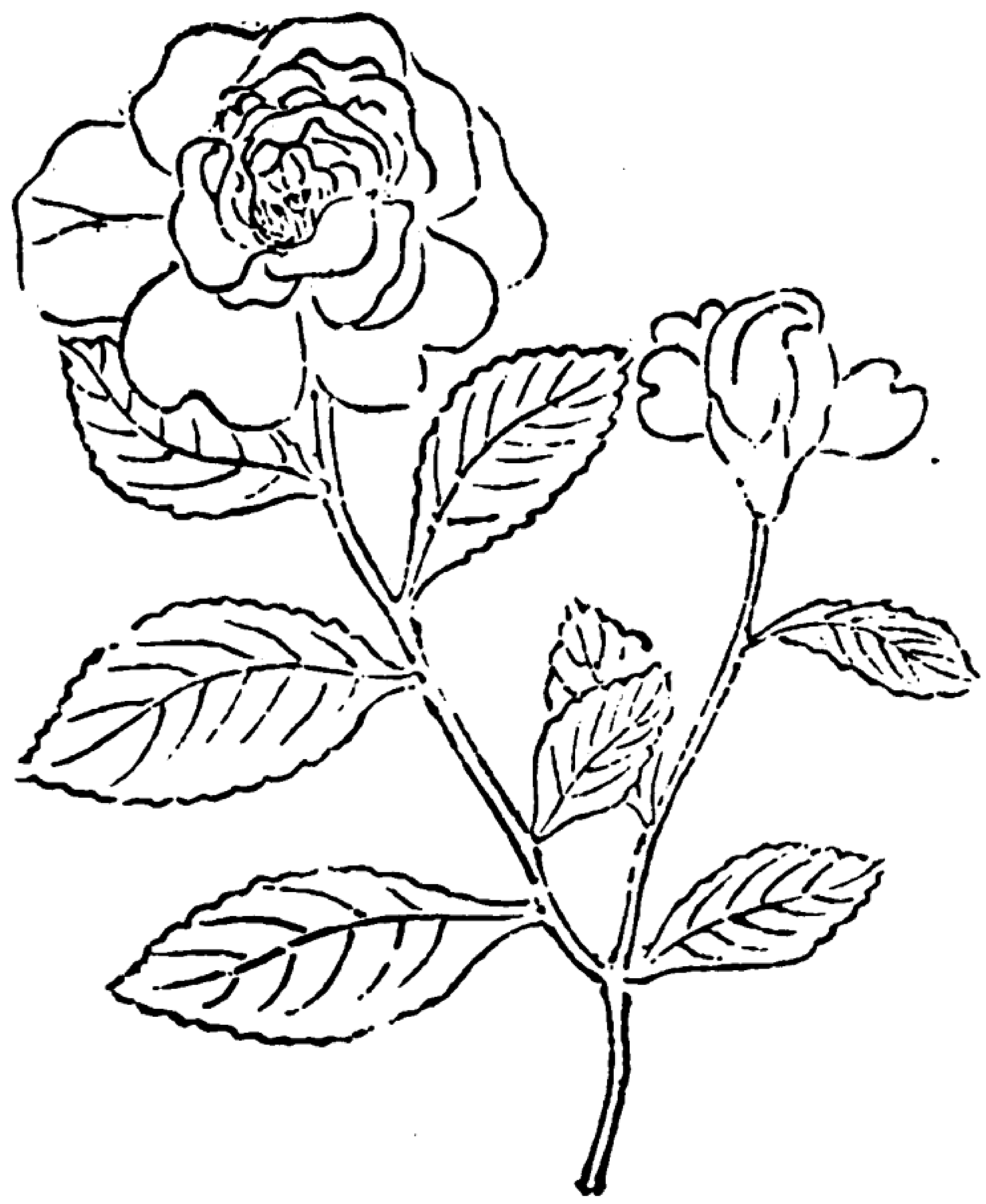
たる蘂のまはりに二三分ばかりも長く付け、さて、此の蘂のまはり一方だけ間けて、殘り、三方に、前に重ね置きたる、甲、乙の花瓣をつけ、其外部に丙の花瓣五枚をつけて、內の瓣を懷く樣に造り、尙丙の花瓣殘り十枚の內二枚を一方間け置きたる兩側につけ、八枚を其うしろに配り、后丁の花瓣四枚を一方の間きたる處に付くべし。

萼は、前號天紅薔薇の萼第百十八圖の甲と同じものを造りて、其の花に付く方の片に糊をつけて、綿を「マセンダ」と茶粉とにて染め乾して微かに刻みたるものを着け、乾して花の元につけ、後の　玉護謨を通すべし。

半開花の造り方　　半開花は、天紅薔薇の半開花と仝じものを造り、后、其兩側に、滿開の丁の花瓣を一枚づゝ都合二枚を着くべし。萼は滿開と仝じ。

蕾の造り方も、天紅と仝じにして、先を紅く、元を黃色に色染すべし。

葉　　も、天紅薔薇の葉と仝じ造り方にして、色少しく淺くすべし。注意、櫻花の葉は花の眞中にあらずして一方に偏したるものなり。



だいどころ

魚の種類季節並に其の調理

魚に海魚川魚の區別あるはいふもさらなり、扨てその魚の種類によりて、各々その季節あり、季節にあらざれど、同種の魚にても、その味あしきのみならず、或は全く食するに堪へざるものさへあり。されど、臺所のつとめにしたがふものは、魚の季期を知りて、その種類の取捨をなすこと肝要なり。また、魚の種類によりて、之に適する料理かたを心得居ば、けつして無用の事にあらざるべければ、茲に魚の季節、並にその種類に適當なる調理の大略をしるすことゝなしぬ。

一鯛（普通單に鯛と稱するもの）

鯛に季節なしと稱し、何時にても多くかはり無きは此魚なれども、その極節は、九月より翌年の四月までとす。また、料理の種としては、茶碗、鹽燒、てり燒、刺身、南蠻、兼珍蒸、等に用ふるを普通とすれども、其他、好尚にしたがふて、色々の種にもちひらるべきは此魚なりとす。

一ひらめ

十二月より翌年の三月までを此魚の季節とす、刺身、煮肴、または甘酢などに用ゆ。

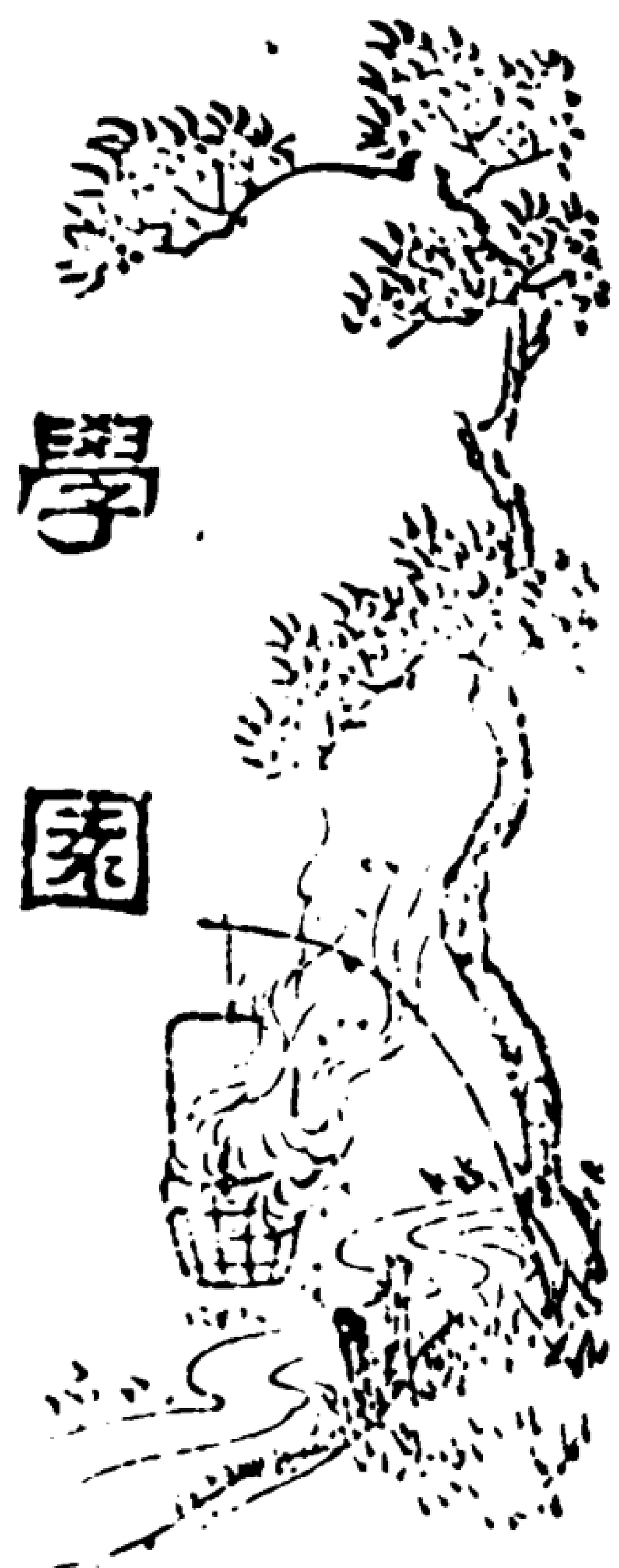
一黑鯛

此魚は、夏季に限り、洗ひに尤も適當の品なれどもしほ燒、または茶碗種などに用ちゆるもあしからず。

一まあ鯛

十月より翌年の三月までを季節とす、てり燒または味噌漬となすときは、尤も美味なり。その他、碗種しほやき等の類にも用ひてよろし。





學園

秀歌集（十六）

鹽井正男

○

夢路にも宿かす人のあらませば
　　寢覺めに露は掃はざらまし

○これも、後撰集の十一の巻にありて、讀人は知れず。人の許にまかりたるに、入れざりければ、簀子にふしあかして歸るとて、いひ入れたる歌なり、○簀子。簀の床にて、竹を敷き並べて椽のやうにしたる所なり。○夢路にも。現には宿をかし宿りを許さずとも、切めて夢の中にても宿をかす人あらばといへるなり。夢路とは、夢の中を、路になぞらへて夢路といへるなり。○有らませば。有らうならばといふ如き意なり。○露は掃はざらまし。露は掃はざらむといへるなり。袖にこぼれかゝりたる涙を、かく露といひ、さて掃ふといへるなり。

○一首の意は、現には宿をかさずとも、切めて夢の中にても、宿をかしてくれる人のあらうならば、かくねむりさめて、かやうにこぼれかゝれる袖の涙を掃ふやうなる事はなからむを、思へば、假りにも宿をかしてくれぬ人の心のつらさよとうらみたるなり。夢路といひ、宿かすといひ、露を掃ふといへるなど、詞づかひの巧みなるを見るべし。

○

淚川なかすねざめもあるものを

はらふばかりの露や何なり。

○これは、前の歌に答へたるなり。○涙川。やる方なき悲みに甚しくこぼれかゝる涙を、川になぞらへて涙川といへるなり。○露や何なり。「露は何なりや」といふことにて、即ち「露は何なるか何でもなし」といふ意にて、やは所謂反語なり。○一首の意は、待てども待てども貴方は我れを見捨てたまひて、うち絶えて訪れたまはぬ故に、此方にては、寝覺めの床に、泣く涙は川水の如くに泣きと泣き悲しむ時もあるに、掃ふといふ程の僅の涙が何ですか何でもない、さばかりの歎きは、いと僅かの事なりと、常につれなきをうらみかへしたるなり。反へしの手振り誠にあはれに面白し。

○

心からうきたる舟にのりそめて

一日も浪にぬれぬ日ぞなき

○これも、全集の全巻にありて、小野小町が契りたる人の、やう／＼心がはりして、たのみなげに見えたる時によめるなり。○心から。我が自身の心よりといふことなり。○うきたる舟。浮きたる人を浮くといふ詞より、舟になぞらへて、浮きたる舟といへるなり。浮きたる人とは、浮薄にして賴みなき人といふことなり。○のりそめて。逢ひ初めてといふことを、うきたる人をうきたる舟といひたる縁により、のりそめてとあやなしいへるなり。○浪にぬれぬ日ぞなき。涙に袖を濡らさぬ日はなしといふことを、舟といひのるといひたる縁によりて「浪に濡れぬ日ぞなき」といへるなり。○一首の意は、我が自身の心より、かゝる變はりやすく浮薄なる賴みなき人と交り初めて、その爲

に、日毎にかく涙にかきくるゝと泣きたるなり。うきといふより舟といひ、さて、舟に縁ある詞を用ひて、一首をまたてたる詞づかひの上手の手振りを味ふべし。

○

わが爲めは見るかひもなし忘草
　忘るゝかりの戀ひにしあらねど

○これも、全集の全卷にありて、長谷雄朝臣が、かねて契りたる人の許より、最早忘れよといひれこしたる時によめるなり。○わが爲めは。我が爲めにはといふことなり。○見るかひもなし。見るねうちなしといふことなり。見るも其の効なきといふことなり。即ち忘草といふものはそれを見る時は、物を忘るゝといふなれど、我れは、それを見るも、忘るゝ能はざれど、見るねうちはなしといふなり。

○一首の意は、忘れ草も、わが爲めには見るねうちはなし。忘れ草を見るも、我れには効はあらじ。元來、我が貴方を戀ふ心は、とても、忘るゝ事の出來るやうなる戀ひにはあらざれどといふ意にて、忘れよといはるれど、吾れは決して忘れかたしといふことなり。

○

今はとて立ちかへりゆくふる里の
　ふはの關路に都忘るな

○これは、全集の十九の卷にありて、藤原の淸正が、同じ家に久しう侍りける女の、美濃の國に親の侍りけるを、とぶらひにとてまかりたる時に、別れを惜しみてよみたる歌なり。○今はとて。今は限りなり、最早歸へらねばならぬとてといふこ

となり。○ふはの關。美濃の國の不破郡なる關○一首の意は、今は限りなり、最早歸へらねばならぬとて、貴方は故鄕へ立ちかへり行き給ふ。貴方の故鄕には不破の關などもありて都の方を立ち隔つる事なるが、何とぞ、北の關の彼方に歸へりたまふとも、決して都を忘れて下さるな、私を忘れて下さるなといふことなり。つまりは、故鄕に歸へるとも、都の私を忘れて下さるなといふを、其の國なる不破關などを取り出でて、面白くよみなせるにて、ふる里のふはの關路などいふあたりより、すべて、一首の調何となくやさしくあはれなるを味ふべし。

○

としをへてあひ見る人の別れには
　をしきものこそ命なりけれ

○これも全集全卷にありて、小野好古朝臣が、筑紫へまかるとて、きよいこの命婦におくりたる歌なり。○としをへて。年を過ぎてにて、年を老いてといふ意なり。○あひ見る。逢ひ馴れたることなり。

○一首の意、は年老いてより逢ひ馴れたる人の別れには、誠に惜しきものは命である。既に年も老いて、最早行く末の命も幾何もあらじとおぼゆれど別れては命の中にあひ見むこともおぼつかなけれど、一日も長く命は生きたく、命は誠に惜しくおぼゆるといふことなり。老人の別れの眞情自からこぼれてあはれなり。

ふゞくろ入添

下田義天類評論

原文縣居翁の作

龍公美へ與へし書のつゞき

此の程家に人々つどひて歌詠みつるに、鶯の鳴くをよめるてふこと書にて、

打わたす御門の原の雪の内に
　うぐひす來なく春の初こゑ

又屏風の畫を題にて人々よむに、三月山里へ人の問ひ來たるかた有る所を、

山里は巖穂の中と聞きつるを
　花にこもれるところなりけり

右事の序に書きて參る。御門の原は萬葉卷二に、人麻呂植安の御門の原とよみ、今昔物語の應天門の原をもいひたるを以ちて東都の大城の御門の邊の原の意にて詠み侍り。こゝにも火をよくとて置かるゝ原多きなり。御詠いかゞ少し見せ給へ。おのれ去年は、春より事多かりしに、六月こゝの大喪の後は、田安殿の御慰もなきまゝに、いとゞ種々の學事をとうで賜ひ、以後只おのれ一人に預る事故に、夜晝となくいそがしくて、それがあまり未しはて侍らでなむ。依りて、過し秋の御答をだに怠りぬ。右申しゝは御心なるまじけれども、先申しゝ如くの道に入り立ちて試み給へかし。二三年の間におばし嘗りぬべし。

凡人として自負心なきものは非らず。これを負けじ魂といふ。このこゝろなきものは自放自棄の徒なり。されど、この心必しもあしとにはあらず。常通人はこれによりて其の品位をも高めゆくものなれど、寧そのすぢの心をど盛にすべしとやいふ可

らむ。されど、その度を超えて負をしみといふにいたりては、誰も誰も忌み嫌はざるものはなかるべし。この負けじ魂と、負けをしみとのけぢめは、尤見易きやうなれども、實際には甚分ち難きものなり。さりとももと我を頼むはまけじ魂なり。非をしりて伏せざるは負けをしみなり。かく言語の上の標準よりいへど、いと心得易きやうなれども、實際の事實につきては、その非を知るといふこと決して容易のことにあらず。聖賢の聞えある人にても、或は時に惑ひなきこと能はざるものなり。況むや聖賢より以下の位にあるものをや。滔々たる天下の人、大方はこの負けじ魂と負けをしみとを混同するものなり。この心擧動に發して、往々自己の知らざる所、また自己の能はざる所を破毀せむとする傾を生ず。識者といはるゝ人にこの癖最多し。景樹が常に縣居翁の歌論を破毀せむとあせりたるも、皆このあやまりよりいでたる擧動なり。翁は既にこの事をにひまなびの首章に懇論せられたり。龍草蘆に對して先二三年間此の道に入り立つ可きよしをさとされたるも、畢竟その能はざる所を破毀せむとする邪癖を去らしめむとの御心がまへに外ならざるべし。古歌の妙所を知らず。古文の佳境を知らず。自己の知ることと能はざるを以ちて、從來の國歌を排斥せむとするものは、皆その自負心に驅られて、その邪說を唱ふるものなり。否負をしみの卑劣心より自己の短所を覆はむとして益魔道に滔落するものなり。翁の此の敎に從ひて、先兩三年も此の道に入り立ち、而して後、和歌改良論をも唱導すべし。

翁がこゝに書き加へたる二首の自詠は、翁が歌論

の本領を知らしめむとしたるもの也。この歌の妙味を知り得ること能はざるかぎりは、未古歌を解し得る境遇に達し得ざる間なり。信じて以てその敎を實踐修行すべし。

見せ賜へる契冲の歌はいかなれどかくあしきにか。此の人にれきていぶかしきことなり。その樣は、古歌を覺えて語などは古を用ゐたれど、歌の巧の意皆後世の俗なり。凡その詞は古を用ゐても、用うる意後世なれど皆後世となりぬ。古語ならでも古の意をたに得れど皆古語の如くなりぬるなり。後世といへど猶、古今歌集まではさはいへど心高し。後撰より俄に下りて、皆心低く、詞野に近し。此の人左どかりの事を心得ぬとも覺えざるを、また草味故に流俗の垢の洗はれぬ成るべし。千變萬化いか樣にも巧みもせらるゝ力を己克して心高く巧をやむるに非らでは、今の人の歌はとかくに賤く成るぞかし。此の意をよく知り給ふは鎌倉殿一人なり。末の句などに巧みいふべきを、强ひていはでたやすくいひ下しなどせし所に高き心有るを考へ給へかし。

纎巧微妙の作の讀者に感を與へ易きは、猶大言壯語に世人の耳を傾け易きがごとし。翁の共に取らざる所なり。謂ゆる學廣大を致し、精微を盡し、高明を極めて中傭に道るもの、これこの翁が歌學の本領なり。余は今玆に古人の歌論を引證して、翁の言ひのこされたる所を敷衍し以ちて益其のよる所を明にせんとし、稿なりて一讀するに、却りて翁の意をそこなはむとするものあり。こゝに知りぬ、文も猶細作は却りて大体を誤るものなることを。依りて悉くこれを塗抹して、謹みてこの論にことを加へず。讀者余が圈點を施したる所に注

目して、翁が深意を了解せよ。

前號正誤

卅五ページ上段四行メかはりのハかはりめノ誤　同上下段五行メあらむハあらむ　同上六行メ有らむモ有らむノ誤　卅五ページ下段七行じわむノ下にヲ脱ス　同上十一行れのすからハれのづからノ誤　卅六ページ上段十行難くハ難しノ誤　卅六ページ下十三行山城國にハ山城國はノ誤



主從心得草（前編續）

諏訪忠元寄贈

氣を兼方便あらんは、下ばかりにあらず、上も又兼ずしては整はぬものなり。思ひやりは両方になくては叶はぬ事なり。主従一致せねば物は成就せぬものなり。古語に曰、重き御方はしらず、我々式の身の上にて、奉公人を遣ふと思ふはひが事なり、皆奉公人に遣はるゝ也。輕ふても、上に立べき人は、萬事に思ひやりがなくては人は歸伏せぬものなり。手を取て敎ゆるばかりに、いひれしへ引廻し遣はねばならぬものなり。大がい、此方式につかはるゝ程の人間故、其心にてつかふべし、都て家業は、身のあぶらをしばる程にかせがねば身體かよくならず、手代、若い者も、身の油をしぼりて精出す奴と、油をうりてなまけるやつと、主人の眼の桝を以て、毎日々々はかりわけ、かせぐ奴には褒美をとらせ、なまけるやつは異見を用ひて油を取べしとあり。此事入用の人多し、考ふべし。

又、主人なりとて家來をあなどるべからず。人間一生はしれがたし、前に榮へ後におとろへ、始富にして終り貧きあり、循環翻覆盛衰波のかはる〳〵うつが如し。たとへば、日出れば月かくれ、其子長すれば親没するが如し、各々覺悟あるべし。又　天子は天地への御奉公、天下は　天子へ御奉公、大名旗本にいたる迄、一人として奉公せざるはなし。只上下をわけて世を治め、善事をなすの元とするのみ。是、身心を愼んで、假にも驕慢放埒あるべからず。是福德の根源安心の瑞相也。しかとしるべし。萬能ありといへども、身を修めず、家をとゝのへずしては大馬鹿ともいふべし。極々のおんづまりは、人々分限を知り、身上をよくたもち、家内和合して暮すを上々吉共いふべし。主從の心得にもなる事は、大學絜矩の道を考ふべし。

八佾第三に、定公問、君臣を使、臣君に事こと如何、孔子對曰、君臣を使に禮を以し、臣君に事に忠を以す。といへり。此心は、臣の君に從ふ事は、草の風になびくが如し、君臣を使ふに禮を以てすれば、臣必忠を盡す、若君禮を失へば、臣も自から不忠になる事あり。然れ共、君は臣の不忠を咎めずして、禮のたらざるを愁ふべし。臣は君の禮のたらざるを思はず、忠のたらざるを思ふべし。君臣此心あらば、終に和合して大功をなす事あるべし。譏草に曰、親老て子にそしられ、師匠あんじやくなれば弟子にそしられ、夫貧をれば妻にそしられ、主おとろへて從者にそしらる。といふことあれど、それは、各別、主人には權柄といふものそなはれば、家來をとりひしぐに何の事かあらん、心得あるべき事なり。（易の、跋扈の臣、君子の德は、風早く辨するの辨せざる道

理が入用なりたる人に付て心得れき給ふべし）

詠歌要意（つゞき）第百四十九號大意は要意の誤。

吉田久胤寄贈

是をよく〳〵吟味候て、稽古あるべく候、右の外、稽古の古實別てひとつも無之候、言外に餘情を含み、吟中に景氣を生ずる事は、至て無双堪能の歌人の上に候へど、格別のことなり。右の三要斗を心に懸候て、朝夕稽古あるべく候、工夫鍛錬候て、一際上り候上は、最早日本國中にて、詠草恥かしげなく差出さるべく候、夫は三の稽古首尾の上にて成就する事なり。風体姿などゝいふこと、ゆめ〳〵心に懸られ間敷候、姿杯は思ふ樣に成物にて候、まして珍らしく希逸体面白などゝ心にかけ候事、とかく有間敷事にて候、道理よく聞ゑ、風体いやしからず、異相ならず、句、のひちゞまらず、程拍子よく詠成候へど、風体自然と異相に成候事なく候、風体姿を心にかけ候へど、それにひかれて、聞ゑざる事、古めかしき事、必らず出來候、此旨能々可レ有二思惟一候、其外題のこと可レ被二心得一候、賞翫の心すくなくとも、いひれとさぬやうに可レ有二了簡一候なり。

右者從二清水谷大納言實業卿一先師釣月上座へ御相傳の書、傳來の趣、聊無二遺漏一令二傳授一者也、

文政八年酉十月吉辰　平井寛敬（華押）

小泉眞種賢哲

北の海路

第三信

石槫千亦

十時、船は進行をはじめ候。灣を出づれど波いと高

く甲板を洗ひ去り又洗ひ去り候。雨は霽れたれど、風はなほもとのまゝに吹きすさびをり。事務長にきけど、夜來のさけのいみじさはいはむかたなく、函館にては、船の出入一艘だになく、ことに室蘭には三艘とゞまりをりて、いまだ一艘も歸り來ずといふには、いたく驚かれ候。さては其安げなりしは、全くわが眠りて知らざりしによりたることをさとり候。いかによく眠りたりとて、波になれねど、必ずゆりおこさるゝものなれど、こは全くわが船になれし結果かともはれて心づよく、函館の靜かなりしは、山もてつゝまれたる灣内なりしによることも、はじめてさられ候。今日も横になりて、雜誌と首引いたし候。もとより眠りたることも屢々なれど。

定めの時よりは一時間斗れくれて、室蘭に入り候。北海道とてれもひくだしつれど、こゝも中に盛なるものにて意外に候。停車場前なる河田といふ旅館に入りしに、とまれる客の多さ、これ又驚く外なし。

われはこゝに來て、又いたく「メリー、ローズの艦長」を思ひ起し候。そはわが兵備の道にて、未だ陸軍も完からず、海軍はことに甚しく、海事思想はいまだ國民の腦裡にしみわたらず、今、獅の如く、鷲の如き慾のほかには何もさらぬ國ありて、その軍艦をもて運漕船をもて、この北海を占領たらむにはいかに。たゞいさゝかばかりの風波にても、本土との道絶ゆ、全く孤立となり、應援として外よりつゞくべき事だに叶はぬをいかにせむ。さては電信をたちて內地にわからしめず、わかれどとて、本道ははやく旭日のかげならぬ旗のなびきたらむにはいかに。四圍に水雷をさき、遠く軍艦をもて防ぎ、わが砲臺は、われを擊つ利器となりたらむにはいかに。かの

函館や室蘭や小樽や、幾多の年月と幾多の腦力と幾多の財寶とをなげうちて成れるうまし處も、思ふまゝにふみにじられ、船をやる大本なる石炭、はた彼の爲めに利を加へむ。異國の軍人人夫いりこみて强盗强姦放火をはじめ、あらゆる罪惡をつくさずてはあかじ。あはれこゝに至らど、萬國公法も塵芥のもとに埋れて、灰燼と異るなからむのみ。あはれ時なげどとて叫べどとて、及ぶべきこともあらず海道の人々よ。あらず、わが四千萬の同胞よ。ことに其局にあたれる人よ。など北方の海を見ぬ、殊にはなれ島なる北海道を見ぬ。あゝ誰かメリー、ローズの艦長たらむものぞ。あゝ誰かマウリングたらむものぞ、男女の中のみかきて、わかき男女に心中を誘ふ小說家といふらむ人は、などかの如き海事小說をかきて世をいましめざるなど臥床に入りても中々に眠られず。風ますく\ふき、雨いよく\はげし。はるかに岸うつ波の音は、今霄ことさらに耳にたちて、安き夢もゑ結ばず、又硯箱かいよせてありしまゝを。九日夜、室蘭より。

第四信

十日、夜明くれど、東にむかへる室のことゝて、玻璃戸を透して、紙障子にきらく\と輝く旭日のかげに驚き、おもひの外にも早く起きいで、直に廊にいでゝ見やるこゝちいはむかたなし。昨日の疲勞は吹き來る風にちりけむ、名殘もとゞめず。寒さ忘れて、寢衣のまゝに佇まれ候。室蘭港は誠に趣ある港にして、打むかふ東の方には、うねく\と青き山の、北の方よりめぐり來て港をなし、其盡くる處、山のきれて飛びしかとれもふやうに、島は大きなると小さとが、立ならびゐ、港内には數多の汽船碇を

おろし、かの島のはるかあなたに、薄墨の如く山の見ゑたる、南の方には又東の方の如き山ありて、それやがて西の方へ走り、北の方につゞきてあるらしく見ゑ候。こゝには炭礦鐵道停車場ありて、札幌にも小樽にも通ふべき起點となれり。繁盛をきはめたるもことわりとおもはれ候。

氣候は仙臺も青森もさまでには思はざりしかど、こゝに來ていたく異なることをおぼゑ候。やどれる人々は皆あつき夜着やうのものをきたる、いたく異様の考起り候。おのれもいつも薄着にて、いまだ袷も綿衣も用ゐず。されたるにもあらず、もたぬにもあらず、たゞ夜つきて朝たつに、革嚢よりとり出でむことの、うるさゝに堪へねばに候。

八時、室蘭發の汽車にて、札幌にむかふ。輪西驛をいでゝ來る處、すゝき限なく生ひたり。人あり、馬ひきてたてるに、わづかに其半を見るばかりに候。屯田兵の家なりとて、板葺こゝかしこに見ゆ。されば其馬の主人は、其家の主人なるべくや、何にしても見るに足るべく候。昔の西行實方などこのわたりまで遊びたらむには、いかばかりの名歌世になりいでつらむと、口をしう候。わが腰折はかゝずもがなには候へど、

小車の輪西のさとのすゝき原
　おなじ穂並の限なきかな

幌別の里の前よりこれまでは、左にのみ見たりし海、右に見ゑそめて、しかも一望千里、目にさはるものなし。岸によりきて、雲の如く烟の如くわきたつ波を見れば、洋はあれすさびたらむとおもはれ候。もとよりこのわたりの冬は、いつも波靜かなることなきはいふまでもなく候。その波の上に、沖のかもめ

の舞ひつ浮びつ、波と共に空にとび散るさまは、快なりとや申すべき、壯なりとや申すべき。たゞ惜むらくは、この海に、瀬戸内あたりのやうに、白帆いくつかうかべたらむには、いかに趣まさりなむとおもはれ候。

登別停車場をいで、いと短かき隧道をいづれど、海は軌道近くまで入込みたり。その兩側は山にして、山の裾にはいと高く大きなる巖あらはれたり。その高大なる巖石によせて上るかとおもふやうに、波濤は風のまに〳〵、時をつくり音たてゝたぎちたり。登別といふ名は、この波のためにおほせられたるにはあらぬかとおもふばかりに候。往來の船路難かしからずば、見せまつりたき絶景に候。

打よする波をはげしみあら金の
　かたき岩根もくだけちりなむ

追分あたりより、軌道の前后左右の樹々は、みな霜に染みたり、其けしきいはむかたもなく候。

追分をさかひとなして車路に
　見ゆる限は紅葉なりけり

車もる風さむけれど窓ちかく
　樹々の錦のきよとちるらむ

早來といふ處にて、思ひもかけず、伯の君はのり給ひぬ。とりもあへず其室にものして、何くれとかたらふ。君はこゝより四里ばかりなるその農場にかねて來ましぬるを、けふ札幌へものせむとしたまへるなりけり。明日たいめすべき筈なりしを、けふしも仝し車に入りましぬることの、めづらしうもうれしうもおぼえ候。

四時といふに札幌に來り、山形屋に投宿いたし候。

農場よりともに來れる後藤氏、東京より從ひまつれ

る鶴田氏と全室し、日頃のさびしさも打わすれたい何となく面しろく候。十日夜、於札幌。

養痾漫筆（其三）

親々書屋主人

房州に病を養ひて既に三ヶ月、明治三十年も暮ゆく師走とはなれり。京の人は俗事いそがはしきをりに、余は獨り、水清く山緑なる山里に、浮世をよそに閑日月を送るも、また世の外の遊なり。今日は十二月のみそかなれど、田舍のこととて、陰曆を用ゆれど、平日にことなることもなし、門松立てたる家もなく、餅搗く音もきこえず、いと靜かなれど世の外に病を養ふ余も、殊更に年を迎ふるわづらひなし。杖をひきてまた家を出で、今日は那古の觀音に詣でんとて、北條町海岸を、北に行く、此の街道は、これ那古へ至る道にして、松並木生ひ立てり、この日少しく風あり、松風の音波の音と和して、鎗々として物凄し、二十丁ばかりにして八幡神社あり。境内廣くして、老たる松幾百株と云ふを知らず、社殿もまた壯嚴なるを拜し奉る。これ、房州第一の神社なりと。社の傍に神官の宅あり、庭に蘇鐵を殖う、高さ二間ばかり、枝左右にはびこりたるさま、稀に見る所なり。房州は氣候暖かなるゆゑ、暖地の植物多く、枇杷密柑の類多し四方の景色などうち眺めつゝゆく、橋あり、那古橋と云ふ、こゝをすぎ數丁にして觀音の山下にいたる、石段あり、昇りて見れど、觀音の御堂は山を切り開きたる地に建られ、山上には緑の老松、御堂を蔽ひて繁り、御堂は東京淺草觀音を形どりて造りしものと覺ゆ、其のさま少しも異ならず、御堂の前庭にて望めど、海原遠く見渡して、滊船の往來す

るさま、漁る小舟の網引くさま、さながら畫かけるがごとし。山下は那古町にして、商家うちならび、鄙には珍らしきにぎはひなり、山を下りて茶屋に憩ひ、晝げとゝのふ。なほ、船形の觀音に詣でよと家の翁のすゝめしかど、道遠ければ、ねゆかずて北條の宿へかへれり。歸る道すがら、松の枝、あるは橙など、車にて東京へ送れるを見る、獨り東京の、大みそかのことなど思ひて、夜早く臥戸に入りぬ。

明れば明治三十一年一月元旦にて、とくをきて身を清め、遙かに東天を拜して、年の始めをことほぎ、筆硯を洗ひ清めて。故里にある、母兄弟に手紙したゝめて送れり、御大喪中なれど、知れる人々には遠慮して贈らざりき。宿の下女、朝げもち來れど、雜煮なきに何とのふ物足らぬ心地せり。天氣は淸く、海の波靜かに、御代の太平を祝へども、田舍のことゝて、門を出づるも、元日の景色もなし、隣の童らが集りて、今日は新暦の正 月元日なりれ目出たやと、笑ひのゝしるゝもをかし。余も田舍人の群に入れど、さまで元日の心地もせず、たゞ天氣よければ、また名勝を尋ねんと、ひとり門を出づ、里見氏の菩提所は、本織の里延命寺なりときゝ、北條町を東に出でゝ行く、道すがら見るべきものもなく、松の林を過ぎ、竹むらを通りてゆく程に、府中となん呼べる村に出づ、府中村に寶珠院といふ寺あり。これ安房七大寺の一なりと、伽藍の壯宏なること、昔の盛時を追想すべし、こゝより十數丁にして本織村延命寺にいたる。田の細道を行くに、遙かに高く聳ゆるは、延命寺の山門にて、朱塗の塔靑銅の瓦、山にそひ樹の間にかゞやき、里見氏累代の菩提寺たる昔を忍ばしむ。門に入り玄關にをとなへど、寺の老僕にやあ

らん。出できて、今日は住僧留守なれどとて、自からあないして、里見氏累代の塑像を拜せしむ。十代の像皆あり。丈は二尺ばかりにして坐像なり、中に女の像あり、累代の北の方なるべし。拜しをはりて、寺の後の山上に昇りたるに、こゝには里見氏代々の墓あり。墓はみな五輪の搭にして小し。里見氏十代の間、安房を領して威權をふるひたれど、寺院などの壯嚴なるもの、今に存じて、房州いたる所に多し。中にも延命寺は、菩提寺なれど、華麗を極めたり、寺に累代の寶物多く藏すときくを、住僧の居ざりしため、ゐ見ずてかへりしはいとくちをしゝ、たそがれどき北條のやどにつきぬ。

三四日をすぎて、余が病も、はやこゝろよくなりにたれど、くす師のもとにゆきて、京にかへるべきやを問ひしに、くす師診察して云ふ、君が病今は癒ゐたり、京にかへりて、筆とる務をなすもさはりなけれど、よく心して身を養ひ給へと、ねむごろに敎へられていとうれしく、四月餘りの療養、全く病に効ありしを喜び、京にかへるべき日を、指をりかぞへてまてり。されど、正月一二日の内は俗事いそがはしく、身のためあしかりなんとて、七日に行李とゝのへ、滊船にうちのる、暫らく住なれし北條の里、何となう名殘をしく、海岸の松原は余が耳を淸め、澄める海波は余が精神を洗ひ、危うかりし余が病は、いつしか全く癒ゐにたり、去るに望みて深く房州の山神水靈に謝す。船は波をけて走り出でたり、遙に北條の里の、霞と共に見ゐずなるまで、甲板の上にて見かへりく、黄昏靈岸島につく。これより余が身は、また紅塵萬丈中の京人と化し去らんか。嗚呼この神無月陸奧を出で、雪をふみて百五十里の道を

去り、松島の霞、鹽竈の煙を愛で、京に入り、また去て房州に遊ぶ、當時余が病危くて、母兄弟ども、いたく心を脳めしときく、今にして思へば半年を經たり、たゞ身のさちあると、くす師の力とによりて、もとの身にかへりたるは、いと〳〵うれしくてなん。房州の地、なほ尋ぬべき古跡多し、そはまた、后日遊ぶ時あるべし、養痾漫筆は、こゝに筆をとめつ。京にかへる後、親々書屋主人、紅塵萬丈のうちにしるす。

情の一夜

紫　光

（上）

なつかしき寄邊の母を失ひたる、七歳の春より清の身は、浮世のうみにもてあそばるゝ木の葉舟、ある時は狂ふ荒浪に岩角にうちあけられて、微塵にくだかれむとし、ある時れそろしき鬼の一口にあひて、身をも失はむともしつ。

一たびは繼母の手にかゝりてからき目を見、二たびは繼母のたくみに家産をうしないたるうきふしを重ね、幼き身に積み重りし苦勞のはては、またも細き手に閼迦を手向けて、たゞひとりたよりに思ひし父を、草葉の陰にとはねはならぬかなしき身となりぬ。父なる人は山下正敎とて、もとは幕下に弓矢とりし武士の果にて、年頃村人に漢籍など授けたりし身なれど、父うせたるにあはれなりとて、別に親戚とてもあらぬ清の、まだ十三の幼きを、誰彼の斗らひにて、力を合せて養はむとて、葬送の日より何某の家に引取られぬ。

かくて三月四月の程はすぎたりしが、もと〳〵生れ

つぎたる父の一轍の氣性は、容易く頭を下げて人の機嫌をとることもしらず、なか〳〵に學問好の根性は、兎角百性どもの心にあはぬを、清はまた草かりなどの業をいやしめて、田うゑ田の草などのいそがはしき頃もしらずがほにてすぐれど、漸くに人にわかるゝやうになりて、年のゆかぬとてあまりの事と、村の人々の蔭口にものぼり、人々のあしらひもつらきやうになりて、をり〳〵は幼き袖の涙にぬるることもあれど、清はそのならひをも改めむともせず、是を誡むるものありても、持ちて生れたる傲骨の氣は、經來りたる艱難の爲に、一種の僻もそひて、きき入るべくもなし。たゞ父母の墓參のみはかゝせしことなきに、年老いたる寺男は、いつも墓前になき沈む兒の、ものあはれなるさまを語草としぬ。

猶そのまゝにてありしが、父の世にありし頃、とりわけて親しき世話をうけしものゝあるが、こゝより少しはなれたる所にて、可成にくらし居るものゝ、此方にて世話しまゐらせんといふに、村の人々も是を幸とし、清もよろこばしくおもひて、ともかくもとて、しばしはそこに寄食することゝなりぬ。されど、こゝも鬼の宿、はじめの程こそ亡師の子とてもてなしもしつれ時のたつにつれて、やう〳〵疎くなるは人の心の常、もとは近き宿驛の女郎なりしとかいふ家の妻の口きたなく、朝夕にのゝしるやうになりて、いつくも同じ寄食の身のつらさに、涙のたえまとてはなかりき。

早くよりいたく世の辛酸にあひたる清は、長閑に愛らしかりしとて人にはめそやされし心ばえも、今はやう〳〵浮世の荒浪にあらひ去られ、豐なりし頰、星の如く香りし眼さしも、今は名殘なくなりて、額で

しに人の面をぬすみみる癖なども亡はり、瘦せ蒼ざめし面ざしの、どことなくものさびしきが、いとゞ人にいとはるゝ種とはなれるなりけり。

されど、さま〴〵の苦勞を經たることなれど、身のなりゆきざまをつく〴〵とおもひては、いとゞかなしく、かくばかり人にいとはれては、遂にはいかにならむずらむなどおもふやうになり、心を無理にとりなほして、勸むるまゝに鋤鍬かたげて、やう〳〵に田畑の業をもたすくるやうになりしかど、家の人もすこしは眉をひらきしが、つれなきあつかひは少しもかはらず、働くやうになりしを幸に、今年十四となりしばかりの瘦腕を、一人前の働をせぬとてせめ、それ草刈、やれ水くみと、牛馬の如く追ひつかふに、かてゝ加へて家の妻の意地わるさに、かくてはとたへがたくおもひし折柄、ある日ふとしたる事より、あまりなる無法のいひがゝりに、性來の疳癖むら〳〵と發して、心のまゝに喧嘩して、ぶらりとこゝを立ちいでぬ。

清は心の昂りしまゝ立ちいではしたるものゝ、歸へるべき家のあるにもあらず、ゆきつくべき所のあるにてもなし、頃しも春の麥は青く、菜の花は黄に、霞はのどかにたなびくその間の細道をたどりつゝ、さま〴〵のこと思ひ出せど、かなしさのみ胸にせまりきて、小さき心のはりさけむばかりなるに、たへがたくて、道のへの草原につとふして、しばらくはなきもあがらでなきゐたり。

香をしたひ來たる蝶の二つ三つ、背のわたりひらひらととぶに、神の使の孤兒の心をなぐさめむとなるべし。草葉のかげの親こゝろ、そもいかなるべき。

されど、いつまでありともかひなければ、漸にたち

あがりて、何方にか足をむけむとおもふに、いまいさかひして來りし人のもとには、いかにしてもゆかるゝ義理にあらず、また彼の妻に謝ぶるはいやなり、こゝにゆかれずとすれど、さす方は父母の御墓のあたりより外にはなし、またとやかくいはるゝはつらけれど、この世によるべなき孤兒の是非もなきに、たとひ人はつらくとも、父母の御墓近しとおもへど、われにたのもしきふしもありなどおもひかへして、またもとの村に立ちかへりぬ。

されど、世は鬼のみにはあらで、村の年寄れるもの、さては淸の父の敎をうけしものなど、折々の茶呑話のついでに、このことをいひいでゝは、あはれがりしが、あるときこゝに立ちよりたる旅商人の、ふとこの事をきゝて、さらばその方を奉公にはいだしたまはずや、おのが主人は日本橋のわたりに呉服を手廣くあきなふ店なるが、この頃小僧の一人あきたるあるを、丁度よかるべし、その方も此の村の厄介となりてゐらるゝよりはよろしからむ、首尾よくつとめあげなば、それ相當の店はもたせ下さるなりとすゝむるに、さらばとて談合の末、いやといふ本人を無理に納得させて、それとさだめてたのみぬ。

かしこは賑はしき所なり、東京にはめづらしきもの多し、彼處にゆかば何にても望みはとげらるべし、東京の商人といへば、郡長樣よりもえらきものなりなど、よき事のかぎりをつくしてすゝむるに、まことにはあらじとはしれど、とてもこゝにいとはれたる身の居たりとて、何のおもしろき事もあるまし、都にいでたらば、また何とかなるべしなどおもふまゝに、運を天にまかする心地にて、淸は心さだめて、いでたつといふ前の夜には、親しき父母の墓處に、心

のかぎりのあつき涙をそゝぎて、別をつげたり。
さて、今日はいでたつといふことゝなれど、流石に住みなれたる村を立ちはなるゝことなれど、心細きこと限なし、村の誰彼、近き土橋のわたりまでおくりくるもあり、双子の袷の袖にふく風も何となく心ありげに、道の邊の柳うちなびくも深く愁情を曳く、今歳十四の清たゞひとり、しらぬ、人にともなはれて、しらぬ他郷にいでむとす、心かなしくなりて、しば〳〵みかへりつゝ歩おそかりしも理なりけり。

（下）

新参者の常のならひとて、雑巾もちて拭掃除することをいひ付けられて、朝に夕に二人三人の者と家の内のあらゆるものをふく、そのすみたる後は、荷つみたる車をひきて、手代にしたがひてかしこゝとめぐりあるくなり。霜白く風さゆる晨も、日てりはたゝくころにも、いつとてかはることなければ、冬はひゞあかぎれのたゆまなく、夏はをり〳〵に眼もくるめくやうの事あり、かゝることにはなれぬ清の小さき心には、いとゞつらく、まして家の兒女などの、容赦なく責めのゝしりなどするに、もと〳〵人に下ることを好まぬ性のはらだゝしく、こゝも憂き所なりとおもはれて、そゞろに父母の許をおもひおこす事なりき。

されど、かへる所もなき身なれど、いかにもしてとなほ半年ばかりは怺へ〳〵てありしが、いとゞたへがたくなりて、冬の末つ方またひそかにこゝをぬけいでぬ。さりとて住みよき里のいづくにあるにもあらず、いづくも同じながらに、ひとしきくるしみをうけてあらむには、猶しらぬ他郷にさすらひて、父母の魂のとゞまりてあるもとをはなれてあらむよ

り、つらさながらに彼の村里こそまさりけれどれもへるなりけり。

清は主家をたちいではしたるものゝ、着たるまゝなれど素より懐に貯のあるべきやうもなく、たどりゆかむにも道はさだかにしらねど、唯覺束なくも過ぎ越し記臆の朧げなるを便とはせるなり、然も日はすでに高し、道程も八里あまりときけるを、知らぬ道をたどりゆくことなれど、歩みもはかどらて、道の半を過ぎたらむとおもふ程に、日は淋しくも傾きそめたり。歩みなれぬ身の、足はやう〳〵いたくなりて、今は殆あゆみかぬる程なるに、まして今日は晝飯をもせねは、身はいたく疲れをればにて、風の寒さも一しは身にしむやうなり。

されど、こゝにてとゞまりては、家もあらぬ野中なるに、いとゞくるしかるべし、疲れたりとてもと、強て心をふりおこしてゆく、秩父の山は遠く紫の色にうつりて、筑波の葉山繁山は、猶遙に糢糊たり、道の邊の榛の樹に、木枯の風のおるゝも物淋しく、つらなれる田畑に人もなくて、鴉の鳴聲のみ寒くきこゆ。

猶半里も來たらむかとおもふ程に日はくれぬ。清はいとゞ心細さのまさりて、今はつかれをも忘れたるやうにて、ひたすら急がむとすれど、心のみはやりて足はしたがはず、その中に全く夜に入りては、生憎月の光もなく、唯星明をたよりてゆくに、風いよ〳〵冴ゑて、今は道たづぬべき茶店もみな戸を閉ぢたり。されど、たゞ廣き道をとのみたばつかなくもたどりゆく。

やがて名もしらぬ川のほとりにいでたり。少ひろやかなる流のやうすなるが、汀のあしの戰きも心をさ

わがしてもの凄く、かなたに見ゆるは狐火などにやなどおもへど夜寒いとゞ身にしみておのゝかるゝに清はふとおもひよりたる事あり、よく話にきゝたる身投などいふは、わが身の如くかく逆境に陷りて、またせん方なく、歸るに家なく行くに宿なきものゝ世をはかなみての事なるべし。げに此の現世にありて、無情酷薄のものに苦しめられてあらむより、寧身を流にしづめて、現世の羈絆を脱せむこそまさるべけれ、父母の御許にも侍ふこともうべきになどおもひはせしものゝ、流石年端ゆかぬ心に死といふことのをそろしくおぼえぬにしもあらねど、それもえはたしかねて、さりとて立去りもせず、さまざまのことをおもひうかべて、そゞろに涙ぐみぬ。折柄彼方より小田原提灯の火影みえて、一人の翁のこゝに來かゝりけるが、清の姿をいぶかしげに見まもりつゝ、ゆきすぎてまたたちもどりて、そなたは何れのものぞ、などてかゝるところに夜も更けたるを彷徨ひ居る、道にても迷へるにかと問ふに、とはれたるが嬉しく、涙ながらに審に事のさまを語りぬ。翁いとあはれとおもへるけしきにて、こゝよりはまだ二里あまりもあるを、そなたの足にては覺束なかるべし、また少の貯蓄もなしとや、晝飯もまだ食はずとや、嘸ひもじからむ、何もあらぬ家なれど、あまりいたはしければ、今宵はわが家に泊めてやらむに、明日早くたづねゆくこそよからめ、いざわれにつきて來ずやといふに、嬉しくて、地獄に佛といふ諺あれど、それにもまして、神とも佛ともたとへやうもなきやうにおもはれて、翁につれだちて板橋をこえて、暫時ゆく程に、家居かれこれある所に出でたり、道より少引きいりたる所が翁の家なり、人

々は土間にて草鞋などつくり居るやうなるに、翁先入りて、かく〳〵のものゝあるに、あまり哀なれど連れ立ちてきぬとかたりつゝ清を招ぎいる、何もあらねど今夜一夜はやすらかになどいふ、今年のふりつゞきたる雨に川の水溢れて、田のもの畑のもの、すべて、水にひたされたる事十日余りに及び、われわれが命と頼みしもの皆腐りて、食ふべきものなくなり、家は傷はれたれど繕ふべくもなく、僅に貯へ殘れる稗粟などを、聊の米と交へて、餅の如き物にして日々の命を繋く程なれど、何も馳走はなし、此の餅にてもと勸むる翁の言につれて、嫗はまた洪水の慘しき話などをつゞけぬ。

乏しき中ながらに誠をこめて人を疑待すことよ、冷かに荒き浮世の浪の下にも、かく暖く穏なる處のありけるよと、今までの人の辛さなどとれもひくらべつゝ、情ぶかき惠に、今日一日の空腹を充して、まことの父母の許ともれもひつゝ、身の疲もわすれたるやうなり。

つかれて眠からむに、床のべてあれど遠慮なくとの言に、清はいためる足ひきゆきて臥蓐の上に横はりぬ。かのまゝにしてゆきたらむには、今頃は猶野中の道にさまよひてあらむを、さても情ある人々よ、世にもかゝる人もありけるかな、饑ゑて寒く、歩に疲れたる孤兒の身に、腹充すべき食と、あたゝかき休所とをあたへたる人よ。われはこの人をいつまでも忘るゝ期なかるべし。いかに去てもわれはこの家を忘れねざるべしなど思ひつゞけつゝ、今宵一夜は安らかにいぬるなるべし。

今宵一夜は人の情にあたゝかき宿をえたれども、明日よりは再つらき世にいでねばならぬ清の行末はい

かなるべきか。夢さめて半夜に物思ふらむ折はいかに。

世情の花は榮華の上にのみ美しく匂ひて、浮世の月は筆門の中には光をわかたす、公子は常に白馬銀鞍長安の花月に誇れども、孤兒はことしへに轗軻落魄月雪の冷酷に苦しむ。唯天上の月の無私の光、仙鄕の花の無偏の薫の彼等を慰むるあるのみ。（完）

奇習　　西海坊

猪肉（その七）

肉類をしゝといへど、獸肉中最古より食料となされしは猪肉ならむか。おのが國（肥後玉名）にては、一般に、この肉に限りて、皮をつけたるまゝこれを食ふ。且皮目のなき肉は、一般にあまり好まざるが如し。これは、非常に野蠻じみたるやうなれど、決して然らず。この獸の脂肪は、殆この皮目にありといふも不可なかるべし。

蔓茘枝（又錦茘枝）（その八）

おのが國にては、これをにがごうりといふ、苦き瓜といふ義か。夏熟するものにて、熟するに從つて其色赤く、殆んど胡爪の赤く熟したるがごとし。この疣ある表皮は頗苦味を帶べとも、綿はいたりてあまし。されど、余が現住地（伊勢度會）などにては、その綿のみを食ひて、その表皮をど食はざれども、余の古鄕は全これに反す、もとより、あまり上等の蔬果にあらざれども、味噌漬にし、或は油味噌などにして食ふ。そのにがみを帶べる所却りて味あり、綿をど食はず。

言語（その九）

所風俗國言葉といへど、強ち咎むべきにはあらざれども、日本の標準語ともなるべき東京の言語が、日に月に破格せられて疵物となり、その疵物が漸々に各地に輸送せられつゝあるは、吾人國語界の爲大に嘆かざるを得ず。もとより古雅語と俗語との區別はありたれども、語格正しき俗言が湮滅し去らむことををしむ。

余が故山を辭したりしは今より五年前すなはち支那艦隊を對島に封鎖せりとの虚報の傳はりし廿七年九月なりき。ふるさとに待ちわびたまへる父母あれど、いまだ業ならざれど、錦の衣まとはされど、位山にのぼらざれど、この種々の事情の下に、いまだ一たびも反省せず。されど、今日行はれつゝある言語がいかなるものなるかを知らざれども、所謂戰勝日本國膨脹日本國の名の下に、言語もいかに變改したるか、實に豫想外のこともあらん、こゝには廿七年當時のまゝをかきしるす。

落ちる。剥げる。投げる。刎ねる。等の俗語は、今尚余が國にては、上二段に活用して、落つる。剥ぐる。投ぐる。刎ぬる等のやうに用う。ことに、いぬるといふべきいを省きて、ぬるといふごときは他府縣の人々きゝ分きがたき處なり。

古典上の言葉の今に殘れるもの少なからず。いがみあふ（嚙み合ふ）まうら（男根）かたま（籠）

ズツ　ジヅはたしかに區別す。

しかれども、人をひとといふことあたはず。且、ろの音の頭につくものは凡てどと發音す。たとへば、ぎろん（議論）とはいへども、どんこ（論語）といひて、ろんごとはいはず。櫓をろといはずしてどといふ。もとよりこれを文字にあらはすときは、奥州人

の、ヒヘイエの區別なしに記すがごときことあらず、只發音するときのみなり。

「熊本人には、ング（エヌ、チ）の半濁音なし。萩をはぎと明白に發音す。されど、中國人の鼻にかけて、はぎといふを聞きては、あだかも梅毒患者にあらざるかを疑ふ。

セン、又ハセン、といふべき處をシェンと發音す。カンとクワンとを區別す。伊勢などには戰勝後の事とて、松島艦、高千穗艦と國音相仝しとて、松島館、高千穗館など〻名付けたる旅館も多かれど、吾人の耳には、伊勢の平氏は眇なりといひし程にはをかしくはきこえず。

「普通に、山が見ゆる、鳥が飛ぶといふべき場合には、悉、山の見ゆる鳥の飛ぶ、風の吹く、などいふ。

「明日は君の處に行くと自身を主にしていふべき處を、この二人稱の場合に限りて云かいはず、行くべき處を主にして、君の處に來るといふことは古へ、れもひつゝぞくるその山道をまたやまだにはなきてかくらむ。など萬葉などに見えたるものと仝じ使ひ様のやうにたばゆ。

その他土語といふべきものは、

バッテンクサイ	あるけれども
イヒヤウ	異様？或は意表？
モッカリー（書生語）英語のモッカリーに符合す	
アタマチカル	頭からの意
ソギヤアン	そんなに
イバシイ	非常と仝し
シカシケッドン	然しけれどもの促れるもの
タマガル	たまあがる

目下わか國學生の模範を示さむとの意氣込をもて敎

育しつゝある熊本縣立尋常中學、濟々黌の學生は、普通一般學生の稱呼と異にして、互に君僕を用ゐず、某サンと呼べばハイと答へ、君といはずしてアータ（アナタ）といひ、僕といはずしてワーシ（ワタクシ）といひ、教師のことを全學生間語るに、何某サンと呼ばずして、必何某先生といふ。これもまた彼黌一種の特色か。

才くらべ（十七）

蓬生屋女史

近きむかし音に聞ゑたる小說家馬琴翁の許へ、あるとき、ある人、一葉の短冊をもち來り、翁がかねてよみ給へる

はすあみも屠蘇の袋のなりに似て
祝ふ銚子の濱のはつ春

と云ふ歌を此の短冊にかきて給はれかしとあるに、翁、心得て、やがて墨すり筆もちて、かの短冊をとり上げて上に海邊初春と題して、はじめ、はすあみとかくべきを、ふと思ひたがへて屠蘇とか



きぬ。こはあやまれりとて、翁しばしたゆたひしに、さらば外の歌にてもくるしう候はず、何にてものし給はれかしと云へど、翁は答へもせず、しばし默思して、やがて、その筆をひかず、そのまゝ、

屠蘇くまぬ浦の苫屋も春くれど
香に醉ふ門の梅の花貝

とかきて與へければ、かの人はその即妙なるに感じ、數度よろこびをのべ、れし頂きてかへりけり。才ある人は過もまた中〱に興をそふるものなりかし。

笑話（奇談一笑）

か丶　み丶

皷聲鼻頭を紳縮せしむ

むかし人ありけり。いかで坐ながらにして、百金をも得てしがなとて、しきりに思ひなやめども、かひなし。ふと思ひおこして、清水寺に詣で丶、七日七夜が程、一心を凝らして、祈請せしかど、すなはち感應ありて、佛人になりて、手づから小き皷一つを授け給ひ、かつその用ゐざまをも、つぶさにをしへ給ふ。うれしさ身にあまりて、わが身ともればねぬばかりによろこびて、夜あけて、そこをまかり出でつ。途にして、とある木かげにた丶ずみて、しばしあるほどに、まことに一人の候、轎に乘りて、從者あまたゐて來つるにあへり。こ丶ぞと思ひて、身を木かげにかくして、佛の敎のまゝに、かの皷の表面をうてど、候の鼻たちまちに長くなりて、轎よりつきとほりて、二丈ばかり延びたり。從者ども丶、みないたく駭きて、こは奇しき疾ぞとて、侍醫どもをよびて、みすれども、その所由をしらず。せんすべなくて、た丶面をみあはすばかりなり。上より下ま

で、いとゞあわてまどふところに、かの人、その轎の前にひれふして、申すやう、これいさゝかも、あやしからず。百金をとらせたまはゞ、たちどころに愈えしめてんといふに、侯きゝて、百金はやすきことなり。まことに愈えしめてば、必とらせん。といふ。かの人またもとの木かげに、たちかへりて、かの鼓の背面をうちならせば、見るがうちに、その鼻斂縮まりて、もとの鼻にかへれり。ありあふ人々、手をうち、あゝとさけびて、ほめたゝへき。やがてかの百金をとらせて、去にけり。この人ひごろの願かなひつとて、よろこび勇みて、その鼓と共にもてかへりて、その妻に、いとゞほこりがほに、ありつるやうを、ものがたるに、妻常にあるまじきことよとて、うけひかず。いらちて、さらば試みてんとて、その鼓をうてば、おのが鼻、たちまちに延びて、二丈ばかり長くなりぬ。妻見て、こは實よとて駭きたるおもゝちなるに、こなたはえたりがほにて、今はもとのまゝにをさめんとて、今一つうちしに、あやまちて、鼓の表面をうちしかど、おもはぬ妻の鼻とみに延びて、夫の鼻と同じ長さに延びたるのみか、こなたかなた、絞結あひて解くべきすべもなし。しきり鼓の背面を擊てども〳〵、今はもとの鼻にはえ斂縮らずて、にはかにして、ともに身うせき。これを見きく人みな、身にあまれる願言の報ぞといひあへりきといふ。

まつの庵（三）

白魚女史

よもすがら傍ら近う馴るれど、中〳〵に少女心はうらはづかしう、うちとけし御答へは聞えず、たゞ物

云ふ毎に唯々とかしこむのみなる、あつき耳のほとりに、松虫のものあはれなる聲、己が窮屈なる思ひにつまされて、そゞろえ堪へず、彼を籠の外に放ちやらばやと思へば、君もまた我をまつ人の心のそゞろ忍ばれて、松虫の音、とりどりに身にしむ空高う有明のかげはひとりすみけり。

長月の長き夜、また宵と思ふほどに、いつかは曉つぐるくだかけの聲、あな憎くや、狐にかませなんと云ひつゝ、君は身づくろひ、此處に我れ、かく、御身と語ろふとも知らず、父も母もさてこそは物ればし給ふらめと思へば、にはかに心もすはらず、早や曉、御身との名殘はつきねど、また早く歸りなほし。我が先きに井筒にかけし言の葉、聞えもし給はゞ、必ず人にその髮あげさせ給はでよ、たとへ、親、心淺く、他人にあはさんと云ふとも、御身のみは、我が心の深さを思ひくみて、誰れにも見え給はでよ、やがて、我が迎へんまでの形見に、この手馴らしの手束弓、御身にあづけなん、あけくれ御身が傍にかけも給はらば、我が心もこもりてうれしうなん、必ずよ、必ずよ、我言忘れ給ふな。また便りもあらば來りなん、重武、重武は何處ぞ、そや馬もいなゝくは、とく歸りなんとてか、やは重武とてはや出で立ち給ふに、少女は今となりて、うらをしう、今しばしをひきとゞめまほしき思ひ、されどすがらんすべも知らず、たゞ遠く弓をうけ頂きて、とかうの術も、答へも、言の葉も知らず、たゞ悲しう身にしみぬる言の葉に、何となう涙のわきたつもあやし。

さては、れ立ち遊ばすにやと、用意やしけん、主人をはじめ、人々とき起き出づれど、重武も次の間より、直衣正しく出で來りつゝ、君にはいととうれ目



さめさせ奉りけるよ。僕れもはからず爐邊にまどろみ、やう〳〵今しも目さめて、親御の御心を思ひ汲み奉り、早う御伴し奉らまほしう思ひ居り候折りからにて候ひき。いざ御伴つかまつりなんと云へど、あまりにはかに候。それにまた夜もわけはなれず、せめて鳥のなくまでを休らひ給へ、御もてなしは候はねど、朝餉だもすゝめ奉らまほしなど云へど、松虫の音のみ、今はしきりに心にかゝりて、身もれちひず。志はうれしけれど、夜べまゐりしものに、腹もなほふくらかなれど、空もわけはなれねど、有明の月は、又さやかなり、馬もしきりにいなゝくは、家路を思ひてならん。とにも、かくにも、此處に御いとま申す、よべよりの心づくし、言の葉にはのべもつゝけねど、折りわらどまたこんなど、くりかへし〳〵給ひて、強ふる袂を拂ひて出で立つに、下僕も駒ひき來れど、これに厚く禮云ひて、すらりとまたがり、駒の尻むけ給ふに、御馬つかひもなきまゝ、重武つかふまつらんとて、甲斐〳〵しう口どみとるに、駒もたてがみのどして、主人と共に禮する如く、やがて走りしが、にはかに足をかへして、また門にわどり入り、家のまはりやをらめぐるもあやし。こや、何を迷ふ。とく家路へかけよと云へど、駒は、なほ、たてがみをのべつゝ、しづ〳〵めぐりて、手づなゆるむるも、こづくも動かず、如何はしつると君はつぶやぎながら、ふと窓のあたりふりかへり給へど、わりし少女、なほさづけし手束弓はなちもやらず、手にもちて、涙ながら此方を守るさま、見るより君は思はず手綱ひき給へど、馬もたぢ〳〵よろげよりぬ。君も詞はなく互みに涙をしぼり給ふに、武重れくれて走り來り、如何しつるとて、馬がくちどみとりひ

けむ、家よりも人々出で來りて、共に助けひくに、馬も一聲、あはれに、いなゝきて、しづ／＼とあゆみはじめぬ。あなや、よくも我が心知りたる。おどろくべきはやしかな、さては此次の折りも必ず汝こそ案內せよと心に云ひ聞かせつゝ、首をなづれば、馬はまた一聲高くいなゝきて、走り出でぬ。君は見かへりがちに行き給へば、馬もたてがみを橫さまにして、窓には少女の泣く淚、草の葉の露や添ふらむ。

文林



朝鶯　近衞忠熙

此ころはまかきの竹をねくらにて
あさとくきなくうくひすの聲

湊川懷古　久我建通

みなと川かみのむかしを忍ふれは
淚せきあへすなかれけるかな

江上霞　鍋島直大

隅田川いり江をさしてゆくふねの
ほのかにけさはたつかすみ哉

遠村柳　高崎正風

牛ひきて歸るわらはも見ゆるかな
やなきのおくや野村なるらん

河上春月　長谷信篤

うちかすむ月のかつらの川みつに
寫るともなくうつるかけかな

山春雨　水野忠敬

朝戸出にそら見わたせは遠からぬ
やまもかすみて春さめのふる

山里春雨　西三條實義

松かせのねとのみきゝし山さとの
しはのいほりに春さめのふる

梅間鶯　諏訪忠元

さき匂ふ梅のかをりにむせふらん
枝うつりしてうくひすのなく

野若菜　宮地嚴夫

雪なからかすみこめたる春の野に
みゆる少女やわかなつむらん

雨中若草　小出粲

若草のうへのみぬれしいろみえて
かれふにわかぬ春のあめかな

朝若草　大口鯛二

春雨はあけかたまてやふりつらん
ぬれしまゝなる庭のわかくさ

雪中若菜　大畑弘國

武藏野の雪間のわか菜うれしきに
年をつむとはおもはさりけり

海邊立春　下田義天類

葦かびもつぬぐみそめて和田の原
神代なからのはるはきにけり

伊勢の大神にまうでゝ　三浦千春

かしこさに言にいでゝは祈らねと
世を思ふこゝろ神そしるらん

紫式部　三輪義方

むらさきの深き敎へのこゝろさへ
こもる雨夜のかたりぐさかな

豐玉姫命　佐々豐水

赤玉のひかりよりなほうるはしき
神のみことをたゝへさらめや

倭姫命　仝

やまと姫神のみことのみいさをは
いすゝの川のきよくたふとし

人の許より笏をくれたるに　藤井行麿

宮人にあらぬものからさくもまた
いちゐになるといふはまことか

禁中雪　草野隆道

あたらしきみしめたえせぬ大宮の
ひかりをそへてつもる雪かな

餘寒　足立正枝

咲きそめし梅の匂ひはさなからに
軒端にさゆるかせのさむけさ

春風　菊池眞澄

北の海のこほりもとけししき島の
やまの國はらはるかせぞふく

海邊雪　宇井正夫

海原にふりつむあとは見えもせで
いそやましろくなれるゆき哉

新年雪　龜谷行

年たちて梅のたよりもきかぬまの
花とめでまし今朝のしらゆき

濱名湖　安齋篤敬

夕波のきりれしわけてゆくふねの
かけかすかにも見えにける哉

年のはじめに富士を見て　伊藤純三

豐なるみよのしるしをふじのねの
雲井にたかくあふき見るかな

早春海　木庭芳香

あらいそにくたくる浪の花みれは
春はうみよりたちわたるらん

梅薫袖　伊東祐賢

たをやめの袖にうつろふ梅か香は
いつれの園とひとやとがめん

早春柳　近衛貞子

霜れひもまたそのまゝの庭の面に
やなきはかりそ春めきにける

霞中雲雀　前田朗子

いつのまに大そら高くわかりけん
霞のうちにひはりなくなり

春夜雨　西四辻茂子

ぬは玉の夜ふかきわめも音なくて
春のねふりにさはらさりけり

春雪散風　松平健子

咲はなにさきたつ花とみしゆきを
つれなくちらすはるの夕かせ

早春海　下田歌子

大もりのうめのたよりも遠からし
かすみそめたり竹しはのうら

日出海　諏訪晴子

わたのはら昇る朝日のかゝやきて
ゑにもれよはぬなかめなり鳬

橋邊柳　小池道子

板はしのかたへのやなきもえに鳬
ともにくち木と見えつる物を

霞添山色　北島以登子

山まつの姿はそれと見えなから
みねにも尾にもかすみ棚ひく

行路春雨　南郷柳子

若くさのぬれたる色をなつかしみ
この春さめにふり出てそこし

庭春雨　原田蒼生子

池の面はさゝなみ見えてわか庭の
　うめにさはらぬ春のあめかな

峯椿　鶴久子

ことさらに人もすさめす峯たかき
　大きのつはきはなはさけとも

一月のはじめ豆州熱海の温泉にあそへる友人の許より此の地はいと暖かにて梅花も半は咲きぬれと共に見はやす友なきにとく思ひ立ちたまへといひおこせければそのかへしに　内田遊歌子

早咲きの梅にもましてうれしきは
　君かこゝろのにほひなりけり

子日　上海壽子

わかこゝろ松にひかれて引馬野の
　ひく手あまたの松をこそひけ

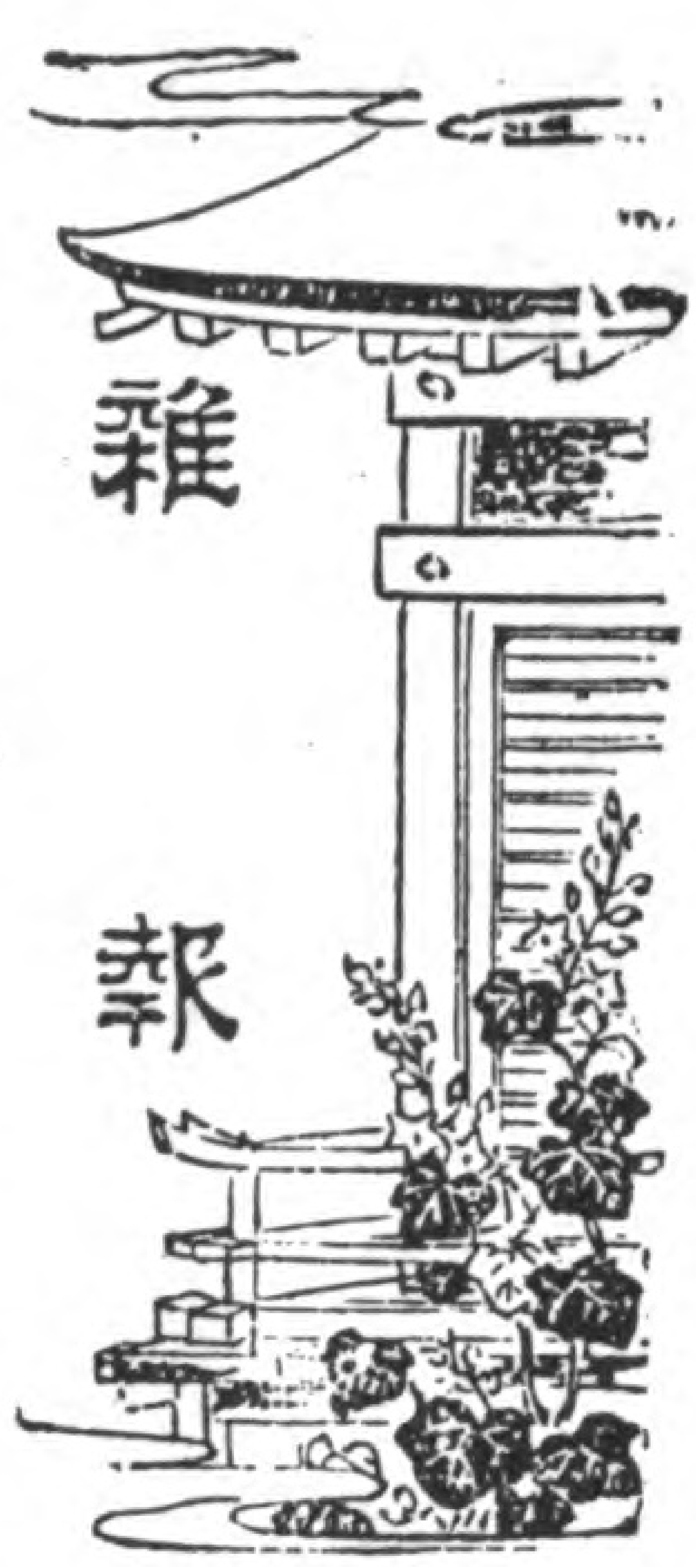
海邊霞　高橋美代子

あさぼらけ海邊の松はほのみえて
　波のうへにもたつかすみかな

二月十日都大路に大雪ふれり獨酒杯取り舉けつゝ歌ひけらく　下田義天類

穴めてたあな面白や　穂綿なす雪に成れりと
高どのゝ窓押はるき　高麗劔我が見しをれど
立續く家の八十くま　吹き弱る風のまにまに
經緯に兎往き角ゆき　或は飛ひあるは躊躇
中空にたちまふ雪の　軒高くのぼると見れど
忽にまたなだれ來て　千萬の蝶かひつるゝ
世に充る花鴨散ると　村肝のこゝろも空に
たゞ獨ゑみゝ笑ひみ　こま劔わが見し居れど

さす竹の都大路は　ころ金の中につゝまれ
打見る軒のこと〳〵と　かき見る屋根の盡
筑紫綿いなたき持て　眞寒さも忘るゝむかり
穴めてた穴れも白や　雪の積れる
手を拍ちて我や謠はむ窓近く
風無き空を雪の舞ひ來る



●紀元節　去し十一日は、皇祖神武天皇日向よりたゝして、數多のゑみしわだどもをにとむけまろへて、大和の橿原の宮にましまして、皇基かためさせ給ひし日なることは、今更まをさんもかしこし。大宮内にては、例のまに〳〵御祭せさせ給ひ、國内は更なり、遠く海表にあるもみな、朝日の御旗なひかして、祝ひことほき奉らぬはなし。實に治れる御代のためし誰かは仰ぎ奉らざらん、天つ日嗣の御榮は天壤のむたきはみもなからましと言あげていはふもかしこくなむ。

●離宮　皇太后の尊のおはしましゝ青山の御所はこたび離宮と定められ、自今青山離宮と稱へらるゝ旨仰せ出されたり。

●小松宮御婚儀　小松若宮依仁親王殿下には、此度香川子爵の御媒妁によりて、從二位侯爵岩倉具定氏の御息女周子の御方と御結婚の儀、本月六日勅許を得給ひて、十日御輿入の御式を終らせ給へり。周子の御方は御齡二十まり三つにおはして夙に女學の御修業相成り、殊に淑德の御方と承る。御式場は、赤坂葵町の御殿にして、御式は和洋を兼

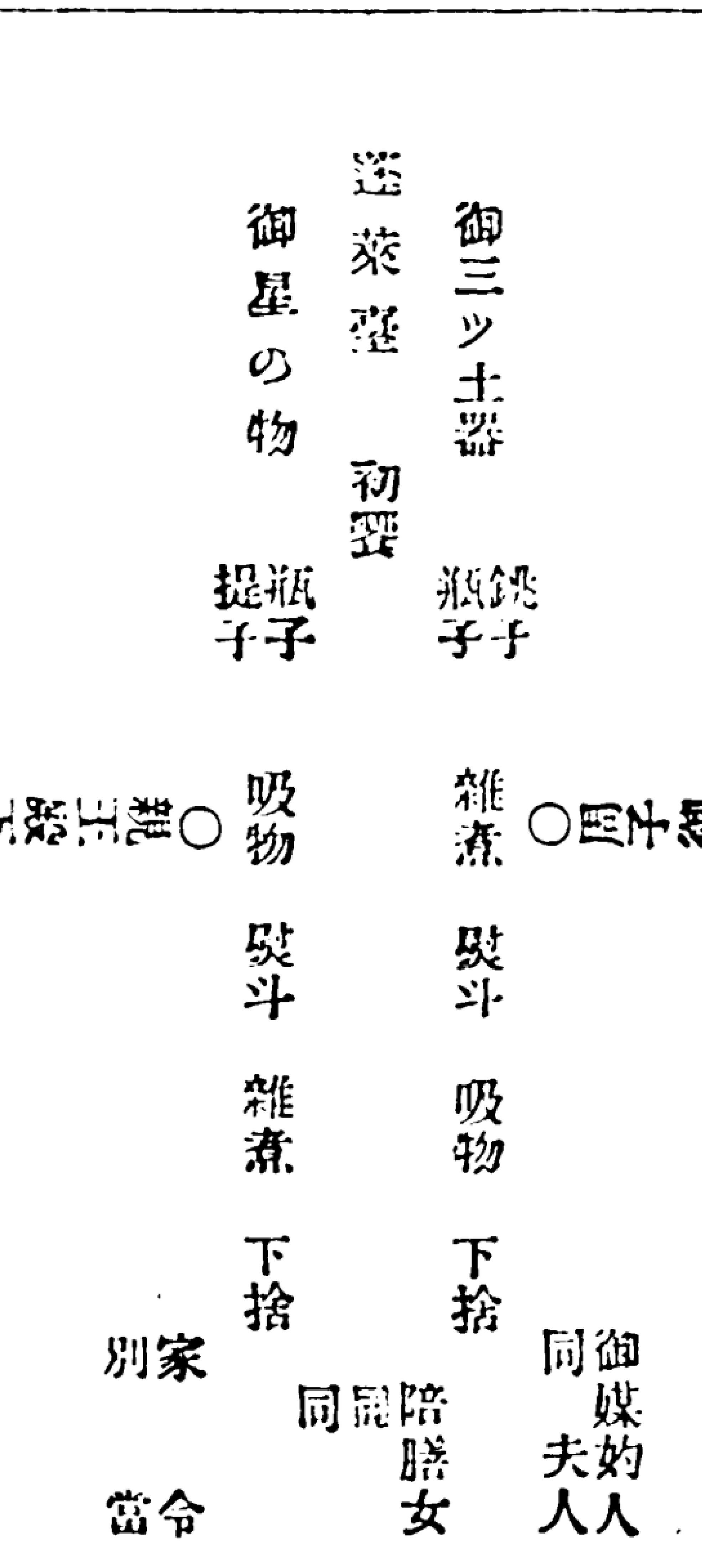
ね給ひ、御服装は洋式を以て、御献色目は本朝古來の式を以てせさせ給へり。先つ、總ての御のり調ひて、此日九時三十分周子の御方御出館あり、十時御婚の式を擧げ給ふ、其御場所は四君子の御間にて、若宮殿下は大禮服、周子の御方は婚禮服にて御着座あり、御媒妁、別當家令等祗候す。

御座定まりて御二方へ御献を供へ、御盃を進む、御献の色目は

御献色目

一　昆布　勝栗　熨斗
一　雜煮
一　吸物
　　蓬萊臺
　　　御星の物
　　　御三ツ土器
　　　　瓶子
　　　　瓶子
　　　　銚子
　　　　提子

等なり、圖をもてその御式場の狀を示せむ、



右畢て御二方御退席あり、暫時御休憩の後御對面席の廣間へ入らせ給ふ。此處には、大宮彰仁親王殿下、並に同御息御賴子殿下禮服御着用にて席の左に、御着座あり、若宮殿下、並に周子殿下は席の右に並ばせ給ひて、大宮御二方と御對座あり、御献色目は雉子を承はる。別當家令祗候して、陪膳女四人下に侍す、御献の御四方御盃ありてこゝに御式畢り、若宮殿下と周子殿下は、岩倉家の令扶へ御對面の御挨拶ありて御盃を賜はる。

正午には御四方へ御禮御膳を進む。岩倉公爵、同夫人、御媒妁香川子爵、同夫人、高崎別當、丹羽家令、上野御用掛御陪席にて、家扶、家從、女中等より御祝を申上ぐ。

かくて午後一時三十分には、宮中より勅使として侍從一人御差遣あり、若宮御二方には　勅使を導きて御着座あり、勅使は御祝賀の御口上を述べ、畢て御目録を進む、若宮は恭しく之を受けさせられ、更に御祝酒を饗し、且つ御引出物を贈らせらる。

午後二時には　皇后陛下の御使參入あり、二時十五分には　皇太子殿下の御使參入あり、畢りて若宮御二方には御装を大禮服に更め給ひ、午後三時御馬車に御同乘、高崎別當隨從にて御參内謁見御禮の上、賢所　御參拜あり。

之にて御婚儀全く終を告ぐ。尙、當日周子の御方並に岩倉家より宮へ參らせられたり御土産品の二三を記せむ、

依仁親王殿下へ御贈品　（周子の御方より）

一御帽　一個
一御禮服　一領
一御剣　一振
一壽留女　一折
一こんぶ　二折
一鮮鯛　一折
一御樽　一荷

（以上御料金）

一銀製御巻莨箱　一對
一同御灰切　一對
一蒔絵御手箱　一箇

同殿下へ御贈品　（岩倉公爵及同夫人より）

一生鯛　一折
一御樽　一荷
一紺緋羅紗御洋服地　一巻

（以上御料金）

彰仁親王殿下へ御贈品　（周子の御方より）

一紫檀御書棚　一箇
一銀朧銀製岸上双鷺置物　一箇

同御息所頼子殿下へ御贈品　（同上）

一銀製花盛器　一對
一御洋服地　一卷

彰仁親王殿下及同御息所へ御贈品（岩倉公爵御夫婦より）
一生絹　一折
一御樽　一荷

尙は各宮家、御親族方へ縮緬其他御料金等の御土產くさ／＼ありたりと。

●歌御會　本年の歌御會兼題は、左の如しと承る。

一月は廿五日、其他は每月五日。

一月　寒汀鷺立
二月　立入宗繼
紀元節　山榊
三月　田春雨
四月　花時鞍馬多
五月　首夏月
六月　人のもとに螢を送るとて
七月　枌垣嫗
八月　賜暇旅行
九月　叢露
十月　きりはれたるあした
天長節　萬民祝
十一月　香水
十二月　樵笛聲幽

さて、一月廿五日の御兼題詠進は、

寒汀鷺立

あさるものありともみえぬ冬河のみきはにけふもさきのたちたる　高崎正風
うなのよるみきはの水も氷るらんおもひありけにたてるさきかな　久我建通
さながらにゑをみるこゝちかれあしのたてる汀にあさるしらさき　鍋島直大
かせさむきみきはにたてるしらさきの色やゆきけの初めなるらん　渡邊千秋
ゆく水のいろなのこしてさきのゐるあさ川きしはゆきはれにけり　本居豊穎
あさほらけなになあさるかゆく水のこほる汀にたてるしらさき　前田利嗣
すみた川みきはのあしもしもかれてさひしく見ゆるさきの一むら　津輕承昭
かれあしに雪のかゝるとおもひしは鷺のむれたつみきはなりけり　松浦詮

わしはかれ水はこほりて冬川のさむき汀にたてるしらさぎ　大谷 光尊

さむさをもしらぬがほなり池水の氷るみぎはにねふるしらさぎ　梅溪 通魯

いけ水のみぎはのあしも冬がれてみるかげさむきさぎのむらたち　竹屋 光昭

ふゆがれのみぎはの風のさむければたつしらさぎも野さみねつゝ　前田 利鬯

ふきすさふ風もさむけき山かげのいけのみぎはにさぎたてるみゆ　水野 忠敬

あさりするせゝの氷のとけかねてさぎもみぎはにはねやまつらん　室町 清子

大ゐがは氷るみぎはにたつさぎのみのけもさむくあさかぜぞふく　梅溪 通治

ふるゆきをおのがみいけにはらひつゝ氷る汀にたてるしらさぎ　梅溪 治光

しもがれの一むらあしをよすがにて氷る汀にさぎぞおりゐる　柳原 愛子

しもふみて池のみぎはにたゝひとりたつしらさぎのさむげなる哉　千種 任子

ほりゐ河こほるみぎはのあさ風をつばさにうけてたてるしらさぎ　小倉 文子

さぎひとりたてるもさびし氷ゐてたゝしもうかばぬいけのみぎはに　税所 敦子

冬がれしみぎはのあしをふく風にみのけみだれてさぎのたつみゆ　小池 道子

たつさぎのかげいけみづにうつらぬは汀の氷あつくなりけむ　生源寺伊佐越

みなぎはにたつしら鷺の脛をほそみこさゝりよりもさむげなる哉　黒川 眞頼

かれふしてあしも氷にとぢられしみぎはさびしくたてるさぎかな　宮地 嚴夫

水こほる野溝のきしにたてるさぎあさりかねてやものおもふらん　坂 正臣

なにはねのみぎはのあしは枯ふして鷺のみのけもさむげかるらん　鈴木 重嶺

しづかなるさぎのあゆみは冬河のうすき氷のうへやふむらん　小出 粲

あしもかれやなぎもかれて川風のさむきみぎはにさぎたてるみゆ　植松 有經

冬がれのあしまの水はこほれるをたてるしらさぎなにあさるらん　大口 鯛二

こほりゐてふれよせられぬみなさねの汀ましろにさぎのむれゐる　鎌田 正夫

ふる池のはすのかれはにゝもゐてさむき汀にあさるしらさぎ　千葉 胤明

おりたてるはぎさへけさは氷るらんみぎはの鷺のかげもうごかず　遠山 英一

霜かれの戸田の川へにかせさねてみのけさむけにたてるしらさき　義清

●毛利元徳公の歌集献上　故從一位毛利元徳公は、維新中興の元勳たること、云ふ迄もなきことなるが、公は殊に國歌を嗜なまれ、生涯の詠歌二萬餘首に上りたりと。此頃介嗣元照公、舊臣杉子爵等の唱道にて、右の二萬首中より秀拔なるものを選み、歌集を作りて長く紀念とせんとし、近藤芳介氏を顧問として五百首を選み、之を芳宜園集と題し、上下二卷としたるが、有栖川威仁親王殿下より、温雅高妙の四字を賜ひ、故大將宮の妃、董子殿下、及び當宮の妃慰子殿下より詠歌を賜はりたるを卷首に揚げ、芳介氏跋文を書きて製本成り、此程　兩陛下、及皇太子殿下を初め、有栖川宮各殿下へも献上に及びたりと。今兩妃殿下の御詠と、公が五百首中の第一と稱するものとを揭ぐ、

門柳春久　有栖川董子殿下

住む人も老せぬかとのいとやなきその春か繰りかへすらむ

夢後雁　有栖川慰子殿下

なき渡る雁の羽音も聞にけり夢さめはてしたまくらの上

從一位　毛利元徳

降雪に人の往來は絕ぬれときみにつかふる道はありけり

●豐公祭の唱歌　豐太閤三百年祭は、來る四月を以て執行せらるべし。其節、京都各小學校生徒は、左の歌を唱ひつゝ打ち連れて豐國廟に參拜すべしといふ。

一

桐や桐。桐や桐。桐のしるしは。尊しや。」一の人。一の人。豐太閤閤は。一の人。」桃山聚樂に。浪花城。榮えし世こそ。しのばるれ。」

二

仰ぐべし。仰ぐべし。高きいさをな。仰ぐべし。」稱ふべし。稱ふべし。かがやくみよな。稱ふべし。」疾風地をまく。山崎の。一擧に。讎敵は。粉となれり。」

三

龍の雲。虎の風。時に乘ずる勢は。」鬼もさけ夜叉もよけ。手にたつものもながりけり。」

千生瓢の數數の。偉績は。世世にかゞやきぬ。」

四

蓬弧の。亂れ世を。治め鎭めて。安國の。」君に奉じ。民を撫し。八洲の外も。波たゝず。」日本男兒の。本領は。豐太閤にぞ。見えにける。」

五

天にひゞく鉦鼓の聲。堂々進みて。行くさきは。韓王逃げて。明主恐れ。八道京城。人見えず。」數年の長諦を。保ちなば。東亞の乾坤。今如何。」

六

露とおき。露ときえ。身こそ浪花の。夢なれど。」天に照り。地にとほる。偉勳は誰か忘るべき。」忘れぬための。神祭り。あまかけりつゝ。見そなはせ。」

●神を敬ひ　國を愛するは、やがて我が國家を保持する所以にして、我日本に生れたらんもの、誰かはこの心なきものあらん。さるなかにも、秋田縣平鹿郡淺舞町伊勢多右衛門といふは、最も熱心なる敬神家なるを以て、此の程、柳原典侍、其他女官方より、和歌、及び菓子などを贈りて之を賞せられたりとなん。

●日本一の櫻の大樹　（三浦千春寄稿）

櫻の花ばかり世にめでたきものはあらじ。さるは、木花開耶姫命を、櫻大刀自神とも申して、かゝるたふとき神の御名にしおはひ給へるは、他木にすぐれて、此花、神代より神もめでたまひけむこと、思ひやるべし。人の世となりては、花の王ともたゝへて、天の下の人のことゞゝ、めではやすまゝに、此木種四方にひろごりて、雲のゐる山のたく、浪よする海のはとりまでも、櫻なき所は、なきまでになむなれりける。そが中に、むかしより、芳野、初瀨、あるは嵐山、小倉の峯などゝ、花の名どころいと多く、そのところに到り見れど、いく千本とも、數かぎりなきさくらの、春霞かすめる空に、咲みちたるは、たとへていはむ言葉もなく、只あはれあなめでたと、打あふがるゝかし。されど、こは木の數のれはきゆゑ

にて、一本二もと、引植て見むには、さむかりはあらじをや。おのれこのごろ、箱根より歸るさ、滊車に、山梨縣なる、山高といふ所の僧と、相のりして、新橋まで來るあひだ、何くれ物語りしけるに、此僧いはく、わがすめるところに、櫻の大樹あり、幹のめぐり八圍ありて、高さは拾七間、横も同じほど、廣ごりさかえて、たゞ一本なれど、咲きの盛は、白雲のおりゐる如く、始めてこゝに來る人は、あはと見て、驚かざるは無し、幾千歳をか經つらむ、神代の種ともいひつとも、たがふまじくおぼゆ、といへり。其は珍らしき櫻にもあるかな、そのある所は、いづこいかなるところ、と問ふに、山梨縣甲斐國北巨摩郡山高村實相寺、日蓮宗といふ寺の地にあなり、世にめづらしき大樹にて、土地の人、山たかざくらと稱へ、わがみかど、八十餘國のうちを巡りたる、行脚の僧など、これを日本一の櫻なりといひぬ。さむかりのものなれど、天ざかる鄙の邊土にありて、うつせみの世にしられぬが、あかず口をしければ、こたび都にのぼり、雲の上に名だかき、うま人の言の葉をこひ、其を石に刻み、此樹の本に、立まほしし、と思ひてなむ、といへり。まことにかゝる櫻の大樹は、昔より見も聞もしたる事なく、此僧のいふが如くならむ、實に天の下に、唯一本の、櫻のつかさとも仰ぐべし。かの三芳野、嵐山など、花の木の數は、限りなく多かるも、皆ひとし並の、木立のみにこそあれ、これはしも、天の下に、群山多かる中に、ぬけ出で、ひとり不二の根の、高くたふときごとく、いく千萬の花の木のなかに、獨すぐれて、双びなき櫻、とぞいふべき。かの僧、つゝみのうちより、其寫眞一ひらをとうでて、あたへければ、これを見るに、い

とい其梢なつかしう思ひやられて、
れもかげにあふぎてぞ見る足引の
　　山たかさくらたかきこずゑを

●菊池文部次官のはなし　菊池文部次官が、此の程京都へ出向しをり、同地の人に語りたる敎育上の談あり、内に女子大學のことにつきて曰く、

大坂の女子大學とかは、あれ丈け立派な贊成者があり、金もある人々多き故、早く出來そうなものなれど、余は斯かる事は嫌なり。女子敎育はそんなにせずとものことと思ふなり。元來が、私立大學といふものは困難なるに、女子大學と來ては尙更困難の事ならん。云々、

●女學生に要する所は、謙遜、温厚、優美、儉素、貞實を專らとせざる可らざるに、近來の女生徒は、徃々にして娼婦の態を學ぶものありとて、栃木縣立高等女學校は、痛く奢侈を戒め、父兄にも注意する所ありたりと。

●看護婦養成の内議　看護婦の患者に必要なるは言ふまでもなき事なるが、就中傳染病の如き病毒感染の虞ある患者に對しては、一日も缺くべからざるより、近年各地に看護婦養成の擧續々起り來るも、尚充分なるのみならず、種々の弊害も尠からざるにより、内務省衛生局にては、此際各府縣に通告し、各府縣知事をして、看護婦養成に關する準則を指示せしめ、各郡をして、其準則により養成方法を設定せしめ、一切の經費は、郡費、若くは町内費の抱負と爲し、而して管内町村は、義務的に一名以上の看護婦講習生を出さしむる事と爲さんとの内議ありて、目下松本臨時檢疫局事務官專ら之が調査に從事し居る由にて、同事務官は、滋賀縣下に於ける看護婦養成の方法は、先づ完全したるものなるにより、各地にても同縣の方法に倣はんことを望むと云へり。因みに記す、滋賀縣にては、明治廿八年來郡費、若

くは町村費を以て看護婦講習所を起し、卒業生は必らす義務として看護婦に從事せしむる事となしたるものにて、看護婦の養成は實に病毒の豫防消毒に著しき好績を與へたりと云ふ。

●明らけく　治まる御代の御德は、普ねく國内にゆきわたりて至らぬくまもなし。さきには、遠き北のはてなる石狩の國の童が佐渡の國の童をめぐみしを聞きしが、こも仝じ北海道なる札幌創成高等小學校の生徒にて、中村藤太郎といふもの、ことし十二歳になれるが、家もと貧しくして、食ふものも容易く三度は調ひ難き程なるも、藤太郎かなしき事に思ひて、幼きながらも朝夕薪水の勞をとり、母を助けて共に家業にいそしみ、尙學業も廢せざるが、學術、品行、共に他生に擢でゝ、常に級長の席を占むと。輦轂の下親しく皇恩に浴し、足らはぬことなく父母に學資を仰ぎて、さて安らかに學ぶ學生諸子よ。省みて愧づる所なきか。

●錦を衣て故郷にかへる　美談あり。備前國兒島郡大島村の漁夫某の子二太郎は、今より三十二年前、二十歳の春、思ふ處ありて、奮然郷里を去りて馬關に赴きしが、其後、二太郎は、孜々黽勉志を伸べて、遂に屈指の富豪となり、今は同市の市會議員となれり。此の程故郷に歸りて、友人知己を饗し、貧民を賑はし、同村の小學校に二百圓を寄附せりと。世に立たんほどのものは、男にもあれ、女にもあれ、身の程々務の向々につけて各々かゝる心がけありたきことなり。

●孝子の紀念碑　元文年間の孝子福岡縣豊前國企救郡西谷村吉兵衛なるものゝ紀念碑を、こたび同地に建設の計畫あるよしにて、倉豊陽兩銀行西谷村役

塲之か寄附金を取り扱ふといふ。

●孝婦　徳島縣美馬郡西祖谷山村の近藤くまといふは、貧困の中に能く舅姑の中風病に罹れるを深切に看護して孝養怠りなく、夫に仕へてまた誠實なるを以て、同縣知事より金二圓を賜ふて之を賞せらる。

●貞婦　茨木縣東茨木郡伊勢畑村某の妻いしといふは、もと富家に生れしものなるが、嫁きて后二年にして夫癲病にかゝりしため、つひに家産を悉くうりつくして醫藥にかへ、今は着るもの食ふものさへ乏しきまでになれるも、いし女少しも屈する色なく、他家に雇はれ賃仕事などして專ら夫に不自由を感せしめず、ひたすらに病の平癒を祈りて、こゝに八年の間、貞節一日の如しといふ。

●仝じく　宮城縣柳田已代治の妻とらは、とつぎてより廿一年になれるが、其間姑の癈疾にかゝれるに仕へてかつてさからはず、夫放蕩にして家業を理めざるを諫め、貧苦の間にも幼兒の撫育に心を盡して、孝貞ならびなく、まことに婦女の龜鑑なりとて、同縣より金五圓を下賜せられたり。

●子孫百二十七人　秋田縣平鹿郡八澤木村瀧之澤菊地久左衛門の母みつは、今年八十歳の高齢に達せるが、これまで六男五女を生み内男二人死亡して殘るは九名なり。一月の調べによるに其子孫百二十七人の多きに及べり。即ち、長男の子男一人女八人孫七人、次男の子男四人女一人孫八人、三男の子男六人女二人孫六人、四男の子男二人女三人孫八人、五男の子男一人孫五人、長女の子男三人女三人孫六人、次女の子男五人女五人孫十人、三女の子男三人女二人六男の子男六人女二人、四女の子男二人女四人、五女の子男四人女一人なりと。

●屋根の上に筍を生じたる奇瑞あり。三年前に建てたる納屋の屋根下に用ゐし竹の芽をふき、藁屋根を貫きて屋上一本の筍を生じたれど、驚いて切り拂ひたるに、又根本より筍を生じて、遂に立派の青竹となりて生茂れり。こは、奥州、沼田郡長來村吉村カズと云ふ貞婦の家なりと。

●琉球新報　いふ、氣になるものは男子のちよん髷、簪、女子の入墨、止して貰ひたきものは晝夜晴雨に拘はらぬ傘、所擇はざる立小便、最もらしく見ゆるものは車夫の落指、葬式の泣女、一定せぬものは男女の衣服襟合せの左右、うるさく思ふものは年中つる蚊帳と。また同地風俗の一端を知るべきか。

◎こゝろの華　（東京赤坂青山北町　こゝろの華發行所）　定價十錢

第一號は本月十一日紀元節の佳辰を以て世に出でたり。こはわが御國風のすたれんをうれたみて和歌國文の發達をはかり、神代ながらの心をうしなはせじとするを主旨とす。論説、講演、文學史料、文花、漫錄、詞海、雜錄、學園等の數項に分ちて、各學者を益すること尠からず。いとよきものなり。かゝる文のいよ／＼榮えいよ／＼數多くなりなむこそねがはしけれ。

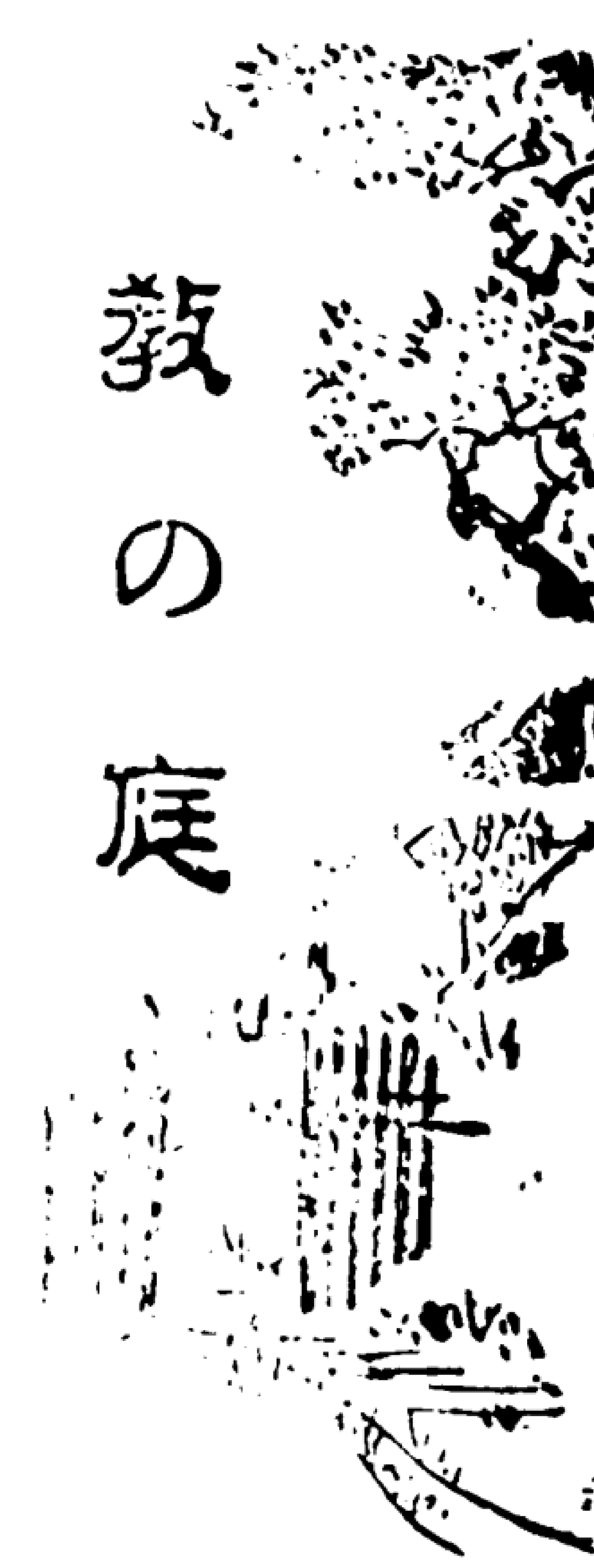
さき出しこゝろの華はいひもねず
　なつけもあへぬ花にぞありける

この花よ。やがてよき實を結びてよ。

◎女鑑月並兼題

三月五日	歌……雛祭	文……深山櫻	二月廿五日〆切
三月廿日	歌……蛙	文……海人	三月十日〆切
四月五日	歌……机	文……古戰場	三月廿五日〆切
四月廿日	歌……蝶戲花	文……試驗及第を祝す	四月十日〆切

歌文原稿〆切期日迄に本社に到着せざるものは、すべて沒書とす。



教の庭

二月二十日兼題　若草

天　千葉縣安房郡富浦村原岡　佐久間　八重子

昨日今日雪のきえゆくあとみれば
のべのわか草もえそめにけり

地　秋田縣湯澤町　湊谷　いく子

とくれそくもゆるはわれと珍しき
色はかはらぬ野べのわかくさ

人　奈良縣奈良町大字北室　春永　喜志子

消えのこる雪の下よりいろはえて
春知りかほにもゆるわかくさ

人　東京市赤坂區一ツ木町八十一番地　河田　いし子

薄くこくれのがさまざま色みえて
ふるはにましるのべのわかくさ

秀逸　（二十首）

來む秋は千ぐさの色ににほふらむ
ひとつみどりにもゆるわか草　西川　順子

飛火野の野もりがかどのわか草は
春の日かげにもえまさりけり　佐々小琴子

山かづの垣ねのみゆき消えそめて
いろあたらしき庭のわかくさ　竹山　道子

朝かぜはなほ寒けれどはるなれや
はやもえそむるにはの若くさ　長島　諒子

日かげよき庭のをちこち雪消えて
やゝ色めきぬはるのわかくさ　阿保　松子

風はまたみにしみながら春といへど
時を得がほにもゆるわかくさ　清水すみ子

風寒みまだのびたゝぬわかくさも
さすがに春のいろは見えけり　高島　梅子

ふませじと乘くる駒のひづめにも
こゝろかかるゝのべのわか草　庄司まつ子

白雪のきゆるまにまにもえいでゝ
むらむらあをし野べの若くさ　宍水　若子

春あさみまだ雪ふかきかすがのに　田中ゑん子
うらめづらしくもゆる若くさ

白雪のきゆるまに〳〵もえ出でゝ　松本その子
やゝいろめきぬ野べのわか草

青柳のみどりはいまだけぶらねど　太田すみ子
かげ踏む路にもゆるわかくさ

もえ出づるあさぢが原のわか草に　酒井ぎん子
まさふかゝらぬはるを志る哉

春あさみまだ消えあへぬ雪まより　山根久子
もえそめにけり野邊のわか草

消え殘るゆきま〳〵にもえ出でゝ　吾妻近子
あはれにみゆる野邊のわか草

いとゆふのもゆる春日の遲れじと　石原庫子
きほひがほなる野邊のわか草

春さめのふるのもいつかわか草の　屋際高繁子
いろあたらしくなりにける哉

昨日今日春のひかりにもえいでゝ　金原吉子
雪間に見ゆる野邊のわかくさ

おしなべてけさは綠になりにけり　岸田はつ子
ゆきまにみえし春のわかくさ

ゆく駒のあしなみにぶしわか草の　河村君子
みどりの色にもえそめりよし

（以下原稿到着順）

石さへもおきなほるへくわかくさの　田部里子
もえいでにけりはるのゝべに

萠え初はここにいつくしうすみどり　堀内敏子
踏まゝくおもふにはのわかくさ

いつじかもふる葉かくれてわか草の　永井きい子
みどりさかりさ野はなりにけん

野はまたきえもはてぬに野邊ははや　池田なほ子
うすみどりなるはるのわかくさ

ふるさしもわかぬはかりの春さめに　長松かね子
いろまさりけりにはのわかくさ

みやこ人はやきてみませはるの野は　佐々有鄰子
つまわかくさそもえいてにける

おくしものさくろもまたて少め子が　奈賀井滿梨子
いけのほとりにわかなつむなり

こにいれて里のうなゐはかへるなり　金森俊子
野へのわかくさもえいてぬらし

しらゆきはところ〳〵にのこればや　楢精子
むら〳〵あをむのへのわかくさ

わがかへりはるはみどりの色ましぬ　島田好子
なのみ老曽のもりのしたくさ

わかくさのもゆとはすれど春な浅み
　ひばりのとこもかくれさりけり　野田ちよ子

はるさめのふるき垣根にもえいつる
　くさのみとりのなつかしきかな　西村芳子

朝日さすかきねのもとのわかくさは
　みるまに伸ぶるこゝちこそすれ　秋園菊子

うなゐ子があつまる岡にきて見れば
　はやもえそむるわかくさもあり　松原常子

田の面ふく風もぬるみてふるいけの
　なきさにあをむはるのわかくさ　大島愛子

こゝろまてしめるなきさのはる雨に
　いよ〱もゆるにはのわかくさ　町田鶴子

去年の雪消えそめにきさたもふまに
　みるからあをむにはのわかくさ　濱口信子

はるさめのめぐみの露にひたされて
　にはのわかくさもえそめにけり　神田樂子

はるの野にもえいてそむる若くさは
　みとりもいまたふかゝらぬかな　西村登羅子

昨日今日ふりつゞきたるはるさめに
　もえわたりけりのへのわかくさ　木村衆子

里の子がつはなぬくべくなりにけり
　のへのわかくさあをみわたりて　近藤秀子

わきも子がころもはるさめふる庭に
　にはのわかくさもえそめにけり　青木しげ子

むらぎえのゆきま〱に萌え出てゝ
　やゝいろめきぬのへのわかくさ　高橋信子

あしひきの遠のみやまにゆきみえて
　いろまだあさきのへのわかくさ　秋園露子

かりがねのしなれて歸るはるさめに
　みとりいろそふのへのわかくさ　白井糸子

おともなき宵のはるさめそめつらん
　みとりになりぬにはのわかくさ　細井球子

風もなくしつけくふれるはるさめに
　みとりまされるにはのわかくさ　濱口奈保子

もえいつる野邊のわかくさ昨日今日
　ふるはるさめにいろそまされる　成田廷子

ふるとたに思はぬよひのはるさめに
　あをみそめたるにはのわかくさ　水島貞子

あめはるゝ小野の若くさもえそめて
　ふみこゝちよくなりにけるかな　芝田源子

雪きゆるかたよりもゆるわかくさに
　はるいろみゆるなかこしのみち　吉川貞子

うくひすの聲きゝそめしあしたより
　にはのわかくさいろそみにける　町田敏子

さゝかはに結ひしこほりうちとけて
　ふたばにもゆるきしのわかくさ　吉川くに子

あまのたくもしほの烟たゝぬ日も
　もえまさるなりいそのわかくさ　小川金子

我か門のをかはのみつはこほれとも
　はやも萠ゐゆくきしのわかくさ　小川富子

はるさめの一日ふた日さふるなへに
　みとりいろそふのべのわかくさ　神田久子

わきも子か桓根やいつこさとつゝき
　おなじみとりにもゆるわかくさ　深田俊子

はるさめのふる井の底にかけみゐて
　もゐそめにけりのへのわかくさ　岡田奈美子

わかくさの色はみとりになりにけり
　みよのめくみのつゆにぬれつゝ　長島謙子

わか草のあなたこなたにもゐいてゝ
　はるめくのへのひかりのどけき　長島絶子

枯れ果てし草ものさかにはるの日は
　もゐてみとりのいろもこきかな　根岸英子

ふきわたる風もぬるみてやまかはの
　きし邊にもゆるはるのわかくさ　大森純子

はるさめのめくみの露にうるほひて
　むら〳〵もゆるはるのわかくさ　長島綾子

わかくさのもゐ出てしより老の身も
　わかかへりたるこゝちこそすれ　佐山幾子

ゆきこゐて幾日もやらぬさふ火野に
　はるのわかくさもゐ出てにけり　佐山靜子

野へ見れはむら〳〵あをくなりに鬼
　こそのわかなやもゐいでぬらん　山手てい子

しらゆきはきゐもはてぬに淺みとり
　やゝ見ゐそむるにはのわかくさ　高島壽子

はるさめのはれにしあさを眺むれば
　やゝあをみゆく野邊のわかくさ　尼子千代子

ちとせへん松の水かけにもゐいでゝ
　みとりいろますはるのわかくさ　磯部しう子

うら〳〵と霞むさがのに來て見れば
　ちよのわかくさもゐいでにけり　浦井清子

風さむきゆきのにもゆるわかなこそ
　うれしきみよのめぐみなるらめ　浦井澄子

少めこがうだふもたのしはるののに
　ちよのわかくさつみはやしつゝ　浦井豊子

しら雪はいつしかきゐてわかくさの
　もゆるはるへとはやなりにけり　名取正代子

消ゐかてにのこる日かけの雪間より
　はるのいろにももゆるわかくさ　名取よし子

はるさめの色こそ見ゆれきのふけふ
　みとりになりぬ野邊のわかくさ　坂田きみ子

我がやどのかきねの草のあさみどり
　あさくもはるのいろは見ゐけり　畠山百合子

昨日見し野べのかすみのうすころも
　わかくさすりになりにけるかな　畠山千代子

あわ雪のふる葉まじりにおひ出つる
　くさのはつかにはるは見ゐけり　畠山清子

はるさめのふりにし日より春日野は　なべてみどりとなりにけるかな　高橋照子

春来ればかみにたむくるしるしとや　かたみにつめるはつわかなかな　大谷友子

冬がれのふる葉はゆきにくちはてゝ　はる日にもゆる野べのわかくさ　徳永萬壽子

むらむらと雪まにみえてわかくさの　ひとつみどりにもえそめにけり　野路ちか子

里の子はつゝむにあまるたのしさを　つみそへぬらん野べのわかくさ　澤田春子

雪はまた消えやられどもわかくさは　はるのしるへともえいでにけり　遠藤らく子

みつは草もえてふた葉そ出てにける　はるふかゝらぬしつかかきれに　田代鶴子

長閑なるはるのひかりにもえいでゝ　みどりふかむる野べのわかくさ　田代綾子

はるさめのめぐみにあひてわか草は　ゆき間をわけてもえ出てにけり　三井しん子

いつしかもけしきは春になりにけり　わかくさもゆる野べのみわたし　石田藤子

もえそめてまだふかゝらぬわか草の　いろにはるめくむさしのゝはら　糸川はつ子

消えのこる野への雪間にもえいでゝ　みどりみせたるはるのわかくさ　清水益子

春さればつのぐみそめていさはやも　野べのわかくさいろめきにけり　仁保益子

をちこちの野べのわか草はるあさみ　うすみどりにももえいでにけり　佐々値嘉子

武蔵野ははやもあをみてみゆるなり　はるのわかくさもえいでぬらん　豐川滿子

のどかなる朝日のかげにもえいでゝ　かすみそめたる小野のわかくさ　諸井貞子

もえいづる野邊のわか草はるさめに　みどりのいろもそはりぬるかな　武藤いれ子

ゆきもまだきえはてぬのにしのふ岡　はやもえいづるはるのわかくさ　武藤しげ子

もえいでし色なほうすきわかくさは　またはるあさきしるしなるらん　成瀬あさ子

かすみたつ野の邊を見れば若くさは　のこるゆき間にももえいでにけり　高橋かれ子

わかくさの根にこそ春をしめつらめ　またかぜさむきもりのしたかげ　田中みつ子

きのふけふ槿垣のゆきはきえそめて　したよりもゆるはるのわかくさ　西村章子

わか草のあをみそめたる春の日は　かへすもをしきこゝちこそすれ　白石椿子

雪消ゆるしつかかき根のわかくさを　今朝めつらしくながめけるかな　鈴木この子

うくひすの聲をしるへにきてみれは
　野へのわかくさもえ初めにけり　谷口さた子

はるさめのふりにし野へを見渡せは
　みとりのくさももえ出てにけり　高橋ちん子

あさつく日かけさすかたの雪間より
　やゝあをみゆくにはのわかくさ　谷口ふさ子

うくひすの初音につきてうれしきは
　ゆきけにみゆるのべのわかくさ　濱野さき子

見渡せはいつこの野邊もはるめきて
　わかくさしけくもえいてにけり　野澤をのえ子

わかそのの草のみどりにむさしのゝ
　はろのけしきもしられけるかな　志岐久子

朝しもゝおかすなりけんきのふけふ
　いろめきそめぬ野へのわかくさ　西睦子

見わたせはまだきはやらぬ霞間より
　はろを見せたろのへのわかくさ　高島竹子

昨日けふわかくさもえてのにはらに
　いななくこまのいさましきかな　渡邊まさ子

おほ空ののどかにかすむはるののに
　ふみところなくもゆるわかくさ　田中たか子

はる駒のこゑいさましくなくかたは
　もえいてぬらし野へのわかくさ　羽田三諸子

のどかなる春のひかりにかた岡の
　うらわかくさやもえわかるらん　山田琮子

住みわびし賤かかきれもきのふより
　小くさつみにとひとそさひけろ　星野栄香子

思ふさちそこさも知らすわけいりて
　おもはぬたにの小くさつみけり　星野千春子

もえそめてまた日も淺きよめなくさ
　みとりふかくもなりにけるかな　堀西愛子

ゆき消えてのとけき春のわかくさは
　御代のめくみもふかくさのさと　竹村竹呈子

わか駒のあさりあさりてあらしけむ
　あとになくさはまたもえにけり　須磨純子

たちいてゝ遊ひくらさんしされには
　よきほとなれや野邊のわかくさ　久間春子

おいぬれは駒もすさめぬわかくさの
　わかきははろのはつかなりけり　小川愛子

若くさのしげろを見ればいまはしも
　はろのやよひのはじめなろらん　椎名操子

のへみれはのころ雪まを分けいてて
　もゆる小くさのなつかしきかな　中山とみ子

朝日さすかけもさすかにのとかにて
　うすみとりなる野邊のわかくさ　雨谷つぎ子

若くさのひと雨こゝに萌え出てて
　みとりいろますはるの野へかな　松原文子

このころは人のこゝろもはるかせに
　ほの〳〵なびく野邊のわかくさ　松原不二尾子

春されはあなのかはらのわかくさは
　たかしとれとやもえいてにけん　小松好子

まかねたれ垣根に生ふるわかくさに
　しけきめぐみの御代そしらるゝ　綿野りき子

あわゆきもまたむらきえの春のゝは
　わかくさはかりみとりなりけり　玉置品子

のとかなる朝日にゆきはきえはてゝ
　みとりにもゆるのへのわかくさ　玉置陽子

豊かなるしるしのゆきもきえなくに
　かきれのくさはもえいてにけり　岡澤千鶴子

あわ雪のしたにもはるのいろ見えて
　ばつかにもゆるのへのわかくさ　城田もん子

わかなつむ少女がたもとおもけなり
　くさのかすゝとりましへけむ　舟岡さなへ子

秋はまたいろさま〳〵のわかそのも
　ひとつみとりにもえ出てにける　中澤千野子

はるさめのふるたひことにわか宿の
　にはのわかくさおひまさりけり　志岐榮子

もえ出てゝかきりなき世にたち返る
　春をみするはわかななりけり　原田たみ子

かすむともふるともつかぬ春さめに
　いろまさりゆくのへのわかくさ　池田さも子

ゆきはまた桓根かくれにのこれとも
　かたへにもゆるはるのわかくさ　福原菫子

きえのこる雪まにもゆるわかくさは
　またふかゝらぬはるの色かな　眞島千鶴子

わか庭の去年のふる根におひいてゝ
　はるさめことにあをむわかくさ　仁保しま子

のどけさに宿を立ちいてながむれは
　野邊のわかくさもえいでにけり　小高ふく子

雪のうちにもゆるもゆかしいまつまん
　はるしりそむる野邊のわかくさ　水村きく子

もえそめし野邊の小草のみとりさへ
　またふかゝらぬはるのいろかな　野口さん子

春日野につもるしらゆきしらぬけに
　したよりもゆるはるのわかくさ　末次たみ子

はるさめにもえ出る野への淺みとり
　こそのかれはやれにかへりけん　寺田まさ子

あつさ弓はるたつ野へにもえいつる
　うらわかくさのいろそゆかしき　堤彬子

のとかなる春の日かけにさそはれて
　のへのわかくさ生ひそめにけり　中井松枝子

君か代のめくみのつゆにはる見えて
　野邊のわかくさもえそめにけり　錦織さち子

雪は未た消えもはてぬにいろ見えて
　うすみとりなるのへのわかくさ　若松みさを子

いつれをかつみてかへらん春の野に
　やゝもえそめしくさのさま〳〵　山科凉子

昨日まてゆきふみし野はいつのまに
くさのみさりになりはてぬらん　能登くめ子

はるたちて枯野のゆきも消えはてし
なかにのこれる千々のわかくさ　所佐以子

かすか野はいつしか雪もむらきえて
なか邊の小くさあをみそめけり　小田中しづか子

むさしのは春くるやかてわかくさの
目につくはかりもえいてにけり　諏訪晴子

ほのあをくみゆるもうれし若くさは
ひさあめごさにいろのまさりて　田中ひろ子

消えあへぬ雪のひまよりもえいてゝ
み代をことほく野へのわかくさ　岡本好子

けふやかばいかなる妻やこもるらん
かすがののべのあはれわかくさ　香澄梅代子

かすか野をあすやさひみんわか庭の
かきのをくさも萌えそめにけり　日吉あさ子

み渡せはよもはかすみてあさみさり
もえいでにけりのへのわかくさ　細川ますゑ子

雪消えのいもかきれにもえいつる
いろなつかしきにはのわかくさ　柴田艶子

しら雪の消ゆるまに〳〵野べ見れは
むら〳〵あをしなきのやけはら　勝尾さし子

はるさめのふりそめしよりわか草は
ひさひ〳〵にもえまさりけり　勝尾まさ子

少女子かつみしうはきははやつきて
野へのわかくさあをみわたれり　勝尾さみ子

きえのこるこその雪間をたつきにて
もえそめにけり野へのわかくさ　武田榮子

かつきゐしこその古葉をさりみれは
はやもえにけりにはのわかくさ　岡田陽子

ぬるみゆく水のけぶりのすゑなれや
まつもえそむるはるのわかくさ　宮原ゑく子

風さむみまだくきたゝぬ草にあれど
つみてを行かんのべのゆくてに　宮原良代子

新くさのはつかにもゆるあさちはら
またうらわかきはるのいろかな　横山りう子

春さめにひさ日〳〵さもえそめぬ
いさやつみてん野ちのわかくさ　林環子

野邊みれは色なつかしきわかくさの
ゆきまをわけてめくみそめけり　橋本たつよ子

もえそむるわか草見れははるあきの
はなのいろみなみさりなりけり　下元もさ子

いつのまにふくはる風になひくまて
おひたちにけん野邊のわかくさ　由井濱子

秋はまたなにやおふらんふかくさの
のへの小くさのゆきのしたもえ　由井澄子

春日さすひかりにゆきのきえはてゝ
わかくさあをく野はなりにけり　重松たか子

しら雪はきのふきゐしな野邊見れは
なへてみさりになれるわかくさ
森 こと子

きのふまて雪にかくれしかすかのの
のへのわかくさもゐいてにけり
近藤よし子

はきすゝき秋はちくさにさくはなも
おなしみさりのはるのわかくさ
宇高まつ子

こくうすく早わかくさのもゐそめて
みさりあらそふはるの野邊かな
二宮春枝子

淺みさりいろもゆかしくゆきまより
もゐそめにけりのへのわかくさ
仲田しけ子

冬かれし野へいつのまにいろはゐて
手につむまてにみゆるわかくさ
濱田なほ子

うら〳〵と霞そめたるかすかのゝ
ゆきまをわけてもゆるわかくさ
仲田榮子

雪きゐのかきれのもとのわかくさに
野邊のすかたそたもひやらるゝ
諸井久良子

雪とのみめなれし野邊もはるさめに
したもゐ初むるくさのいろかな
池谷富子

春はまたあさきなからにわかくさの
みとりにかへる野邊のいろかな
戸塚てつ子

天津日にゆきさへきゐてあさみとり
むら〳〵みゆる野邊のわかくさ
柳田里子

長閑なるはるひのあたる野邊みれは
はやわかくさのもゐ出てにけり
木村みつ子

冬かれののもはるめきてわかくさは
はやつむへくも成にけるかなか
綰脇ますこ

かけろふのもゆる大野にきて見れは
またおひのひぬはるのわかくさ
佐々さし子

冬枯れのしはふのおももはるたちて
むら〳〵見ゆるわかくさのいろ
井原銓子

はるさめのふりそめしより淺みとり
いろまさりゆく野邊のわかくさ
高松貞子

きゐのころ雪間にもゆるわかくさは
みかさのはらにけむりたつらん
高橋たか子

雪はまたきゐもはてぬに作さいへは
そこゝもゆるそののわかくさ
青木たま子

大かたのはるのけしきもしられけり
かきれにもゆるくさのわかはに
高橋梅子

めかれせしのへのけしきも降る雨の
めくみにもゆるはるのわかくさ
林 久子

雨にちるうめはつけれと日にそひて
のへはみとりにもゆるわかくさ
林 みつ子

春の色をほにあらはしてめもはるに
もゆるは野邊のわかななりけり
青柳かめ子

少女子かかすが野に出てつみいつる
そての下にももゆるわかくさ
山河倹子

はるさめのふるのなかみち下もゐて
いろなつかしきのへのわかくさ
山河常盤子

賤が家のあさきよめせぬには見れは
かきれつゝきに萠ゆるわかくさ　岡田支子

春されはしつかかきれもゆき消えて
うらわかくさそもえいてにけり　菅　秀子

のさかにてきゆる雪間にもえいてゝ
おひさき見ゆるのへのわかくさ　河村嶋子

春の日のひかりをうけてわかくさは
なへてみさりのいろまさりゆく　武田なか子

春さめのすさひなるらんふるこさに
いろまさりゆく野へのわかくさ　竹村貞子

もえ初めてまたはつかなるわか草に
はるのみさりのいろそみえける　今村穎子

はるさめのふりにし後にこゝかしこ
もえいてにけりにはのわかくさ　磯野こさ子

朝日かけさすかにゆきのむらきえて
はるないろさる野へのわかくさ　遂戸の露子

あつさ弓はるさしなれはしもかれし
野邊の小くさもみさりしてけり　飯塚みづほ子

きえ殘るゆきのまに〳〵もえ出てゝ
むら〳〵あをし野邊のわかくさ　岡澤のぶ子

きのふけふ野邊のわか草もえ出てゝ
見わたすかきりけふりぬるかな　岡澤倫子

はるさめに垣れのもさのゆき消えて
みさりいろ添ふにはのわかくさ　大條和久利子

わかにはも春やさひけむそこはかさ
かれはかくれにもゆるわかくさ　渡部千世子

見渡せはそらもひさつにあをみつゝ
ひろののはらにもゆるわかくさ　飯塚むつ子

ふるあめにのへのわか草もえぬらん
かきれのしたもはるめきにけり　小島岩子

うれしさも袖にあまりて見ゆるかな
わかくさつめる野へのをさめこ　宇野勳子

田鶴か音をのさかにきゝてわか草の
もゆるかた野にあそふうれしさ　宇野典子

きえのころ窓のまに〳〵あをみさり
もえいてにけりのへのわかくさ　尾澤知世子

若こまの來てあそふまてもえにけり
しかにふまれしのへのちくさも　日高かず子

むらきえの隙まを分けてわかくさの
もゆるさはへにはるをこそしれ　迫水信子

春もまたかのこまたらにたちぬらん
ゆき間ゆき間にもゆるわかくさ　笹子茂子

名のつかぬうちそめてたき春のくさ
いろなつかしくもえいてにけり　笹子みつる子

きのふけふ春めきにけりわかくさも
あをみそめたる野邊のかよひ路　田邊照子

もえいつる野のわか草に世のひさの
うれしきいろも見えにけるかな　藤島英子

ふりつもる雪はきえれどわかくさは　はるのひかりにもえそめにけり　藤島　ふしえ子

朝ひかげさすやをかへにあわゆきの　きゆるかたより燃ゆるわかくさ　若松　操子

朝ひさすかたのをみれはしらゆきの　きゆるまに〱もゆるわかくさ　鈴木　かね子

もえ出つるのへのちくさに冬かれの　ふる葉ましろもあはれなりけり　菊園　千代子

長閑にも降るはるさめにもえ出てゝ　みどりいろそふのへのわかくさ　工藤　仁子

つどひきて老もわかきもめつるかな　もえいてそめし野へのわかくさ　吉田　三千代子

はるさめのふりそめてより若くさは　ひさひ〱にいろまさりゆく　長島　英子

しらゆきのふる野のくさも君か代の　はるのひかりにもえいてにけり　畠山　香代子

消えやらぬ雪まを分けてわかくさの　いろなつかしくもえ初めにけり　無名

萠出てゝまた日やあさきかれのこる　ふる葉にましろのへのわかくさ　嶋　いさむ子

春さめも今日はれてけりおもふどち　むれてを摘まん野邊のわかくさ　佐藤　きよ子

春日のやもえまさるらんわかくさの　みどりのいろにみゆるこのころ　北村　さえ子

ふくかせはまたさむけれど春なれや　のへはみどりにもゆるわかくさ　小森　さた子

ふる雨にこもるこゝろもわかくさの　みどりのいろにうごきそめけり　芳野　香子

あわゆきのまたらにきえしあひた日　二葉なからにもゆるわかくさ　楠　花雄子

梅のはなさきそめにけるその日より　おさらしさてやもゆるわかくさ　横田　くめ子

わかくさのもゆるまに〱雪きえて　野邊にそはるの色はみえける　川田　孝子

きのふけふふるさしもきはるさめに　いろまさりたるにはのわかくさ　岡田　さめ子

わかくさのゆきまにもゆる色みれは　こゝろははるの野にそおかるゝ　菱田　總子

あたゝかき春のひかりにゆききえて　にはのわかくさもえいてにけり　服部　かつみ子

はるさめのふりたる後に見わたせは　みどりいやます野へのわかくさ　生稲　つれ子

雨はれしあしたに見れはむら〱さ　もえそめにけり野へのわかくさ　酒井　美佐子

しかすかにあはれさや見ん賤の男も　ふまてきえゆくみちのわかくさ　榊原　八千代子

冬かれにのすゑさむけにきえのこる　ゆきのしたよりもゆるわかくさ　榊原　みきを子

霜かれのあはれわすれてまたさらに
　こゝろはそみぬ野へのわかくさ　師岡千代子

やかてまた千種のにしきおりいてん
　したそめならし野へのみとりに　富士野安香子

いつしかとつのくみそめぬ天つちの
　はしめおほゆるいけのかれあし　無名

おほきみのめくみの露にうるほひて
　みとりもふかき野へのわかくさ　吉村さき子

はる雨はいろなきものを野遊はみな
　ひとつみとりにもゆるわかくさ　荻尾八重子

うくひすの鳴きにし日よりむら消の
　ゆき間の小くさもえ出てにけり　大熊つれ子

春はまたあさみとりなるわかくさの
　いろなつかしくもえそめにけり　大久保みち子

雪はまた鹿の子またらにのこれるを
　いまはともゆる野遊のわかくさ　松浦させ子

春日野にふりしあわゆき消えやらて
　しろたへなからもゆるわかくさ　村越れん子

ゆく末のことなきふしもあらはれて
　ゆき間にもゆるのへのわかくさ　駒井一女

きのふ今日はるめき渡るのとけさに
　みとりもえたつにはのわかくさ　大河内長月子

あつさゆみ春たちぬれはいまはとて
　こゝにかしこにもゆるわかくさ　辻みゑ子

二月二十日兼題　盆梅

天　越前國敦賀港佐久間有隣方　小川愛子

散りはてし後は、植木棚のかた隅に、移されなから、恨むけしきもなく、吾を無情の友ともうとまぬ有情の友よ。花に情なしとは、誰かいひけん。中々に人こそ、こゝろなきものなれ。今年も、早うより、机のほとりに、据ゑられて、朝な夕な、ゑみこほれたるおもてを、吾に見せ、えもいはれぬ薫を、惜む心もなく、窓の内に、籠らせたるさへあるに、風の便に、たくへては、鶯さへ誘ひ出して、いきたなき、朝いの夢を、よひさまさせ、たゝ一すくひの、水のなさけを、待かほなるもをかし。一尺にもたらぬ鉢を、れのか天地として、いつも、よそより、早う咲き出つるは、あはれも又一しほ深くて、かの井の中の蛙と、いへる事も、これには當らさりけり。佐野のわたりの、雪の夕の、おろし設の、數にさへ入りて、今の世まて、謡はるも、この友なりけりな。

地　東京市麹町區元園町一丁目六番地　白井となこ子

文よめは、文かをり、衣を動かせは、衣またかをり。

吹き來る風もなきに、折々ならぬ香の打しきるはと、心ことに覺ゑて、かたへを見やれば、こは、床の上なる、我か秘藏の梅の、花ゆたかに咲きみちて、馥郁たる香のあたりをはらふなりけり。さては、なつかしき梅なりしよな。霜にもあてじ、雲をもかけじと、嚴冬の頃よりいたはりしかひありて、かくもめでたくにほふぞうれしき。身は、せまき鉢の中にあるものから、そこなはれし色もみゑて、かくもめでたくにほふぞ、實に花中の君子なりける。あはれ、朝に夕に、床の上にすゑられて、はやさるゝもうべなりや。

人

東京市四ッ谷區荒木町四番地　石原庫子

千年ふる庭の老松、葉かへせぬ籬の竹にたくらへ見んとて、去年の秋もとめきたる鉢植の若木の梅、いつしかとつぼみだちて、昨日けふうらゝけき春の光にさそはれて、二ひら三ひらいとゞくもほころびそめたるうれしさよ、まして其香のたへなる、其のいろの清らなる、また似るものなう、中々に老木の松直なる竹にもまさりてなん。

（以下原稿到着順）

佐々有鄰子

鳥このむもあり、茶たしむあり、盆なもてあそぶもあり、碁なかこむもありて、さりどりまちまちなるぞ、うつそみの世の人にはありける。かかる樂のおほきが中に、かしのみのひさりゐけいてて、片山かげに片ひさししつらひ、柴折戸おしたて、世はなれがほなる草庵あり。立ちよりみれば、いさうるはしく小盤のうちなしつらひて、くさぐさの盆どもおきたらはして、上の棚には、露のやどりの梅、中の棚には鎌倉の右府がめで玉ひし紅梅、下の棚には、こきうすき、ちりかかる花もあり、ふふめるもあり、春風に今な盛の香なはなつあり、かかる所な仙人のすみかさやいふらん、おくゆかしき庵なるかも、小盤なるかも。春の日のながきもうちわすれてなん。

畠山千代子

春のならひのいきたなく起きもやらぬを、窓のひまもる、朝東風のいさなつかしくやなら起き出で見るに、軒端の梅は咲かねども、日頃母上のめでつる盆梅の、二もとながら、ほゝゑみて、げにおもしろううちかなりぬれば、魁けてこそ色も香もあれの歌も思ひでられ、句も一きはうるはしく咲き揃ひ、あふるゝばかりの笑顔もて、朝日に向ひ、君か代は千代に八千代さ云はぬばかりの有様なれば、愚なる我身にも、何さなくなつかしく、行く末我身も此の梅にならひてまなびの道にいそしみばげまんさ、かくなん。

畠山百合子

年立つ朝なここほぎてか、君が代の声さもろさもにまがきの梅はほころびそめ、そが根に置きし鉢うゑのも、世の常ならぬ香な洩して、露まち顔なるもなかしければ、所せき賤が庭には似つかはしからぬ

やうに覺えぬ、我がひのもとの國には花の主とも云ふべき櫻をおきてば、此の梅こそ色も香も有りて、昔の人も口ずさみしたひしさかや、我が身も、此の梅におさらざるやう、梅を友となして、およばんかぎりまなばんとて、かくものしつ。

西　艷子

霜深ければにやあらん、遠近の谷間の梅は、未だかをりそめぬる梢もなきを、日頃より、心盡しつゝるかひあらはれて、端ちかくすゑし梢の紅梅のけさしも一つ二つ、笑み初めたるに、いと嬉くて、日向の方へなほしなどしつ。さすがに春めきたる風の、さと吹き來るに、えならずうち薫れるさま、なか〱に、あふき見る老木の花よりも、あはれ深き心地して、つく〱と詠め居たる折りも、軒端近く、鶯の初音ゆかしく、一聲二聲もらしたるも、折にあひるいとをかし。古人の「花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる」てふ歌をさへ、思ひいでられて。

いつのまに梅のかをりは鶯の
谷間のふるすおとつれにけん

堀　琴惠子

前栽も、名殘りなう霜に枯れふして、一面白妙に、おほはれ、窓打つ霰ならでは、とふものもなき、此頃の淋しさ、たゞ埋火をむつまきしものにして、かきおこしながら、いでや、本を讀みて心細さを慰まばやと、本棚の方に、ふり向けば、盆梅の將さに綻びそめて清き香を放ち、友待ちがほなるけはひに、今は心細さも打ち忘れ、いとのどやかなる、初春の心地ぞしける。大よそ、木草の花のさま〱多くある中に、霜氷になやまず、雪の中よりとく咲き匂ひこぼりち

ゞまりだる人の心を、のどやかにするは、此の花の外にやはある、さればこそ、菅公も、かぎりなくめでたまひけめ。

三幣　みさを子

北山おろしさえ〱て、いと寒き雪の夕にこそ、百千の草木も、時わかぬ花は咲くめれど、霜ふかきあしたの窓に、かをらぬを、いかがはせむ。さるを、梅はこと木にすぐれて、花さへ香さへ、いとめでたきを、人目も草もかれぬべき冬の中に、花をひらき、暗はあやなき春の夜に、かをりを放ち、その操は、君子にもたくらぶべきをもて、古より、聖人賢者の、こをめづるもうべなりけり。わらはは、さるたふとき人に、たぐふべきならねど、日頃、こをめでつゝ、色香はうまれつきたれば、比べむやうなけれど、せめて、その操にも、ならはまほしさ、窓のとちかく植ゑて、心の友と親しみつるに、去年の春、友どちの許より、いとめでたき一本を、めぐまれければ、うれしきまゝに、盆栽となし、文机のかたへにすゑて、朝な夕な、培ひ水そゝぎなどして、こむ春をまちつるに、としのうちより、一ひら三ひら咲きそめて、そのかをりの、夜ごと〱、手枕にかよひくるうれしさ、いはむかたなきを、年波立かへりてより、一日二日とすぎ行けば、いとのどやかに、こちふく風の、春の光をたくりきて、白雪のふりかゝりたらむが如く、枝ものこさず、咲きみちたれば、朝日の影さす方にうつして、朝餉たうべむとするをりしも、いつよりか來りけむ、鶯の小技にとりつきて、首かたびけつゝ、しばし、わがものがほに、うちまもりたる、いとをかしきを、まして、二こゑ三こゑ囀りいでたる、またなきあさの、けはひなりかし。

東野　さく子

去年の冬父君とゝもに、そことなく、すゝろありきして、ふとある植木屋に行きしに、色々の、鉢植有れども、冬枯の頃にて、皆寐しき様したるに、梅のみ獨り莟まち顔にけしきはみたる、いとうれたく、めづらかなりき。されば父君にこひて、途にあがなひ、家にもち、歸りぬるが、此頃、やゝ、雪霜の寒さも、和らぎて、おのが時と、ほこりがほに咲き出でたるもうへなり。能くからきに、堪へけるが一入あはれなれば、朝な夕なにめでいつくしむになん。

須磨純子

日あたりよきところに持ち出でたるに、そよふく風に、うちかをりて、懐かしさそふしるべとも、なりぬべきけはひなり。もとたち細くたちきりて、ことことしうあやしげなるに、土に近きわたりより、ますぐにたちのびたる枝に、二つ三つ、咲きそめたる、はたまたしきほどなるなど、いとをかし、あなにくにくし、誰がいたづらに、また咲きあへぬものを、うちおとしけん、とつふやきつゝ、とらんとするに、あなくちをし、くちたりと思ふばかりのもとたちに、ただ一つ蕾のつきたるなりけり。我思はぬより、人にあらぬ罪おほせつる、我罪こそなかなかなれや。鶯の籠のわたりにおきたれば、おのが宿どや、なつかしげに、あまたたびうち啼きたる、あはれあけはなつへう思へど、それもさすがにて、

うくひすを飼ふ籠はひろく造らなむ
鉢のうめをも入れて見るべく

月かげさし入る窓のもとに置きては、菅原の神のからうた思ひ出でられ、身にしむ風の寒さをも忘れて、夜ふくるまで戸もねさゝす。げに置き處なきは、鉢の梅にこそ。とはいへ、すてむはなかなかに。

久間春子

何某の君の、事につきて、東京へのぼり給ふなり、常にめで給ひし、盆栽の梅持て來て、形見にもと、殘し置き給ひしを、やがて、其の君の如く思はれて、霜の朝、雪の夕も、机のほとり、遠ざけず、暖かき日には、日影にあてなどするほどに、蕾のつぶつぶと、三つ四つ、ふくらみたる、嬉しさも嬉し。かくてぞ、殘し行き給ひし友も、よろこび給はん、我身も生しゝかひこそあれ、など、思ひながら、一日、何心なく、庭さき見出でたるに、片隅なる、竹藪の内より、一枝さし出でたるが、未だ蕾などのけしきもなく、一目には枯れ果てたるものゝ如く、やせやせて、風を寒げに、見ねたる、いとあはれなりや。さては、人もかくやあらん、同じ世に生れ出でても、早くよりよき教育を受け、道々の學びに、立ち入りし人々は、我身の如く、常にあつしく、おふけなくも、兩親のみ、心をのみ、いためまゐらせ、身につくべき、さねもなく、空しくあたら年月を送るは、彼の藪の一枝の、見るかげなきにも、劣りたるよ。彼の藪のは、見る目なしとはいへ、時を待ちねて、かしけながらも、花は咲き出でんに、我身はいつを待ちてか、世に匂ふべきふしあらん、など、ひとりごつを、後より、例の乳母が、又何事か打なげき給ふ、さてはいね給はん折もなきをや。常にめで給ふ、この梅見給へ。いつの間にか、一つ二つ咲き出でたり。彼の藪をのみ思ひ比ぶべきかは。この盆栽の如く、身をいたはりてこそ、病も怠り給はめ。神經をいためては、怠りもおそしと、常にくす師も、のたまひしものをと、驚かされて、省りみれば、ねならぬ薫りに、今までうちしめりし心ち、すがすがしく、覺ゆるも、彼の友の君の。志こめ給ひし、たまものなりけら

しと思へば、いとうれし。咲きそめし梅早ゝ友の君に、告げやり給へと、そゝのかされて、

我が病かくはるけよとはちの梅に
君は心をこめておきけん

この書こめておくれと、梅の花心ありけに香に匂ふらん。

吉村ふて子

遠山にのこれる雪は、去年のまゝなれと、野へはさすがに春めきて若菜も、萠はいつれと、なほふく風の寒けさに、つむ人さへもいとまれなり、けふは、日もいとうらゝかなれは、同し心の友たち、二人三人、打つれて、ちかきあたりの、野へにいてぬ。よめなやつまん、れせりやひかまし、なと、いひてあそふに、たか世をのかれし庵なるらん、あやしうみやひたるすまひのあたり、ふく風のいとなつかしきに、垣のひまよりそとさしのそけば、庭にをかしき、梅の鉢のあまたありて、白き赤きさまさまにほひそめたり、みすてがたさにあないして、立いりつゝめてはやせば五十路あまりの翁のいできて、にこやかに、梅の名など、をしへらるゝも、いと情あり。かたがたのこりをしくて、時をうつして、袖をわかちぬ。

名取正代子

いつしかどのみまちつけたりし、はちうゑの梅の花、きのふけふ、三つ四つ、ほころびそめつる嬉しさよ、こと木のはちうゑもくさ〳〵あれど、いまだ木の芽だに見ゆべくもあらぬが多かり、さるを、雪氣の風の寒さもいとはで、折をたがへず、操をかへず、匂ひいでたる其のめでたさに、常盤の松も、色なき心地ぞせらるる、いと嬉しければ、床の間にかざりて、朝な夕な、めではやす程に、ねならぬ匂ひの袖の中にみち〳〵て、たきものなんどは、ひたにけおされつゝ、花の香のあるじがほなる、いとをかし、實にこそ、梅は匂ひよ櫻は色よとはいひけれ、されど、櫻はさらたり、あらぬ木のめも見はそめぬ中より、萬の花の魁をして、雪にたゝ、霜を凌ぎて、匂ひいでたる其の雄々しさよ。武士のはびらにさしつるも、ゆかりやありけん。はた四君の一とめでたゝへらるゝも理なり。昔北野の大神の、あはれとかへりみ給ひしも、實に此花の千代の榮ぞかしと、くさ〳〵おもひ出つるまゝを、かくはものしつ。

錦織さち子

雪霜を。堪へしのびて、春はいち早く、床しき香ににほひ、萬の花の魁けする梅こそ、いともしけれ、分きて、小やかにをかしき枝ぶりなるを、鉢にあげて朝な夕な、丹精をさ〳〵怠りなく、あるは温め、あるは霑をみなどなしつゝ、野に園に、未だ綻びぬ前に、二輪三輪にほひ初むるを、机の傍に物しつゝ、文よむ徒の大の友となして淸き操をめづるこそこよなき樂しみにありけれ。

太田淑子

都は常も賑しきものゝ、暮れ行く歳の市は、いとど目覺しくなんおぼゆる。春の設けの品々、多かるが中に、わきて松竹梅なんど、麗しき陶ものゝ、鉢にものして、商人の、これめせと、聲いさましう勸むるまゝに、足も自から止まり、眼もひかれつゝ、白き、紅なる植ゑ交へたる、二鉢三鉢、購ひ求めて、色をも香をも知る人々にも贈り、己が文机のあたりにもすゑて、新玉の年をことほぐ、客人のむしろにも、匂はせながら、見るが内に、南の枝より、北の枝まで皆ひさしう咲き綻びて、今は大方、盛りも過ぎぬ。今年は、例より

暖がなる心地せられて、昨日今日の、好き天氣に、障子推しやりて庭の一木を打見れば、また綻び初むる氣はひだに無し。さて思ふやう、鉢の物は、室てふ所に養ひたてゝ、しひて花を咲かせ、人皆一時の歡びを買ふをのみ、旨としぬれば、年比實を結びたるもの、見たる事もなし。庭園、叉林などに植ゑたるは、雪霜の寒きを凌ぎ花さくことこそ、遲くもあれ、時至りぬれば、實をば繁みに結び垂れ、或貴きし厨のおものを助け、あるは軍人の糧とも成れるなどを見れば、彼の大器晩成とやらの、古言も思ひ出でられて、ゆかし強ち早きをのみ、めづるものにもあらざらんかしと、獨りごちつるものゝ、これも花の一時とおほねて、香もなき言の葉を、かくなん、

なつかしくすゑて見る哉ことしこその
　ためしかはらぬはちのうめかゝ

小田中　しづか子

消え殘るかきつの雪は、まだ、ふる年の面影もかへなくに、鉢うゑの梅はゝはや、折知り顏に匂ひ、云ふばかりなう、あいらしく、雪の中より、げに、武士の大和心にも、たとふべく、たをやめの操にも、くらべつべし。されば、此の花よ、唯に、人の目をたのしましむるみならず、人の身の、よき鑑ともなりぬべし。片山里の、しづかやに、あまる香りを、愛づることの、うれしさに、拙きゝ言の葉をかきつらぬるになん。

田中ひろ子

むかしより、人々のいたくめではやせし梅の花ばかり、世にゆかしきものはあらざりけり。また鉢に植ゑて窓近うながむるも、一入あはれなり、そも、此花は、雪霜の、まだきえやらぬ寒き中をも堪へ忍びて、色香いと清く、うるはしう咲き出で、あたりいとかぐはしく、遠方人の袖さへ隔てぬは、目出たくも叉人の心をして深き感を起さしむ、思ふに多くの人の中には、忍耐てふ事つゆばかりもなく、夏冬の氣候つよきすら凌ぎ難しなど、自らの業をおこたり學ばざるものあるを、此花に向ひしは面なかるべし。思へば口惜しく、はた、なげかはしき次第にこそ。

宮原貞代子

寐すごして起きいづれば、朝日ははや、坐しきの隅まで、かゞやきわたり、雀の三つ四つ囀りかはして、朝庭何となく、もの靜かなるに、盆梅のにほひ、えもいはれず、顧れば、机の上に坐をしめて、やさしき花の綻ひそめたるなど、實に畫のものゝ如し。いざや、このめでたき盆梅のために、歌をやよまん、畫をやかゝんさるからに、側の少女、文箱の方へ、靜に歩めば、風やはらかに來りて、ふさやかなる髮をなで、また手にもちたる短冊を吹く。

佐々とし子

いみじき寒さに、火桶のもとを、離れず、かきおこすより外なき折しも、親しき友どちの元より、鉢に植ゑたる、梅の花の、はつかに、咲きそめたるをおこせたり。いまだ寒けさきびしく、思ほゆるも、心つくしの、その故か、いつもより、早う咲きつるを、獨りながめんも、ほいなきわざなればとて、

はやくよりこゝろ盡しのかひありて
　色香ゆかしくにほふうらめかな

なとあり。軒端の、梅にうぐひすの、音つれそむる枝などは、世の

常なれど、白雪ならでは、花紅葉の色もなき頃、思ひもよらぬ、めづらしさに、

　さむけさも君がなさけにわすられて
　　早くもはるのはなを見るかな

といらへたりしも、いとをかしうなん。さて床に、すゑ置き、心しづかに、眺むれば、枝ぶりの、こよなう面白く、つぼみ勝ちなるは、こよなき樂みの種なりかし。

林　久子

昨夜より降りつもりし雪に、あれはてし庭も今朝は見どころあらんなど、ひとりごちつゝ、まどのとあくる袖に、ゐならぬ風のかよひくるがあやしさに、あさつけじと思ひし庭におりたちて見れば、去年つき木したる鉢の梅の、うちかをれるなりけり。いとうれしくて、雪かきはらはんもさすがにをしければ、そがまゝ文机のほとりにとりいれて、

　いさぎよき梅にならひて今日よりは
　　まなびの道をいとゞつとめん

岡澤のぶ子

去年の暮、市にまかりし歸るさに、さゝやかなる梅一鉢あがなひ來て、夏に冬に、いたはりし程に、冬の中ば頃より、枝毎にけしきだち、莟とも見ゆるもの、十ばかりつきければ、一しほ心をつくし、あるへき鉢にうつし、うなゐ等にも、な手折りそ、花咲きなば摘みな取りそと、おごそかにおきてつゝ、今日か明日かと待ちわびしに、ある朝、やよ鉢の初花咲きにけり、疾く起きよと、父君の宣ふに、さめて惜しまぬ夢の年枕など、踊しつゝ、帶結ひ〳〵、おり立てば、二三輪けざやかにほゝゑみけり。あはれ、此花の爲には、一日の春の長かれと、希ふもをかし。

岡澤りん子

朝にけに、待つ人の香にあやまたるとも、愛でゝつくしむ身にはものかは。机の上にすゑ置ける梅の、日ころ咲きゐるに、文よみあける時、眼倦ほさるゝ折、いろたへに、香きよらなるには、いつとてもをかしくあはれに思はぬ事あらじかし。さるを、駒に乘り、車にものし、梅見にとて、遠きあたりさまよふこそ、うたて思ほゆれ。

　はちに生ふる梅の匂ひは月か瀬の
　　色にまさりてめでられにけり

飯塚むつ子

この盆梅は、いつの春なりけむ、伯母君より賜はりて、年頃手馴らしつるを、今年も又契りをたがへず、咲き初めつゝ、いと美しうかくはしきは、何も云はずめでたしや。花はあれども、すべて梅の姿けだかく、匂ひゆかしきは、似るものなく、況して春より先きに、寒さにもさはらず、雪の中よりも咲き出でゐるは、いとをゝしく、げに花の兄なりけり。あはれ斯くかずならぬ身も、たとへ此の花の美しき色には、類ふべくもあらずとも、いかでかの春より先に咲き出でゐらんやうに、いそしみ勉めて、進み行く世におくれず、かの霜雪にさはらざらんやうに、をゝしき心もて、いかなる憂き事にも打挑まず、夫に仕へ家を治めつゝ、「闇はあやなしと」云ひけんその匂ひの、かくはしき名を擧げばやなど思ひつゞけつゝ、床の上を打見やれば、梅は又一しほかをりつゝ、妾を勵ますに似たり。思へば伯母君の、これを妾に賜はりたるも、故なき事にはあらざりけり。

佐藤清子

妾の父は、年老いてければ、こさ〳〵しき浮世の塵をいさひて、さある山里にひきこもり、日頃好めるみちさて、草木をいたく園生に植ゑ付け、朝な夕なそを愛でつゝあり。妾も其のにゝにしを受けて、生れつき好みつれは、そが手入れのたすけをなしつゝ、めではやしぬれど、其の内にも、一しほの心をこめて、水をそゝぎ、目をつみぬる盆梅を、つく〴〵思ひめぐらせば、あはれ、この花は、世にめでらるゝふしもありて、いさ〳〵めてたきものにしあれど、岡の梅は、おのがむき〳〵、のびやかに、枝を出しぬるを、これはむけにも生ひならんさする幹を、人手におしたわめられて、せんすへもなく、わだかまり、花もおのづからいさしく、色香もうすく、げにもあはれなり。又なか〳〵にうたてきことにこそ。

塙いさむ子

幹は蛟龍の臥したらんが如く、今は苔さへをかしうむして、また冬ながら室の時ならぬ暖さにあざむかれて、色もうすくこく、折々おさづるゝ東風に、ゐならぬかをりを送り、姿もさゝやかにて、しかすがにいさめでたきは、盆梅にこそありけれ。されど、よく〳〵思ひめぐらせば、さあるまじうなむ。其故いかにさなれば、こは人の手業をもて、しひて其のぶべき枝をたわめ、且いまだ開くべき時こぬに、あざむきて咲かしめ、用なき人の、つれ〴〵のすさびにせらるゝものなれば、あはれやうつろふことも亦早く、之を人に譬ふれば、まさしく、うかれめか、はた醜人のたぐひなるべし。彼の野邊に咲匂ふ梅こそ、自らの姿氣高く、雪霜のきびしき寒さを凌きて操正しく、花さくべき春にあひて、百花に魁けて、色香を起すなれ。これ、人の業さげて、朝日の昇るが如く、名を世にあぐるに等し。此さ彼さ、その貴賤優劣のけはじめ、はたして如何にぞや。されば、萬のをさたる人々は、野邊のにあやかりて、はちの梅が枝にならはぬこそよけれ。

岸田はつ子

庭のかたへにすておきし鉢植の梅の、折しりがほに咲きいでたるやさしさよ。なへての草木は、なほ冬ごもれる頃ほひ、霜にもをれず雪にも挑ます、雨また風の苦しさをも、いさようたへしのびて、さきたる花は、にほひ殊に、清き心はおのづからいろにしられ、氣高き操は香にあらはれたり。かくてむすべる實は、疫病をさへふせぐべきいさをありさか。あはれ、ながいみじき德は、實にたぐふべきものはあらずかし。昔なにがしが、花立花を見て、色さへ香さへその實さへさ歌ひけんも、我は此の木にぞいはまほしき。されば、萬の草木のさきがけさめて、年の初の飾さして、もてはやさるゝもうべなりけり。あはれ、めでたきはこの花、にくきは此の木にこそさ思ふに、例の火桶を友さ、明しくらす身の、やさしくなりて、明日よりは、此の木にならひてさ、文机のほさりへもて來つつながむるも、今更をこがましや。

河村君子

亡き父の、こよなうめでられて、鉢にうゑ給ひし梅も、さすがに、日毎〳〵軒近く來鳴く鶯にさそはれて、二片三ひらさきそめぬ。あはれ、父上のましまさば、如何に喜び給ふらむ。たさひ、東風心ありさも、などかせん、など、思ふ折りしも、伯父君の來り給ひて、共にめでらるゝ末いさ云ひにくげにゆつりくればやさ、のたまふに、

われも亡き父のかたみを人に譲らんも、いさのぞます、さればさて、伯父君にむげにいなまもんいさあしければ、取敢へずかたへの紙さりよせて、

勅なればいさもかしこしうぐひすの
　宿はさとはゞいかゞこたへむ

さ、したゝめ見せまつれは、伯父君も感じ給ひてやみぬ。

井澤たな子

さくらに比べて、おのづから劣さも見らるべき、姿を備へたるは、實に梅なるべし。されはにや、世の人は、梅は御國のものならで、島の韓づるもろこしより、渡り參うで來つるものなれば、木さまは更にも云はで、枝くせ〲しうねだけ、花のかしけだるなど、すゝき葉に、おく露ばかりの見どころやはあるさ、いみじうあげつらふものゝ多かるが、今の世の中は、なべてくだりにくだりたれば、花の妙に麗はしく、姿の優にやさしきさくらをのみ、こよなうめでたゝへて、雪あらしのからきくるしみをもたへしのぎ、然だにもまだ知らぬ、春に先立ちて、香りゆかしく匂ひ出づる梅をしも、忘れたらんが如く思はるゝぞ、いさあやしき。梅は、こさ花にまさる操をもちてけりさは、われも聞きつるなべに、さは思ひき、されは、梅櫻をもてはやすにつけては、心もたのづからにこそなり。櫻はなまめかしき歌妓の如く、梅は﨟たけたる官女の如し。さくらを見てはおのがさま〲浮き立ちて、身もまがふがに打ち興ぜらるゝぞ、いさあやしき、さばれ、梅の花に　ひては、それさなう、むらぎもの心の濁りもすみて、あまさへ、身の怠りの恥かしさを覺ゆるなど、ひさへに、異木に秀づる德な、そなすたるすゑならんかし。人も世のみだれに、しまざる操なく、あだに散るこさ さくらの如けんは、誰さてめづるものやあらむ、世には、柳のしなひありて、櫻のこびたかざれる婦女子の多かめれど、梅に似る操をもつものゝ少なきは、實に玉の盃に底なき心地のせられて、そゞろに汗こそあゆなれ。おのれ、日ごろの、造花の折りにさて、ものしたれば、かたへにそなへて、操の鏡さもせむ。

廣田さめ子

車にて、都大路をいそきけるに、さと吹く風のはならぬ匂ひしけり何ならんさ、左右さ見れは、少し先の家に、はちうゑの梅の、早くも咲き初めたるを、門近う出しけり。たゞ見すごさんもほいなく思ひ、車をとゞめて、主をよび出し、こは賣物なりやさとへば、さなりさこたふ。いさうれしく、かれこれ見る中に、高砂さ名付けし、梅あり。花はかされて、ねたふりおもしろく、名さへめでたければこれをもさめて、車にのせ行くほさに、路すから、我も梅もほゝゑみつゝ、家にかへり、先づ我が文机の前におき、ひさりながめて、法師ならねさ、さめこかし梅さかりなる我やさを、など口すさびつゝ、さひこん人もかなさ、まちにけり。

榊原みさを子

いみじう、雪の降りつもりたるあした、かなたこなた、變れる樣のいはん方なく、をかしきに、ねんに立ちいで、つく〲、ながめやる折から、さと吹きおろす吹雪の、たゞならす、なつかしきに、待ちあくがれつる、垣根の梅は、つぼみさへ、なか〱に固かりつるを、あやしやさ訝り、ひさりごつに、こなたの瀬戸に、あわたゞしうはしための聲して、こは今なん、田作る翁の、孃樣が、文机の友

にもがなさて、おこせつるにて侍る、と見そたはせさて、持て來しは、二本ばかりの紅梅の、鉢植になんありける。さもこそ、ゆかしかりしは、此君なりけり、いさと嬉しうて、まづ、埋火のあたりにおきて、打見れば、僅に三ツ四ツ、ほゝゑみたるが、降つもる雪に、いろじろうほのめきたる、色香はならず、つぼみさへ、あまたけしきばみて、すきもる風に、一きは、かぐはしう、袖にも袂にもかをりこめて、外にしられぬ、春の心地、いひしらず、長閑し。さればあすにもあれ、日うらゝにさしのぼりなば、香を慕ふ、鶯の宿はいづこと初音をこそ、此伏屋には洩しつべかんめれど、いと嬉しくも、樂しうこそ。

岡田支子

春は、木どもの花の美はしきが多けれど、梅こそは殊にめでたものなれ。まいてみ雪ふる冬の末つ方より、室咲きの一輪二輪咲き出てたる珍らしさもうれしさも言ひつべし。されば、紅のあざやかにふりいでたると、眞白きがさむげに咲き出でたるとを、淸らなる鉢にうつし植ゑ、朝夕文机の上に置きて、文學びの友とはなしつゝ、さて思ふやう、學びの道もかくこそありけれ、はげしき風をしのぎ、氷る寒さを得耐へでは、芳ばしき名をもあげがたからむ。人と生れて草木にも劣り、いたつらに怠りなば、花さく春にもあはずして、此花にもはぢなんと、自ら戒めて、かくはものしぬ。

師岡千代子

ある園丁のもとより、鉢植の梅うるはしきをおこせぬ。三越路の奥今年はまして、降積む雪深ければ、庭のも、垣根のも、未だ雪の中に埋れてのみあれば、いつは匂ひ出でゝ、鶯誘ふしるべともなりもやせんと、いと覺束なきばかりなるを、この梅よ、木立は三尺にも足られど、幹のながら、空虚になるまで、年古り、枝は、しだりさがいふさまして、數多あるがその枝のこゞと、すき間なく、蕾の付きて、あるは、匂ひいてんとし、或は、既に咲きいでゝ、其の花さへ、香へと、はならぬさまの、早くも、春しり顔なる、實に、鶯も、春も、はしらぬ香なるべし。されば、いとめつらしく、嬉しくて、すゑかしつきつゝ、夜の間の風は、吹き來れども、なほ朝はまだきに起き出でゝ見、晝は、學校より歸るおそしと、先づながめて。日に日に、咲きまさる色香を愛で、夜はまた、枕に通ふ香をなつかしみづゝ、友どちをつどへては、歌つくり、文よみなどして、あくかれくらしつ。

さるに、ゆくりなく病にかゝりぬ。花のもと、いと心もとなけれど、爲べき樣なくて、日を經ぬ。かの梅やいかならんと、行きて見れば、早影も止めず、散りはてゝ、空しき枝の、殘れるのみなるぞ、淋しけなるや。さばかり麗しく咲き匂ひ、隙間なく、花の數ありしものを、いかなれば、一つだに、枝にのこらで、實をも結ばず、散りはてぬらん、可惜しき限ならずや。されど、今は未だ、眞の春にあらず、ふりつもる深雪の中、大方の梅は、蕾もたゞ、枝にこもれるに、この花の、斯く早く、咲きしは、全く、かの園丁が、冬の初より、暖室の中に入れ、置きて、或は、火もて室をあたゝめ、あるは、肥料あたゝめにして、與へなど、其巧なる業もて、宛ら、春の頃の如くになしたればこそ、この梅は、と咲きしなれ。されど、此は、眞の時節ならぬを、強ひて、咲かせたるなれば、よしや、花の數は多く、花はうつくしさ ても、つひに一つも實を結ぶ事なくして、かくは

はかなく散り果てたるなりけり。
さるを、もし、この梅も、庭又は、垣根のもの丶如く、秋の霜を經、冬の寒を凌ぎ、長閑き春にあひて、初めて、咲き出てたらましかば、久しくも保ち、愛度たき實をも結びて、世の益ともなりなまし。こは、この梅のみにあらず、萬の業も、又、しかなり。各。順を經、序を逐ひて、つぎつぎに、進み行きて、後にこそ、遂には、成り就ぐることを得べけれ。其を、或はいそき、あるは怠りて、一時になさんとしても、能はざること、この梅の、如くなるべし。徒に、人に魁せんとするよりは、大なる器は、晩れて成る、といふことを、守るにしかず。あはれ、つとめざるべけんや、戒めざるべけんや。と、打思ふま丶を、かくはものしつれど、こも亦、色香ちりぬる文とや、笑はれなんかし。

大河内　長戸子

まだ雪ふかて、風さねわたりて、鶯のさ丶鳴もしどろに、野邊の梅はつぼみいまだかたく。笑ふけもなき早春の頃。市路の夕さり。灯を花とちらして。いとはやも色にいで、に匂ひこぼる丶小梅といへるを、飾りひさぐ肆のはなゝゝしさよ。八重、一重、色濃き。淡き、臥せる龍のさましたる、栁なすしだれたる、蛛手に枝さしかはしたるなど、よくもかくは造りたてたることよ。心なき草木も土かひ。水そ丶ぎておほしたてぬれは。他に魁けてなつかしき樣ににほひ、やさしき樣にもなるぞかし。まして萬物の長といはる丶人に、敎の土かひ、おきての水そ丶ぎて育てなば、などか、賢より賢にうつさはうつろうめやと、双か岡のひじりかいかめ給ひけんことなど思ひ出でられぬ。兒童を養育するてふ、おもき役目を負へるわが身には、盆梅見るにつけても、身をせめ當られて、及ばざらんことをおそる丶になんる丶になむ。

●女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

題　住所　姓名
…………………………
…………………………
…………………………

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは首二を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題　住所　姓名
……、……、……。……。
……。……、……、……、
……、……。……、……。
……、……、……、……。

用紙は半紙二つ折の事。字體は詳明に記し、句讀點を施すべし。

總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて、個々に離て認むべし。書式は違ひたるはすべて沒書とす。

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さす金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊前金（三ヶ月分）	五十五錢	
十二冊前金（半年分）	壹圓	
全國無遞送料		

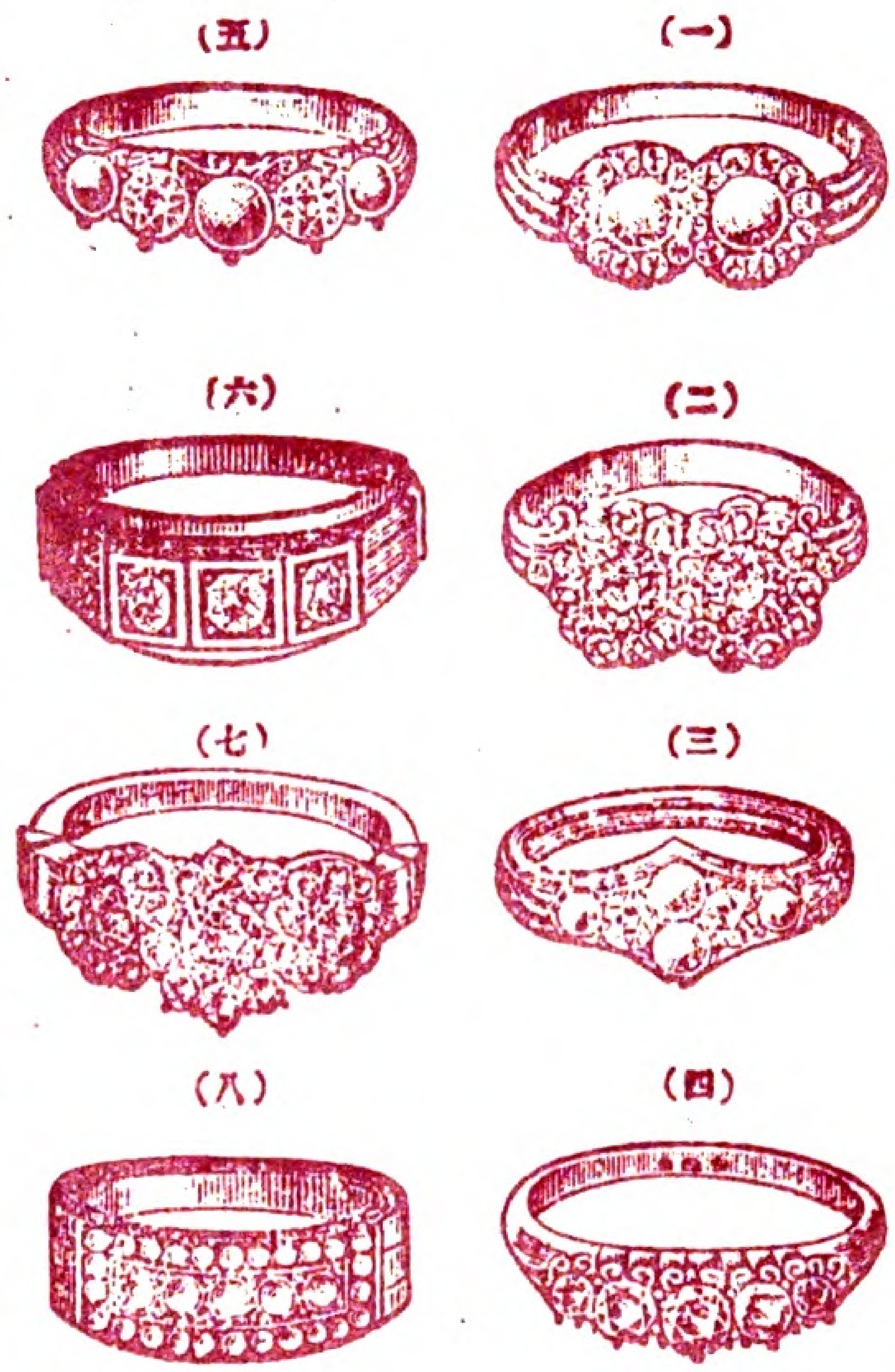
明治三十一年二月十九日印刷
同年二月二十日發行

編輯兼發行人 東京京橋區築地二丁目二十一番地 川崎直衛

印刷人 東京京橋區南八丁堀二丁目十一番地 並木艮雄

發行所 東京京橋區築地二丁目二十一番地 國光社（電話番號本局八八）

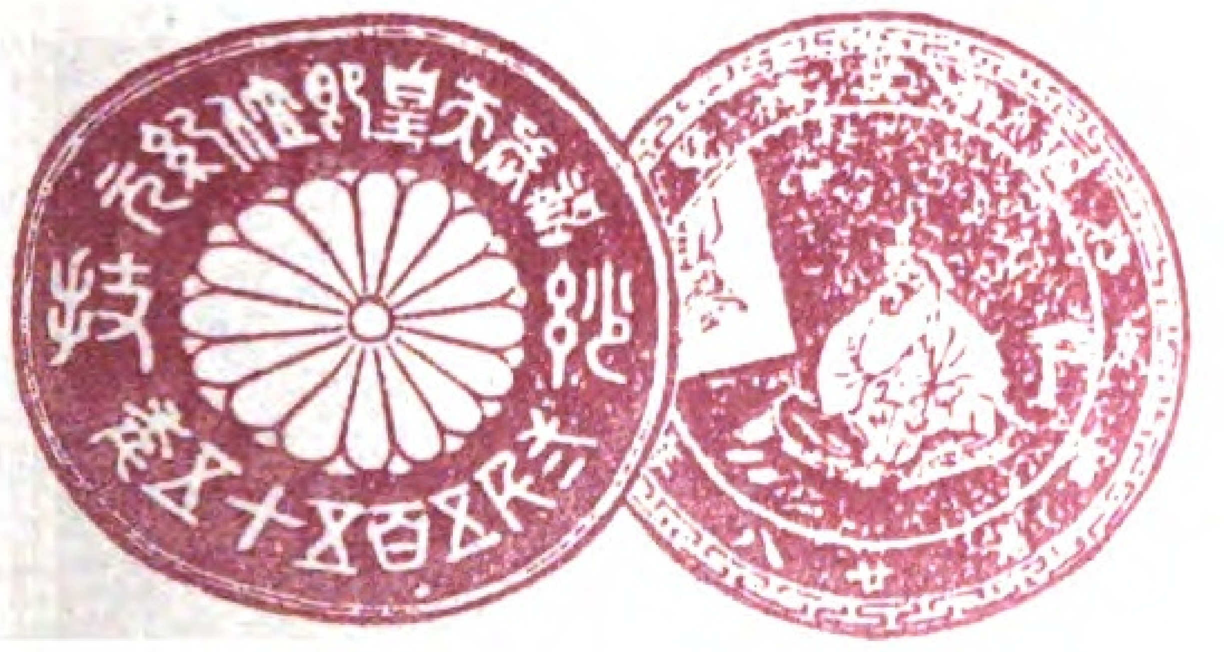
寶石入指環



（一）ダイヤモンド及キヤツアイ入甲價八十五圓●乙價七十五圓
（二）●全眞珠及チパール入甲價參拾參圓●乙價三十圓
（三）ダイヤモンド入甲價參百參拾圓●乙價貳百八拾圓
（四）ダイヤモンド及眞珠入甲價百貳拾圓●乙價百圓
（五）ダイヤモンド入甲價貳百圓●乙價百七十圓●全ダイヤモンド及エメラルド入甲價百五十圓●乙價百貳十圓
（六）ダイヤモンド及キヤツアイ入甲價貳百圓●乙價百七十圓●全ダイヤモンド眞珠入甲價百八十圓●乙價百五十圓
（七）ダイヤモンド入甲價百八十圓●乙價百五十圓●全ルビー及サツフアヤ入甲價五十圓●乙價四十三圓
（八）ダイヤモンド入甲價五百圓●乙價四百參十圓
眞珠入甲價參十圓●乙價貳十五圓　（市外ハ送料金貳拾錢）

此ノ外金又ハプラチナ地ニ種々ノ寶玉ヲ裝嵌シタルモノ及彫刻品夥多有之候間御來車ノ上現品御一覽下サルカ郵便御注文ナレバ寶石入若シクハ彫刻付等ノ區別ヲ指示シ代金御送附アラバ其價ニ相當ノ品ヲ精撰シテ調進スベシ若シ貴意ニ適ハザル時ハ御講求當日ヨリ一週間（弊店商品中時計ニ限リ三十日間）以內ハ（府外ハ相當ノ往復日數ヲ加フベシ）凡ソ其物品ニ破損或ハ毀傷ナキニ於テハ何時ニテモ需ニ應ジテ他ノ物品ト交換シ又ハ原價ニテ買戾シ聊カタリトモ其爲ニ手數料若クハ割引等ヲ加ヘザルベシ其他ノ手續ハ屢々各新聞紙ニ廣告スル所ノ弊堂店則ニ詳ナリ

妙技一等賞牌



東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八番地、
時計及寶玉類貴金屬美術品商（電話番號本局三百三十三）天賞堂
東京市神田區小川町十九番地（電話架設中）天賞堂小川町出張所
大坂市南區心齋橋北詰北二入ル（電話番號七百三十三）天賞堂大坂出張所
名古屋市本町通玉屋町二丁目十七番戶　天賞堂名古屋出張所
廣島市大手町三丁目六十五番地　天賞堂廣島出張所
熊本市唐人町通上鍛冶屋町十番地　天賞堂熊本出張所
長崎市萬歲町上野屋方　天賞堂長崎臨時出張所
北海道小樽色內町越中屋方　天賞堂小樽臨時出張所

明治二十四年八月四日內務省許可
明治二十五年三月十二日遞信省認可

（印刷所　東京國光社印刷所）